

平凡は、いちごと共に
消ゆ

フリードg

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

最近続編があるのを知って、結構喜んでたり。月刊誌なのが残念。勢いで昔書いてたのを投稿。駄文なのは許してください。

これは、作者の中で人気1位の西野さん。オリ主と西野さんをくつつけたかったが為の小説。

つまり 真中くんは東城さんとかくつつくべきだったかな、と今でも。

投稿10分後……

ハーメルンで同じ題名のいちご小説発見。なのでちよこつと変更しました。
タイトル名が思いつかんで本当にちよこつと……。すみません。

2017 6/27 タイトル考えてみたので変更。お騒がせしました。

1
1 話

1
0 話

9
話

8
話

7
話

6
話

5
話

4
話

3
話

2
話

1
話

0
話

121

108

92

82

72

60

49

38

26

18

9

2

2
4 話

2
3 話

2
2 話

2
1 話

2
0 話

1
9 話

1
8 話

1
7 話

1
6 話

1
5 話

1
4 話

1
3 話

1
2 話

288

275

259

246

230

215

209

198

188

176

162

150

134

目次

3 3 3 3 3 3 2 2 2 2 2
6 5 4 3 2 1 0 9 8 7 6 5
話 話 話 話 話 話 話 話 話 話 話

ブ
ラ
コ
ン
+
⋮

437 422 411 398 384 371 355 346 334 320 312 300

0 話

「ねえねえ知ってる？」

「えー なになに？」

「ほら、放課後の屋上の話——」

「あつ、それ訊いた事ある！ 何か夕方ごろになると……出るんだってねー？」

「え？ 私は別の話を訊いたよ？ んー つとすつごく綺麗な歌声が聞こえてくるよとか？」

「歌って、それ断然ゆーれいじゃん！ 出た〜！ と一緒じゃん！」

「でも綺麗な歌声らしいよ？」

「綺麗だから何だか怖いじゃん！ ……引き込まれたら逃げられなくなるよ〜?!!」

それは何気ない いつもの女の子同士の話だ。

女子中学生はこの手の噂などでは大いに盛り上がる事が出来る。……けど、生憎実際に確かめに行くまでは出来ないんだ、それが私は以前から少しばかり気になっていた。

その噂は最近聞き始めたばかりだし、ありきたりな学校の階段ものじゃないのだから。怖いのは得意！　と言う訳じゃないんだけど、何故だか、今日は特にこの話には興味があつたみたい。

「ふ〜ん……」

何だか今日は特に気になつてしまうから、今の今まで別の話、関係ない話をしていただけで、いきなりで悪いけど話を變えてみた。親友と一緒になら、怖いのも全然へっちゃらだから。

「ね？　行つてみない？　今日の放課後！」

「ええっ!?　放課後つて……お、屋上？」

「そーだよ？　さつき、皆で話してたヤツ」

「え、えつとお……　きよ、今日はちよつと……用事があつて、ね？」

ついさつきまで一緒にカラオケ行かない？　と話したばかりなのに、もうちよつと上手い言い訳は無いのかな？　と思わず笑つてしまったよ。

「えー　付き合い悪いなあ。別に怖くなんてないつてば」

「こ、怖がつてる訳じゃ……」

「あははっ　ユリつてば動揺しすぎだよ。ま　いつか。何となく言つてみただけだし」

「で、でしよー？　あそこつて基本立ち入り禁止なんだから！　バカな事言わないで今

日も大いにカラオケで盛り上がるよ！つかさもっ！」

私の背中をぐいぐいと押しながら行くよう催促する親友のユリ。

ああ…… 思い出したんだけど ユリは怖い滅茶苦茶苦手だった。

前に、『彼氏が出来た時の為の映画デートに付き合つて！』と、彼氏を作つてからやいなよ！とツツコミながらも、面白そうだし、一緒に遊ぶ様なものだから、とついで言つた映画の内容が……ガチのホラー系だった。

なんでも、怖かつたら隣りに座つてる彼氏の手をぎゅつと握りたいとか、終わった後 怖いから家まで一緒に、等々のシチュエーションが出来るかららしいんだ。

だけどー、結果は散々なものだったよ。

ホラー映画。まだ前半部分だと言うのに、何だか雲行きが怪しくなつた。本当の本気で怯えていた。特に最後のシーン。テレビの中から白い服を着た髪の長い女のひとが出てきた時、両手で耳を塞いで、目を思いつきり閉じて 凄く震えていた。

正直、私も怖かつたんだけど、ユリの方が心配だったから 映画の内容全く頭の中に入つてこなかつたよ。……ユリ曰く、それは幸福だったって事らしいけど…… 映画代は痛いよ？

「あれ？ ユリ。携帯光ってるよ？」

「あつ ほんとだ。ありがとーつかさ」

ふと、見てみると ユリの鞆から見えるユリの携帯が点滅している事に気付いて教えてあげた。落したりしたら散らばっちゃうし、何より変なヤツに盗まれたりする可能性だってあるから、鞆はちゃんとフラスナーまで締めましょう！ って言い聞かせたばかりなんだけどなあー。

「わー、つかさつごめんっつ！ 今日、弟の誕生日だったんだ!! は、早く帰らないと……っつっ！」

「え？ サト君の誕生日って今日だったんだ？」

「うん——。ねーちゃん遅いっ！ ってぶんぶんだつて……」

「あははっ、相変わらずのお姉ちゃんっ子だよねえ〜 何だかそう言うのも可愛いなあ。羨ましいかも」

「駄目駄目。幾らつかさでも、サト君は上げないよー！」

「取らないってば。ほんつと弟君の事好きだよね？」

「そりや当然。私の理想の男性に育て上げちゃりますので！」

危ない方向にいかないでね？ と脳裏に思い浮かんだが……口に出さないで上げたのはやさしさなのかな？

それは兎も角、ユリの家と私の家は正反対で、いつも用事が無かつたら皆と一緒に遊んだり、話したりするんだけど、今日は皆用事があるっぽいんだ。

「じゃあまた明日ねー つかさー！」

「うんっ！ また明日ー！」

ユリも帰っちゃったから、久しぶりの1人の下校になるなあと思つてただけど……、やっぱり何だか気になるから、私は踵を翻して学校の方へと戻る事にした。

「ん？ おい西野。もう下校の時間だぞ？」

「あー、すみません。沖先生。ちよつと教室に忘れ物しちゃつて……」

「ああ、そう言う事ならまだ鍵は閉めないでおく。……だが、6時までには帰れよ？」

「はーい」

途中で先生とも出会ったけど、何とかうまい言い訳をして回避！

そう、これくらい自然に出てこないとダメなんだゾ？ ユリ君っ！ ……嘘つきが好きつて訳じゃないけどね。

それは兎も角、さつさと屋上へと続く階段を上つて、ちよつぱり疲れちゃつたけど、勢いよく扉も開いた。扉を開いた先の景色に、私は眼を奪われた。

「わあ……すつごい。夕日、綺麗……」

ちよつぱり冒険してゐるって気分だったんだけど、大きな夕日を見たら 何だか全部吹っ飛んじやったよ。その代わり別な事が頭の中に浮かんできちゃった。

『ああ、ロマンチックな出会いを試してみたいなあ。ほら、彼氏と夜景の見えるレストランとかっ！ オーロラとか！』

何だか 判らないけど この時、ユリの言っていたことが頭の中に過つちやつてたよ。

確かにとても綺麗だし、好きな人と一緒に綺麗な景色を見るのって素敵だとは思うよ？ でも、オーロラってなんだヨ！ って 今でもはつきり言えるよ！

「つとと、目的忘れてた忘れてた。ええつと、出るとか出ないとか……。うくん」
今はほんとと夕日、とても綺麗！ それ以外の感想はないんだよ……。

それっぽい声も無いし、風の靡く音と間違えたのかな？ とかも思ってたけりしただけど、どうしても それっぽく聞こえない。

まあ、噂なんてそんなものだし。

「あーあ。ユリも呼べばよかったかな？ 私が彼氏になってあげてく、一緒にこの景色みてーっ ……って、私は女の子と付き合うつもりないってば！ 彼氏役彼氏役」

自分で自分の事をツッコむなんて、ちよくつとむなしかつたりするけど仕方ないよね。いつものメンバーは誰も今日はいないんだから。私の事をビシッ！ とツッコめるのは私だけなんだから！

「はあゝ もう帰るかな。流石に夜の学校は ……絶対無理だし。そもそもそんな事したら怒られるから、違う意味で怖いし ……」

と言う訳で今日はお開き！ と思つて帰るとした時だったんだ。

『つ』

屋上に靡く夕方の風につて——何かか聞こえてきたのは。

1話

┌
└

それは夕風に紛れて確かに聞こえてくる。

最初はとつても怖かったけど、それ以上に想ったんだ。

「——ほんとに綺麗な、素敵な歌声。英語、だよな？ すつごく上手……。外国のひとみ
たい」

私は思わず聞き惚れてしまったんだ。

目を瞑って、風と歌と共に微かに聞こえてくるハミングを感じ取ると、全てが上手。
まるでプロのひと？ と思っっちゃう程、綺麗で……。

『

本当に心地良いよ。……無料で聴いちゃうのが悪い、って思っちゃう程。

「これって…… 確か 有名な映画の主題歌だったよね……。うん……。でも、どこから聞こえてくるんだろう」

確かに少しばかり怖い気持ちはあったけど、それ以上にすっごく気になった。カラオケは何度か言ってるし、友達の皆も上手な子は沢山いるんだけど……。皆にはちよつと悪いけど、比較にならないって思っちゃう。

微かに聴こえてくる位なのに、すっごく透き通って……。。

「うん……。心に響くって言うのかな……。？ この映画って 悲しい物語だったから、って言うのもあるかもだけど。んー……」

もつと傍で訊いてみたい！ って凄く思った。ゆーれいが歌ってたって良いかも！ って本気で思っちゃったかもしれない。

でも、ここは屋上で 軽く見渡してみただけど人がいそうな場所はもう……。

「うーん。もう あそこしかないかな？」

屋上は学校の中で一番高い場所だけど、その更に上があるんだ。

一度だけ上がった事ある。

あの時も梯子を登るのはちよつぱり怖かった。風がちよつとでも吹いてると更に怖かった。……でも それ以上に困った事があつたんだ。下にいたユリにパンツを見られちゃつて、いちご柄を大きな声で言われちゃつた事。

あの時は 顔がいちご見たいに赤くなつちやつたけど、今は一人だから良いもんつ。可愛いつて言われてすつごく恥ずかしかつたけど……良いもんつ！

つて、そんな事より 何よりも今聴こえてくる綺麗な歌をもつともつと傍で聴いてみたいから、ばんつなんてそんなの、カンケ―無いよ。

「ちよつぱーんつ」

私は1%の恐怖心と99%の好奇心を胸に抱いてこの上を登つたんだ。

まだ見た事がない景色が見れるって思っちゃったから。この綺麗な夕焼けの空よりも綺麗でドキドキする様な景色が……。

「よい……しよつと。もーちよつと……ふいゝ風つよい。んつ下みない下みない」

高所恐怖症って訳じゃないけど、それでもやっぱり限度はあるから。高すぎる所は……得意って言えないからね。

』

間違いなく、あの歌声が大きくなってるみたい。

うんつ間違いない。この先だよ！でも、もう歌が終わっちゃいそうかも……。あまり聞いた事無いけど、この辺が確か最後の方な気がするから！

「ま、まって 終わるのもーちよつと……！ ついたつとー！」

漸くたどり着いた！

えつと……、うん。とりあえず――。

「……………ん」

ゆーれいじゃないみたい。

ちゃんとした人間。もつと言うなら制服着てるし、私と同じ学生だよ。男の子。ちやつかり アイマスクをつけて 寝っ転がってた。

「ふう……………もうひと、眠り……………」

歌をうたい終わったから もう満足したー、って感じで眠ろうとしてた。

なんだろう…… このひと すつごく気になる。

顔が見えないなあ。だれ……………だろ？ どここのクラスの子？

「……………」

「……………」

いつの間にか、私結構傍にまで来ちやつた。
声——かけてみようかなあ、つて今私は思ってる。

寝てるの邪魔しちゃ悪いって思うけど……、もう放課後だし、6時までには帰れって
言われてるし、起こしてあげた方が良いんじゃないかな？ つて。

「……………えーつと もしもー「ん？」っ」

ほんとビツクリした。

殆ど同時だったから。私が声をかけたと同時に、彼はアイマスクを取っちゃった。

当然だ！ つて思われるかもだけど すっごい近くで目が合っちゃった……。こんな
な傍で 男の子と目を見合うなんて、最近ではお父さんとも無かった事だったよ。
だから、すっごくビツクリしたんだ。

「わあああつ!？」

「っ…………!？」

お互いビツクリしたんだと思う。

私は思わず尻もちついちゃったし。…………あー お尻痛い。

「……………」

彼はじい と私の事をみてた。お昼寝の邪魔しちゃったから怒ってるのかな…………？

今 お昼じゃないけど。

でも、違ったみたいなんだ。

「ふう。…………ほら。立ちな」

手を差し出してくれたから、怒ってるようにも見えないし。でも、肝心の私は力抜けちゃったみたいで、手をとれなかった。なかなか動けなかったよ。

「えと…………、その…………」

「そのままじゃ、多分マズイと思う」

それで、彼はまずいって言ってるのは判ったんだけど、なんでかは判らなかった。

「え…………？ なんで…………？ ……なにが？」

「……見えてる」

少し顔を背けてそういつてた。手はしっかり伸ばしてくれてるけど。

それで、彼の言ってるのをもう一度思い返してみたら……。

私は尻もちついちやつてる。……そんな状態で　しっかりとその、スカートを抑える事なんて　できっこない。うん、仕方ないよね？　つまり、彼が言う意味は、私はまた

屋上で……み、みられ……っ。

「きゃあああっ!!　も、もうっ　見えてるならもっと早くいつてよっっ!!」

「だから見えてるって言っただろ？」

「もうっ　えっちー!」

「……過失あるか？　オレに。見事なストーキング技術を持った女子に、ここまで接近されたんだぞ。　ぜんっぜん気付かなかったし、驚きたいのはオレの方だったんだが」

これが、彼との出会いだった。

ちよつと、衝撃過ぎて忘れることなんかできない出会い。

——
出会って3秒でぱんつ見られちゃうなんて、
忘れることなんかできないよ。

2話

なんだか知らんが、今オレは正座をさせられる勢いだ。今は彼女の説教タイム。

正直 何でこんな事になってるのか、正直判らない。……解せない。

確かにパン…… 下着を見てしまったのは悪いと思う。

でも さつきも言った通り過失があるのは相手の方だと思う。だって突然目の前にいて、当然びつくりしたよ。でも 彼女の方もびつくりしたみたいなんだ。おまけにびつくりし過ぎてひっくり返ってた。

それで、見えてしまったんだよ。見たくてやった訳じゃない。大人だったら逮捕されるかもしれない様な事する訳ないし。

それに 倒れてる所を起こそうとしてあげただけでも、感謝されても良いだろ……？

そんなオレの想いとは裏腹に、眼前にいるのは腰に手をあてて仁王立ちしてるあの彼女。その顔『今、私すつごく怒ってます!』と言わんばかりだ。

ぶっちやけ面倒くさい。

「もー! ちよつと! 聞いてんの!? えっちなのは駄目だよ!」

「あー、はいはい。もう 耳ダコ」

「何よー! 耳タコって! それに はいは、いつかいだゾ! 不躰っ!」

何? この子供みたいなやり取り。

一体 何がどうなって こう言う状況になったんだっけ? 少し前の事をオレは思い返す事にした。

——この学校に転校してきたのは、中学二年に上がった直後くらいだった。

ありきたりな理由だけど親の都合。

どちらかと言えば 前の学校が良かったけど、中学生如きが何を言っただって覆る訳ないし、あくまで 『どちらかと言えば』だったから、そこまで苦痛ではなかった。

それなりに会話はするからポツチだった、と言う訳じゃないけど 基本的に1人が好きだ。

1人が好きだから この新しい学校の中でも特に屋上が好きだった。殆ど誰も来なかったから。

「それで、なんで屋上こゝにいるんだ？ って言うか、何で上にまで上がってきた？」

たまに屋上に誰か上がってきたる感じはあつたけど、この給水タンクの影のトコにまで上がってきたのは彼女が初めてだ。

何だろう、……嫌な予感が頭ん中に過つてた。

「えー、わかんないかな。あんなに気持ちよく歌つてたんだもん。そりゃ、近くに行つてみたいじゃない。歌、すつごい上手かったよ！」

「つっ!!」

嫌な予感——的中。嫌な事に、こういう時の勘は当たる昔から。

と言うかさつきまで『怒つてます!』 だったのに、『実は嘘でしたー』 みたいな顔。いや寧ろ良い笑顔で言つてる。

そして、聴かれましたまった事に関して、実に、嬉しくない。すつごくうまかつた……、美味かつた？ 何それ美味しいの？

と言う訳で、さつさと降りようと横切つた時だ。

「いっらー！ ちよーつと待つてよ。何で無視するんだよ!?!」

此処から先は通さない！ とでも言いたげに両手を広げてる。

「いや もう下校の時刻 とつづくに過ぎてるし。……校内に残ってる生徒は寄り道しないで帰りましょー。だろう?」

「あ、まあ 確かにそーだけど……、って こらっ逃げるな!」

さらっと躲そうと思っただけど、なかなか動きが良い様で 逃げれなかった。

別に紳士って訳じゃないけど 幾らなんでもオレは 女子を押しつけて帰ろうとする程 酷いやツでもない。

そもそも ここで暴れるのは非常に宜しくない。冗談抜きで危ないから。

「ああ、わかつたわかつた。とりあえず 降りよう。危ないだろ?」

「む……。それもそーだね。うん。でも 先に降りないでよ!」

「……?」

「むー」

スカートを抑えてるけど、覗くって思ってるのかな?

「……どつちかっていうと、見せられたに近いけど。つまり痴「誰がだよ!!」ごめんごめん。調子に乗った」

また長い長い説教が始まりそうだったから、直ぐに謝った。

「ふんっだ。じゃ 先に降りるからねー。1人ずつ降りる事! 安全第一!」

「(……どの口が言ってるんだか)」

「あ！　どの口が、って思ってるでしょ！」

「どうやら、心を読んでくるエスパーな不思議少女らしい。ほんと厄介ですね、はい。別に考えてないって。ほら　早く降りて」

「頑張つて自然に振る舞つた事がよかつたのか、何とか誤魔化す事が出来た。」

「ちよつと鼻息は荒いけど　さつさと降りてつてくれた。」

「よいつしよつと！　さー良いよー」

「と彼女が言つた殆ど同じタイミング。」

「オレは狙つたよ。本気で。」

「って　わあっ!!」

「狙つたのはジャンプするタイミング。ちゃんと彼女が降りたのを見届けてから降りたから、文句は無い筈だ。」

「ちよ、危ないのはキミの方って……あれ？」

「そして　誰もいなくなつた——と言う事にしといてくれ。」

「彼女が驚いて怯んでる隙にこの場から脱出する事に決めてたから。」

「もー、なんだよー！ 別に逃げなくたって良いじゃん」

私は何だか腹が立ってた。

パンツ見られたことなんか忘れるくらい……まではいかないヨ。うん。えっちなのは駄目だからね。

でも、それでも逃げる事は無いって思う。

「うーん、あの男子って 誰なんだろう？ 背は私より大分高くて…… この辺り？ そ

れで赤みが掛かった茶色い髪で……、アイマスクを胸ポケットに入れて……」

さつきの男の子の顔 頑張つて 頭の中に収納する。明日辺りにユリに訊いてみるんだ。

でも ちよつとばかり違和感があるかな。

「……あの人の私 知らないのかな？」

自分が校内の有名人ですつ！ なんて言うつもりはないんだけど……、いつも沢山私の周りには男子たちが集まってくるのに、あの人は知らないのかな？ つて思っちゃう。

前に ユリが『つかさが学校一番の美少女つて事だよ？ だから 学校中の男どもがつかさの事ほつとかないつてさ！』つて言つてたけど やつぱり大袈裟だよつ！ 恥ずかしくて 顔を赤くさせてる私を見ながらユリは笑つてたもんつ！

……それは兎も角、追っかけは迷惑だよ。私は誰ともお付き合いするつもりないつて言つてるのにも関わらず 結構な頻度で集まってくるし。

傍にいるだけで良いから、つて言われてもほんと困つたものだよ。女友達の皆が何とかガードしたり、ちよつと行き過ぎ気味だったら 私も声を強めたりしてるんだけど。

「まあ 私もあの男の子の事知らないから、他人の事言えないんだけどね。………むー。

でも 今はさっきの子の事 私すごく気になつてゐみたい。……すつごく」
やっぱり あの歌の事だよ。

まだ耳に残つてゐるから。それ程までに上手で綺麗な歌声だったから。
ウオークマン……今度お母さんに買ってもらつて録音したいな。

「私も今日は帰る。……明日 覚えてろよーっ！ ゼーったい見つけてやるんだからー！」

なんだか、大きな声でそう言いたくなつた。

風に乗つて『……勘弁してくれ』って聞こえたきがするんだけど、きつと気のせいだよ
ね？ うんうん。

3 話

昨日は なんだか色々とおったけど、とりあえず目立たない様に、それでいてポツチとは思われない様に。

無難に過ごす事。つまり普通。それが一番。すごい楽だ。

それが15年生きてきて一番学んだ事だ。……大して生きてないじゃん、と言われてさうだけど。

新しい中学に来てもする事は変わらない。毎日を無難に過ごす。

まあ 先生にまで『中坊らしくない』って結構言われてたけど、今までだって別に気にした事なかった。

……でも、このクラスは少しばかり今までとは違ったけど。

「おーい、神谷く 神谷 蓮くー!」

「……いつもいつも思うんだけど、たまにフルネームで呼ぶの止めてくれよ」

別に名前や苗字が嫌いって訳じゃないけど、フルネームで呼ぶヤツ他にはいいから、目立ってしまいうんだ。それが……まあ ヤダ。

後 あの声がかいからって理由もあるけど。

「別に良いじゃねーか! そんなもんさく! それより今はこれだこれ、これ見てみ! あゆみちゃんの写真♡ 真中が持つててよおく! とうとう手に入ったんだよおんっ!!」

「わかったわかった しがみ付くな。 ……と言うか、それぐらいで泣くなつて」

「うおおんっ!! ……って、そんぐれーってなんだよ! オレが望みに望んだお宝なんだぞ! 13号の付録にしかついてない限定品なんだぞ! 言うなら家宝クラスなんなんだぞっ! これ探すのにどんだけ苦労したか……。中坊じゃ売ってくれないから変装しつつ探してたりして……。来る日も来る日も古本屋巡り……。長かつたんだあ ……」

「その努力を他の面にも向けろよ……。テストがヤバイって嘆いてた癖に。もう受験も

近いんだぞ」

「うおおお!! 嫌な事思い出させんなよーっ!」

「受験を忘れてどーすんだよっ! 流石に進路大事だろ」

転校生って、最初の内は珍しがったりして 結構話しかけてきたり、クラス全体的な話題にあがったりするんだが、それは一定期間だけで 転校生ブームが去ったら ある程度は静かになるってイメージだったんだけど、このクラスはアットホームと言うか、お気楽と言うか、当時のテンションのままの付き合いが続いている。

勿論、基本的に疎ましいとか思ったりはしてないぞ? 打ち解けが早かったのはありがたいつて思った。

だけど…… 目の前の号泣してるヤツ、小宮山はまた別だ。

そんな感謝の気持ちなんか、遠の昔に消失する。もうなんの遠慮もしないくらいの存在になってる。……別に特に嬉しいとは言えないけど。

「よお、大声でなーにやってんだ? お前ら」

もう1人話の輪の中に加わってきた。

「真中……。お前がやった刺激的な餌のおかげで興奮しきってる様だぞ、このゴリラ顔。落ち着かせてやってくれ。あの悪夢つつてたグラウンド50周があったつーのに、懲りないねえ」

「おい！ 誰がゴリラ顔だコラっ!!」

真中が教室に戻ってきたから、このまま バトンタッチをしようとしたが無理だったよ。……ゴリラって言ったのは余計だったかもしれない。でも思うトコはある。それをネタにして使ってたから。

「ほれ ゴリラの物真似して笑わせてたじゃん。けっこー 何回も女子たちの前で。だからゴリラ好きなんだろ? って

「あ、あれは……。ほ、ほら 笑ってくれたら嬉しいじゃん! オレの持ちネタだし! な? 判るだろ? 真中も」

「そんなん知らんって、変な時に オレに縋りつくなよ小宮山!」

顔を真つ赤にさせながら言う姿みたら、妙に純粹っぽいトコがあるんだが……意地の悪さと妄想癖もそれ以上に強くて、結局は色々振り回されてしまう事が多かった。……まあ、妄想癖って言えば小宮山の隣にいる真中だって負けてないって思うけど。

小宮山は可愛い女子に対しては、エロい妄想ばっか。で、真中の場合はもうちよつとマニアックで、映画のシーンがどうか、つてぶつぶつ言ったりする事が多かった。誰もが知ってる様なA級映画じゃなくて、誰も知らない様な映画が多くて、誰もついていけないから、1人でやってる。妄想癖、と言うより空想壁かもしれないけど。

「あつ！ それより聞いてくれよー！ この間さあ、西野つかさちゃんが笑ってるよ、見てよー！ やっぱ可愛いよなあ……♡」
「急に話題変えたな……」

そして、小宮山が突然話題を変える時は大体『西野つかさ』の話になる。
学年一のアイドルって言って、かなりの入れようなんだ。

「そうだなあ。ほんつと最近は何でもかんでも西野つかさの話。無理矢理もつてくんだ

よなく」

「うっせえなー！ 好きなんだから仕方ないだろー！」

「……大声で言う様なセリフじゃないと思うけど」

だれそれが好きくなんて、学校の教室で大きな声で言うもんじゃない、って思う。アイドルとかならまだしも、同じ学校の生徒につてのは……。多感な中学生が。

「その意見では流石のオレも同意だな。流石は神谷。そこらへんの男子より大人びてるよな」

「ん？」

声で大体誰か判ったけど、振り返って確認した。それで間違いなかった。

「ああ 大草か。あれ？ さつき女子に呼ばれて出てったんじゃないか？」

「ん？ ああ、今度遊ぼうって誘われただけでもう終わったよ。……勿論、オレはOKを出した」

「別に誰も聞いてないって……」

クラスでも屈指のイケメンである大草。スポーツ万能で成績も良く絵に描いた様な

存在だ。

冗談抜きで大草がいるトコには女子も集まってくる感じで最初は正直苦手だったりする。……でもまあ実際にはある意味デカい光である大草の傍にいたら、影になって隠れられるから特に問題なかったけど。

「それよりさあ。神谷。今度サッカー部の皆と集英中の女子とで飯食いに行くんだけど、行かないか？ 丁度良い人数になるんだ」

「ああそうか。うん。行かない」

「即答かよ！ 10秒くらい考えても良かったじゃん」

そんなでもって、たまにだけど、こんな感じで誘いを入れてくる。

「はいはい！ 蓮が行かないんならオレが行くー！！ りっこーほっ！！」

そんなでもって……、こういう時の小宮山は地獄耳だ。速攻で話に加わってくるんだ。勿論結末はいつも変わらない。

「小宮山は駄目だろ……、絶対」

「んだとコラ！！ 真中！！ まだ何にも言ってるねえだろうが！！」

そう、NGだと言う事。

そして 小宮山は真中のぼそつと言ったツツコミも決して聞き逃さないんだよね。凄い。

「いやあ、小宮山は勘弁してやってくれ。その顔で迫ってきたら女子たちが怖がる」
何処か爽やかな顔してる大草も結構毒舌だったりする。

「どういう意味だ!!」

「そう言う意味だろ? ……ほれ、お前らも席に戻れつて。そろそろ授業始まるぞ」
「うぐぐつ……」

と言つたらタイミングよく開始を告げる本鈴が鳴つた。

未練がましくしてゐるみたいだけど、次の授業の山岡先生は、小太り気味で無精髭が特徴的な怒らせたら面倒な部類の先生だ。ちよつと前 2人に罰としてグラウンド50周! を宣告した教師でもあつて、またまた 怒りを買おうものなら今度は内申点にも響くんじやないか? と言つたら 少なからず自肅すると2人は言つていた。

正直、この時は『くだらない事で教師に逆らつて無駄なエネルギー』と言つていた大草に素直に賛同した。

オレも席がすぐそばだから 危うく巻き込まれそうになつてしまつたんだから。

そして、ちよつとした事件が起きたのは次の日だった。

とりあえず、あの日。屋上でいた時に出会った女子との鉢合わせは無かった。

『ぜつたい見つけてやる！』と恐ろしい事を言われて　結構警戒したけど……取り越し苦勞だったよ。

あの日から　屋上は危険かな？　と思つてたんだが、あの場所は自分にとって憩いの場でもある。簡単に放棄できる様な場所でもないから。

「——歌、ちよつと自肅しよつと」

そうだ。

そんな大きな声で歌つた訳じゃないんだけど、訊かれたらしくて　ああなつたから。

「……やっぱし　気持ち良いな。ここが学校の中で一番」

目を閉じれば、更に気持ちいい。

誰にも邪魔されずに　無心になれる場所なんて早々無いから。

でも——、またまた来訪者が来たんだ。

「よい……しよつと」

丁度、給水タンクの影になってたから、ここで転がってるのはバレてない様だったけど。

「……ん？ 誰だ？」

前の子かな？ って思ったから ちよつと警戒してたんだが 違った。長い髪は同じだけど、髪の色が違う。

「ん……」

その子は、手にノート、ペンを持って何かを書いてた。

こんなトコで勉強？ って思ったけど…… 落ち着ける場所での勉強は結構捗ったりするから そこまで不思議には思わなかったけど……。

「(まあ……あんまり人が来ないってだけか。ここは)」

全く人が来ないって訳じゃなさそうだと思った。

今の今まで鉢合わせが無かっただけで。

そして、オレは頭の中で選択肢を選んでいた。

① 素直に出て行って 軽く会釈し下に降りる。

② 先に来たのはオレだ。オレの場所！ と出ていく様に言う。

①は まあ……驚かせてしまうかもしれないけど、無難かな？ と思う。

だけど、つい先日のもあるし……もしかしたら あの子の刺客？ かもしれないし、と言う事で無し。

②は ……なんで選択肢に入れたんだ？ と自分で自分を責めつつ却下。

何処のガキ大将だ。

と言う訳でありきたりだが

③ このまま隠れて、いなくなったらオレも帰る。

をチョイスした。

幸いな事に気付いていないし、屋上はそれなりに広い。

もしも あの彼女もここがお気に入り で ちよつとした至福の時間を過ごしているのだとすれば、邪魔するのも悪いだろう。時間帯を考えても 何時間もここにいても思えない。

オレだって、後30分くらいゆっくりしたら帰ろうと思つてたし。

「……（風が結構吹いてるのも幸運だな。風音で色々と紛れる）」

ちよつとした息遣い程度は気付かれない程吹いているから良かった。

丁度給水塔の裏側と表側で過ごす男女。

一体どういうシーンだ？ つて映画とかにうるさい真中だったら、ツツコミ入れられるかもだけど、こういう事だつてあるんだろ。たまには。

「や……、もうひと眠り………」

と言う訳で、オレは目を閉じた。

それで、ちよつとした事件が起きるのは、この直ぐ後の事だったよ。

4話

あれから多分、まだ20分も経ってないと思う。

いつもは、ここにいと時間が経つのは結構早いんだけど……今日は別だったみたいだ。

何かで訊いた事だが、アインシュタインの相対性理論だったか？

こんなにも長く感じるもんなんだな……。

「ん……。ふう 今日はこちらまで、もう帰ろうかな」

色々考えてたら、あの女の子は帰ろうとしていた。長く感じたけど……まあ よしとしようか。

「(うーむ……。暫く屋上に来るの止めておこうかな……。)さて、とりあえずオレも準備を「きやつ！」は？」

本当にいきなりだったよ。

さつきまで静かだったのに、確かに小さな悲鳴が聞こえてきて、反射的にそつちを向いたんだ。あの子がバランスを崩してて、変な体勢で倒れ込んで おまけにその身体が視界から消えたんだ。衝撃映像を見た気分だったけど、何とか咄嗟に捕まる事が出来たみたいで、捕まってる手だけは見えた。

—— 転んだ？ でもここは平らで段差もないし、足を取られる様な地面じゃないんだけど……。

って思ったけど流石に危ないとも思った。

そこまで高くないとは言っても、変な体勢で落ちてしまったら危ない。……前にジャンプして降りたけど、結構足に響いたし。

「おい、大丈夫か!？」

「えっ!？」

とりあえず、オレは彼女の手を取る事が出来た。

見てみたら片手だけで自分の身体を支えている様で、あと少し遅かったら下に落ちていたかもしれない。

「落ちついて足でしっかり梯子を踏め。ほら、右足を10 cmくらい横にずらせ。直ぐそこにあるから」

「あつ は、はい！」

何とか足でもしっかりと体勢を整える事が出来たのを見届ける。

「よし、ほら 支えといてやるから 左手も梯子を掴んで」

「わ、わかりました」

パニックを起こさなかったのが良かっただろう。しっかりと指示は聞いてるし、ちゃんと捕まる事も出来たみたいだ。……そろそろオレの手もしんどくなってきた。

「もう放しても大丈夫か？ 掴んだままだったら降りれないだろ」

「あ、だ、大丈夫です。ありがとうございます……」

頷いたのも見たし、しっかりと両足と右手で身体を固定出来てるのも見た。

「ここまで来たら…… 普通は大丈夫だ、って思うだろう？ 普通。」

なのに――。

「きやんつつっ！」

「……へ？」

多分、つるつ と滑ったのかな？ 足も手同時に。しつかりと支えられていたと思ったけど。

……そんな事つてある？

そのまま どさつ と下に落ちてしまった。

オレの苦労はいったい……。オレが落とした事になる？ そんな訳ないよな？

「……………つて、自問自答してる場合じゃないか。おい、大丈夫「い、いちごの……………パンツ♡」は？」

そんな時だ。もう一人の声が聞こえてきた。

今まで、少女の姿しか見てなかったけど、ここにはもう一人いたみたい。そいつは、マジと倒れてしまった少女の事を見てた。

そりゃ、穴が開く程見てたよ。うん。スカートの中を。

結構風は今も強いし、はたはたと柵引くのも上からでもしつかりと判ったんだけど

……。

「おい馬鹿。真中！」

「うおっ!？」

誰が来てたのか、と思つたら真中だったよ。兎に角 オレは足が痛くなりそうだけど、また飛び降りた。

「うわっ! つて神谷? 何でここに? なんでお前まで上から降つてくるんだ?」

「これにはいろいろと事情があるんだが、話しは後。まずはあの子だ」

大丈夫かな? と振り返つてみると…… あの子はぱっちりと目は開いてて 必死に捲れるスカートを抑えてた。

ああ…… 見られたつて判つたみたいだ。

「きゃ、きゃあああっ!」

「お、おい 落ち着いて」

ぶら下がった状況でも、結構落ち着けてたみたいなんだけど、今更パニックを起こして走り去っていった。

「あれだけ走れば大丈夫か……」

「おい、説明してくれよ」

とりあえず、かいつまんで説明。

落ちそうになってたから助けようとしたこと。……だけど、よく判らないタイミングで落ちてしまった事。そしてまた、見事なタイミングで真中が来た事全部。

嘘みたいな話って自分でも思ったけど、真中に一通り説明したら判ってくれたみたいだ。

「成る程……。っていうか上から降ってきたらオレの方が驚くだろう？ 驚くのはオレの方だって」

「まあ気持ちは判らんでもないけど。空から女の子がくなんて真中風に言えば映画の展開。中々現実じゃ起こらんよな……」

「だろっ!! っ、それより……あんな美人ウチの学校にいたっけ?」

真中は、あつと言う間に顔を赤くさせてた。

夕日のせい? っで一瞬思っただけ、違うみたいだ。

「誰なんだ？」

「知らん」

「知らん、つて上でいたんだろ？ 2人で」

「いやいや、オレが上で寝てたらあの子が来ただけ。ダブルブッキングつてヤツだ。話してもないよ」

名前なんか確認する間も無ければ、顔をまじまじと確認する様な事も出来ない。落ちてたあの状況だし。

「でもよお あー！ すっげえいいシーンだったよ!! ほら、綺麗! 美少女!

夕日に照らされてスカートがめくれて……。アレが映画のシーンなら、起き上がる瞬間は絶対にスローモーションだなっ!!」

「おい、それじゃ単なるエロビデオにしか見えんぞ」

「……………あ、それもそうかな？」

「んでもって、倒れてて無事かどうかも判らない少女を助けて介抱するどころか、『ぐへへ、スカートの中が丸見え。儲けもんだぜ』つてな具合で襲うとする変態役が真中つて事だな」

腕を組んでうんうん、と頷いてたら。

「なんでそうなるんだよ！ オレは監督だつっ!!」

盛大にダメ出しされた。と言うか、ツッコむトコそこ？

「はいはい、真中監督く すいませんでしたー。つて、そうだ」

オレは1つ思い出した。

あの子は屋上で何かを書いていた。そんなでもって逃げ去る時手には何にも持つてなかったし。

「上に忘れもんがあるかも……」

「え？ 忘れもん？」

ひよいつとまた元の場所に戻って確認してみると、ノートが落ちてた。

「3年4組……つて、オレらと同じクラスか。東城、綾……ああ、確かにそんな名の子いたな」

「おーい！ 神谷ー。忘れもんつてヤツはあったのか？」

「ああ、あった。このノート」

今度はジャンプしないで 梯子使った。足がしびれるし。

とりあえず真中に渡すと、真中は首を傾げてた。何でも名前も知らなければ、容姿も全く記憶にないとの事。

「クラスメートくらい覚えとけよ……つて、言いたいのが、オレもピンと来てない。……あ

んな状況だったし、はつきり顔も覚えてないし」

「それを言うならオレだつて殆ど一瞬だったぞ！ 夕日に照らされて、捲れるスカートしかー！」

「おーい、それ以上言わん方が良いぞ。オレも男だし、判らなくも無いけど、口に出して言ったら変態だ」

「オレは芸術を求めてんの！ そつち系じゃない！」

「大声で否定してもボロが出るだけだから。良かったな？ ここにいるのがオレだけで……真中の性癖はオレの胸の中に留めとくよ」

「違うつつーの!!」

これが ちよつとした事件だ。

オレにとつては、突然の救出劇。無事助けられたらクールつてもんだが、何でか失敗した。

それで真中にとつては 突然美少女が空から降つてきて、スカートめくられて いちご柄のパンツが見えた衝撃シーンの目撃者。

1つ間違えばあの子だけじゃなく、真中も怪我したかもしれない状況で、誰も怪我が無かつたのは良かったと思うんだけど……、妙な火が真中についてしまったのが、面倒

かもしれない。あの後、何度も同意を求められたから。

逆光の中振り向くシーンが最高とか、夕日と美少女といちごパンツのマッチアップが最高だとか。どの映画よりも美しかったとか。

もう、最後の方は オレを変な世界に引き込もうとしてるとしか思えなかった。

ノートに関しては、真中が渡したい、って言ってたんで よろしく頼んだ。……とりあえず釘刺しといたよ？ 犯罪者にはなるなよ、と。

「やれやれ……真中の空想癖も困ったもんだ。周りに誰もいなくて良かった」

「そうだねー。誰も周りにいない方が良いよね？ キミとっては」

「はあ？ まあ 確かに1人は好きだけど、何か含みのある言い方だな」

「えー。だつてさ。キミ逃げちゃうじゃん。逃げちゃったじゃん」

「何でオレが逃げるんだよ。……って」

ようやく気付けた。こんな事ってそれこそ映画とか漫画の中の話だっと思う。

普通に独り言を言ってる最中に自然に会話の中に紛れ込んできた。違和感が無

かったから、思わず続けちゃったけど……一気に悪寒が走ったよ。いつの間に、後ろにいたのか判らないし。

「よーやく、見つけたゾ!? 何で逃げたんだよー!」

後ろにいたのは、あの時 最初に屋上で出会った少女だった。

あれ? でも髪が短くなってる?

5話

「質問を質問で返すのは悪いと思うが……。何で追いかけてくるんだ？」

「キミが逃げるからだよ」

「……………」

確かに、逃げた理由は勿論あるんだけど……、だからと言って追いかけてくるかと聞かれたら オレなら首を横に振るよ。

それより、いつの間にか後ろを取られただろ。いやほんと いったいいつの間に……？

何処で修行を積んできた忍者ですか？ 君は。 ……いや 女の子だから くのいち？

「まあ…………それは兎も角。 ……はあ」

オレはとりあえず深く深呼吸したよ。色々とあつて今日は疲れてたつて言うのもあるし。いやでも深呼吸、と言うよりため息か？

多分 ちよつとそこもイラつ と来たんだらう。頬がぷくつ と膨れてた。『私、怒ってますよ！』とまた言われているみたいに見える……。

オレ何か怒らせたかな？

「あつ！ もー忘れてるんでしょ!? キミは私の……見ただらつ！」

「ああ、いちご柄の」

「わあつつ!! もー……! 柄まで言わなくて良いだらつ! このえつちつ!」

「……あ、いや悪かった。今のは失言だ」

実にタイムリーだ。

あの屋上で、見た（見てしまった）彼女のパンツだけど、彼女のもさっきの東城つて子と同じくいちご柄だった。真中のヤツが、いちごパンツパンツうるさかったから、思い返してしまった様だよ。……ひどく間の悪い事に。

「むー……」

「どうどう。うーん……。……まあ 確かに オレが見てしまったまでの過程はとりあえず置いて。君に恥ずかしい想いをオレがさせてしまったー、と言えば……。……うーん。……うーん……」

「すつごく恥ずかしかったんだよ？ 『あれ？ オレの何処が悪いのかな？』 って顔しないでよ！ もうっ」

うん。とりあえず……。

く勝手に近づいてきて、驚いて転んで その拍子にスカートめくれて、中が見えてしまったく

短くまとめたたらこんな所で 今思い返しても、彼女がピタリと当ててる様にオレが悪いとはどうしても思えない。

でも、今後も続くのであれば、はつきり言つて オレは穩便に済ましたいって気持ちの方が強い。

「詫びるよ。ほんとかめん」

謝る方が早そうだ。例え非が無いって思ったとしても。

「うんっ。よろしい！」

それが正解だったのかな？ 彼女 あつという間に笑顔に戻った。

んーと、今まで気づかなかつた……とは言わないけど 彼女 にかつ と笑う顔は、お世辞抜きに可愛い。いや 怒ってる膨れた顔も、慌ててる顔も……。寧ろ全部が。「それじゃあな。オレこつちだから」

まあ 可愛いのは判つたけど これ以上話す事も特に無いので帰ろう、つて事でくると向きを変えた。ちよつと家までは遠回りになるけど……。まあ良いだろ。ちよつとだけだし。

でも、帰る事出来なかつたんだよな、これが。

「待つてよー」

「うん?!」

がしつ、と肩を掴まれてしまったから。前にも言つたけど 女の子相手に振りほどいてまで……。はしたくない。ま、命の危機とか感じたら別だけど。今はそこまでは無いだろ? ……多分。

「ねー。キミつてほんとに歌うまいよね!」

「……………」

「パンツのおかげで忘れてくれた？　って想ってたんだけど……　それは希望的観測に過ぎなかつたみたいだったよ。」

「えへへ。実はね。その……見た事に関して私怒ってないよ？　だって、キミが言った様に　ぜんぜん悪くないじゃん。私が近づいて行って　ころんじやつたんだから自業自得っ！」

「実に、実にオレが言いたかつたセリフを見事に代弁してくれたよ。……今更だけど。」

「でも、やっぱ女の子の見ただから、それなりに……ね？」

「悪かつた。悪かつたから。その話題から離れてくれ……」

今はほんとに間が悪い。真中から散々『パンツは良い』って言い聞かされて洗脳タイムに入ってしまったから、変に考えてしまいそうだ。

「あははっ　キミって最初からあんまり興味無さそうな顔してたのに、今さらだよ？　顔赤くなるのっ」

胸元あたりを人差し指でつつ　と突つつかれた。

正直、女子とここまでのコミュニケーションは取った事ない。いやスキンシップかな？　慣れもないからかな、どうやらオレは顔が赤くなってるらしい。

「そりゃ、オレだって健全な中学男子。女の子に、それもアンタみたいに可愛い子にそう

言われりや反応だつてするだろ？ 仕方ない事だ」

「……へっ？」

ん？ なんてきよとんとするの？

……ああ 可愛いつて言つたからかな。ストレートな褒め言葉つて 大体は引かれるか照れるかの二択しかないつて聞いた事あるよな。

この場合どつちだろ……？

「うー……（他の男子にいろいろ言われてるけど…… な、なんでかな？ この人に言われちゃつたら、ちよ、上手く言葉が……）」

「んー……（引いたかな？ それとも照れ？ ……夕日のせいで顔色が判らん）」

色々考へてる時間がちよつと長かつたせいだろう。暫く沈黙が続いたよ。時間はもう夕方でも誰も誰もいない静かだからか、余計に感じてしまう。

「ま、まあ ありがとね」

「うん？」

「その、可愛いつて言つてくれて！ どーも、つて事！」

「ああ成る程……」

この場合……照れた の方かな？ でも見た感じ、接した感じでは サバサバしてる様な性格みたいだから ちよつと判りにくいな。

「んじゃあ、これでほんとに「待ってって!」……」

今度は、ふふんつ と得意な顔してるよ。

そう言えば彼女 心を読む様な力があるんだっけ? オレの意図気付かれたかも……。

「歌の話にもどすからねー。お願いを訊いてあげて 確かに話題は変えてあげるけど、

歌の話題の方は変えないからねー」

「………はあ」

そうだよ。話題を頑張つて自然に変えよう。小宮山の様なあからさまじゃなくて、極自然に変えつつ、そのまま帰路にくってというのが、オレの下校プランBだったんだけど、ものの見事に撃墜されてしまった。

ぱんつの話題とそれとなく合わせて歌の話題も一緒に消そうと思ったんだけどなあ……。駄目だったか。

「そんなに嫌なの? 歌の事話すの」

「……いや、なんつーか……、恥ずかしいだろ? 屋上とかで 1人で歌うたってるーなんて 痛いヤツ々みたいで。それも聞かれてた事も知らないでさ」

頭がむず痒くなってきたから、掻き筆った。

……強くし過ぎてちよつと髪の毛が抜けちゃったよ。

「でもさー。とつても素敵だったんだよ？ 私 キミにすつごく興味が出てきたのだった、ここまで追いかけてきたのだった、切っ掛けはキミの歌だったから。何だか、聴き入っちゃつてて……、その どういつていいのか判らないんだけど、……感動しました！ つてヤツかな？」

「……どういうか判んないつて。判つてるじゃんか……」

「あははつ また照れたね？」

「夕日のせいだよ。顔が赤く見えるの」

「ふーん。じゃあ そう言う事にしておきますか」

「そう言う事にしといてください。よろしく」

「あははは！」

「……ふふ」

何だろうな。最初は直ぐに帰りがかった、つて気持ちが強かったんだけど 話してる内に楽しくなつてきたのかな？ さっきまでの疲労感が少しずつだけ和らいでくみたいだ。

「私、西野。西野つかさ！ えーっと、キミの名前は？」

「ん？ ああ、そうだったな。そう言えば名乗ってなかった。……オレの名は……って、

え？ 西野？」

「え？ うん。そうだよ？ 私の名前は西野つかさ」

「……………」

真中レベルって言われるかもしれないけど、基本的にオレも女の子への興味ってヤツは希薄って言っている。あれだけ小宮川が熱弁をふるって、それ以外にも他のメンバーも、その手の話題になったらほぼ100%西野の名前があがってたんだけど、見に行ったり、顔を覚えたりはしなかったから。

それに多分、転校してから一度も会ってない筈だし。

「ん？ どうしたの?？」

「ああ、いや。可愛いのも納得って思って。確か『学校一のアイドル』ってオレの友達も言ってたし」

「わーわー！ 恥ずかしいってば！ そんなの本人を前に言わないでよー！」

むぎゅつ と手で口を塞がれてしまった。

「だつふえ、けつふお ゆうへい……」

「恥ずかしいってば！ 素直に口塞ぎなさい！」

「ふいふい」

中々塞がれてたら上手く声出せないから、最後は首を縦に振って意思表示。

彼女、西野は今回は間違いないと照れてるみたいだ。

「むー。キミって そう言う事簡単に言っちゃう人だったの？」

「んー…… どうだろうな。家族を除いて、ここまで話し込んだ異性って、アンタが初めてだし」

「へえー…… そうなんだ（たらしじやないって事かな。嘘言ってる様には見えないしなあ……って）もう。私は自己紹介したんだよ？ 返してくれないなんて、ずるいよ」

「ああ、ごめんごめん。オレは神谷。神谷蓮」

名前に関しては 親が花が好きでそこから とかまで言いかけたけど止めた。

そもそも、なんで言いかけちゃったのか判らないな。自分の名の由来なんて他人には関係ないことだし。

「神谷……蓮……？」

「そ」

西野は、何だかオレの事まじまじと見て考えてる。

さつきも言ったけど オレだって健全な男子中学生なんだって！

6話

私、こんな気持ち初めてだったんだ。

あの日、ほんとに屋上に行ってみて良かったって思ってるよ。ユリが怖がりだった事もこの際、感謝かもしれないね。ユリと2人で行ったら……きつと、ああはならなかったと思うから。

あつ！ でも、ぱんつ見られた事は良かったなんて思っていないからね！

つて、今は違う違う。そんな事じゃないやつ。

えつとね、今日学校に来て、時間が許す限り結構歩き回ったと思うんだ。流石に別のクラスに入って言ったりはしないけど、あの男子を頑張つて探してた。ユリやほかの友達にちょっと変に疑われたんだけど、それ以外はいつも通りに振る舞ったつもりだったよ。

他の男子たちが近づいてきて、あしらったり、テキトウに流したりしつつ、あの男子

を探したんだ。

あの夕日の中で聴こえてきたすつごく綺麗な声。

男の人なのに綺麗って言葉が一番しつくり来たし、また聴いてみたいってずつと思つてた。

でも、それだけじゃなかったのかもしれないかな。ただ歌が聴きたいだけじゃなかったかも……。また 会つてみたいって思つたかも……。だね

それでどうかあの時の男の子！ 見事に探し当てる事が出来たのだつた！ 私凄いつつて自分で自分を褒めちやえた程だよ？ 屋上も行つてみたけどいなくて、今日は諦めるかなうって思つたんだけど、その時ピーンッ！ と何かが来たんだ。いつもなら左に曲がる。だつてそっち以外じゃ完全な遠回りになつちやうから。でも、その時は違つてね？ 何だか『右に曲がつた方が良いよ！』 って私の中で。

そしたら、いたんだ。あの時の男の子が！

間違いないよ？ だつて 逃げる時の後ろ姿 実はあの後しつかり見たからね。あの時は 消えたりうって思つたんだけど、人間そう簡単に消えられるものじゃないし。足は速かつたけど、後ろ姿はしつかりと見てた。

声だつて間違いなかったし。

うん。最初はやつぱり嫌々って感じだったけど、粘りに粘って、とどまらず事が出来た。それに沢山話す事が出来たよ。その、可愛いつて言ってくれた事は……恥ずかしかつたけどさ、ほんとに嬉しかった。

それに私の事をよく知らない男の子とこんなに話すのって結構珍しい事なんだ。えっと、知られてるって事、別に自慢って訳じゃないよ？ 正直沢山男子が来て話したつてあんまり嬉しくないし。それだったら、友達の皆と話したり遊んだりする方が断然楽しいし。

それに……彼と話す方が凄く楽しいから。

それでお互いに自己紹介をし合う事になったんだ。それで……名前を話した途端に目を白黒させたかと思えば、また……か、可愛いかアイドルとかかって言ってくれた。嬉しい事は嬉しいんだけど、そんな気軽に口に出ってくる男子って、正直キザって感じがする。要は口だけ男みたいだな。そんな子結構いたし。私の事は色々と褒めてくれる癖に、他の友達の事は見下した言い方したりするヤツもいた。……そう言う系の上辺だけ男ってぜんっぜん信用出来ないから。

でも、彼は違つたんだよ。『家族以外の異性とどこまで話した事ない』つて言つて、きよとんとしてて、嘘言つてる様にぜんぜん見えなかつた。うん、色んな意味で正直者つて事なんだよね……。私の事、可愛いつて言ってくれた事もそうだけど、……私の

パンツの柄まではつきり言ってくれた事も含めてっ!!

まあー私に非があるし、あまり怒ってないって言った以上、これ以上蒸し返すつもりはないけど。彼が正直に言っただけだ。来たら別だけど。

それで、びっくりしたのはここからだつたよ。

「えと、神谷蓮?」

「だから、そうだつて。ちよつと近い、近いつて」

離れる様に言われて漸く私、結構近付いてた事に気付けたよ。だつて、彼と一緒にだつたから。名前は知つても、会つた事も見た事もないつて所。

「あはつ。似た者同士だねー」

「うん? どゆこと?」

「あのね、私も知つてたよ。キミの名前。……キミも人の事言えないじゃん?」

ほんと面白いくらい、頭に《?》が浮かんでるのが判るから、更に笑いを誘われちゃうよ。ほんつと、顔に出るよねー。

「えつとねー。女子の間じゃ結構有名なんだよ? キミ」

「……はっ」

今度はきよとんつ と首を傾げてる。なんだか小動物みたいで可愛かったりするよ。キミの方がさ。

あつ、何か思いついた顔した。

「ああ、なるほど。……オレって結構大草と一緒にいる事が多いから、おまけ、みたいな感じで知られてたって事か？ 大草のアドと番号訊いてみて、って感じの要望も受けた事何度かあるし」

口許に指をあてながらずばり推理してる。何処かの名探偵のつもりかな？ だけど残念だったね。その推理は外れです。

「ぶー。ざーんねん。キミ自身に興味がある、って話題だよ」

「……☒ 転校生だから？」

「え？」

「だから、転校生だから？」

転校生だったんだ……。あ、そう言えばそんな話もしてたかも。忘れてた。

「それも違うよ。だから、キミも女子に人気があるって事だよ。あ、ひよつとしたら私なんかよりもずつと有名かもね」

「それは絶対無い（あつてほしくない）」

あ、何だかまた嫌そうな顔した。……色々と騒がれるの嫌っぽいんだね。世の男の子

にとつては嬉しい事だーって何処かで訊いた事あるんだけどなー。

彼は彼つて事かな？

「ふふつ、蓮つてほんと面白いね？」

「……オレに言わせれば、そつちも何だが。（追いかけてくるなんて、見ようによつては相当……と思うし。ん？）つて、いきなり呼び捨てとは随分と踏み込んだな」

「だつてもう知らない間柄じゃないし、良いじゃん。私のこと　つかさつて呼んでくれていいからさつ」

「それも謹んで遠慮させてもらえないか？」

「えー、なんでそんな丁寧に拒否するんだよ」

私の名前に不満でもあるのかー　つて思つちやつたよ。つかさつて名前私は好きなだけど……。そりゃ　男の子の名前つぼいと云えばそうかもだけど。

「本人に実感が無いのはお互い様かもしれないな。オレも言われても正直信じてないし」
「どういう事？」

「オレが名前で親しく呼ぶとして、それが男子生徒諸君らの耳に入れば、……どうなるか火を見るより明らかつて事だ。……謂れない嫉妬やらイヤガラセやらのオンパレードだ。つまり（もう、普通とは程遠くなつてしまつて事だよなあ……）」

「むー……」

そんな事ある訳ないよ！　と聞いたんだけど……ちよつとしつこい人がいる事は確かだし。そう言うヤツつてほんと何するか判んないし。

「なら、私が蓮の事を呼ぶのも危ないのかもねー？　他の子達に嫉妬されちゃうよ」

「それは絶対ない」

「その言葉、そっくりブーメランだよ。だって　私もそんな事無いって思ってるし」

「……………」

話は平行線になっちゃったよ。でも正直一部の男子は判んないんだけど、そんなオンパレードつて絶対言い過ぎだって思ってるし。

「……苗字で頼めない？　オレは西野つて呼ぶから。神谷で。」

「むむ。……判ったよ」

でも、何だか納得いかないから、最後はこう言っておこうつて自然と思つたんだ。

「今日の所は判ったよ。か・み・やくん」

「……………」

あー何でかな。ちよつとすつきりした気分かも。

蓮つて　他の子達が言う様に、断然大人っぽいんだもん。顔に出やすいんだけど、何となく雰囲気と言うか佇まいと言うか、そんな感じがするんだ。それにそこが蓮の人気ポイントらしいし。今までだって、なーんか色々とリードされてるって感じだったし。

そういうのは性に合わないからね。

えへへ。舌でもぺろっと出しとこつと。

「(はあ……、ザ・ールド！　って言ったら時でも止まらないかなあ。いや戻ってほしいから　○イツァ・ダ○トか。……まあ言わないけど) んじゃあ、またな西野」

「えへへ。うん。また学校でね？」

「ああ。(会つても逃げよつと……)」

「あ、逃げたら名前で呼んじやうかもだよ」

「……心読まないでくれるか？」

「あはは。蓮が判りやすいんだよー」

やっぱ面白い。蓮と話すのすつごく楽しい。

んー、今日の所はって言ったんだけど……やっぱ　蓮の方が良いな。

「……今日のところはくつて言つといて早速だな」

「あ、あはは……つい、ね。その……やっぱ　2人の時だけで良いから、蓮って呼んじゃ駄目かな？　学校は　少ーしだけ自重するからさ」

「うーん……。まあ学校以外なら……。つてか　信用できるのか？」

「わ、何だかひどいな！　まあ　早速破つちやつた私もアレだけど。ちゃんとするからさ。なるべくね？　だって蓮と話すの楽しいから。……蓮は楽しくない、かな？」

「つ……。あのなあ。そう言う言い方されて、『はい、嫌です』って言えると思う?」

「蓮なら言いそうっ♪」

「……言うと思った」

時間ってアツと言う間なんだね。楽しい時間は本当にあつという間。携帯が静かに震えたんだ。多分、お母さんからだと思うし、心配はかけたくないし。

「もう時間も時間だし、そろそろ終わりにしないか? ……もう逃げたりしないから」
「つと。あはは。それは本当っばいね。うん。ちよつと名残惜しいけど、私もちよつと用が出来たみたいだから」

携帯を見せて言ってみただけど、『番号教えてー』って言わないかなあ? ……言わないよね。

「ああ。じゃあな、西野」

「やっぱり……」

「ん、まあ 良いや。今日の所はほんとに……」

「じゃあね!」

送ってくれる〜って言うのもちよつと期待したんだけど。それも良いかな。……
今はね。

家に着いたけど、ほんと、まるで嵐の様な時間だったよ。嵐くなんて生易しいかも。ありや大型台風。暴風雨っていいかもだ。

ま、楽しかったって言えば楽しかったんだけど。

「とりあえず……、明日ちよつと心配。まあ、自重するって言ってるし、……西野もあんまり無茶はせんって思うし。そう信じたい……かな」

少しばかり不安はあるけど、ずっと普通をー平凡にー、って考えてた自分が変わりそうなのがするって思ったり？

まあ、それは難しいか。だって、オレがそう思い始めた理由って……。

「おつかえり〜！　どーしたの蓮ー。随分遅かったけどー？」

「……お出迎えに抱擁しようとするの、やめっ！」

「えー、良いじゃん良いじゃん！　姉弟のスキンシップだよー。こんなの普通だって！」

「ウエイト！　ステイ！　ゴーハウスっ！」

「ふふーん。お姉ちゃんを調教しよう〜なんて、過激なんだから〜♪」

「……………」

「わー。無視していかないでー！」

「これのせいだ。」

絶対……。

ああ、歌の事も、ある意味はこのブラコンのおかげって事もあるかもしれないな。

歌に関しちや、コイツ冗談抜きで天才だし。……まあオレにとっては、天災かも。

自分で言っというてなんだけど。

うん。面白くないな。

7 話

「じゃあ行ってくる」

「いつてらつしやいのキツスをつ♪」

「あ、かーさん 今日晩飯は良いから」

「蓮は私とディナーだもんねー♪」

「ああ、後明日の朝なんだけど、体操着がいるから。あ、でも勝手に洗濯機使うから」
「いけず〜!!」

多分、何にも知らない人がこの会話を訊いたら、まず間違いなく耳を疑うだろうな。

テンションがおかしい、つて思うかもしれないけど、コレのテンションは年中変わらない。それこそ常にテンションMaxのバーゲンセールだ。

「ここらここら。愛ちゃん。蓮を愛でるのは良いけど、事務所から連絡来てるよ?」

「えー、蓮と話してるから、待たしといてよ。お母さん!」

「もう、マネージャーさんを困らせないの」

「……母さん。止めるならもうちょっと激しめてくださいよ」

母さんとの話から大体判ると思うんだけど、我が姉の職業は……まあ 世間一般で言う万能型のアイドルってヤツだ。多分、間違いない世の男であつたら、オレを羨ましがらるって思う。そりゃ アイドルクラスの美少女と同居だとしたら、オレだつて良いじゃん！ って思うかもだし。

だがしかし!! 考えてみてもらいたい。オレ達は家族。姉弟。血が繋がつてないくとかの義姉弟とかじゃないんだ。

この姉を前にすれば、羨むより同情して欲しいわ。この女、下手したら人類の三大タブーの1つを大喜びで犯しそうだから。

テレビ番組かなんかでのトークタイム時『将来結婚してみたい人はどんな人??』的なMCの質問に、100万のスマイルで『弟です!』って大声で叫んじゃったんだよ……。

ちよつとしたユニットと言うか、ツッコミ要員と言うか、相棒と言うか、そんな感じの人が痛烈なツッコミを入れてるのを見て、アイドルと言うより芸人さん? って思つた程。

そんなキャラだから、大御所にも気に入られたくとか、特番で出るく、とか 話しが

ワールドワイドになっちゃってて、非常にオレにとつてはヤバイんだ。色々と追っかけとかがきそうだったし、母さんの方の爺ちゃん家に行つて 難を逃れたんだけど 取材が来た事だつてある。

テロツプとかで『噂の弟くんの所在は………??』

つて番組で流れた時はほんと肝が冷えたよ。妙な演出とかも加わったりして 期待感も出てくる様に煽ってる。うん、他人事なら面白いかもだが。全くをもつて面白くない。ただただ激しく安堵したのを覚えてるよ。

抜け殻気味だったのを、婆ちゃんが慰めてくれたのも良かったかも。多分、理由は判つてないと思うけど、それだけでも十分さ。

色々と多感な時期つて自分ながらも思つてたけど、そんな中で 身内に強烈な爆弾がいたから、あれだけ普通を求めたんだらうなあ………つて思ってる。

ほんと、他人事の様に行つちやつてるけど、ただの現実逃避だから。

「んじゃあ、行つてくる」

「蓮く！ ホテルとか取つてるんだけどー行こうよー。ほら、蓮が好きつて言つてたフ

ランズ料理とかバンバン出てくる一流レストランもあって、他にも好きって言ってた某プロボクサーも常連さんでく 会えるかもよく？」

「……絶対行かないから」

ちよつとだけ、ほんのちよつとだけ心が揺らいだけど、そんな揺らぎ 姉同伴と言うペナルティがあるんなら、ただの苦行も良いトコだ。

一度、結構真面目に怒った事もある。記者さんたちの追っかけがありかけた時だったよ。本気で怒ってるの判ったからか、そこからの根回しは異常なまでに早かった。アツと言うまに來なくなつたから。……弱みでも握つてんじやないの？ っと思ふくらい。とりかえず……、朝っぱらから疲れた……。

外の空気は新鮮で美味い。うん、心が癒される気分つてもんだ。

「おーい！ はよー、神谷！ なーに猫背になつてんだよー」

でも、やや猫背になつてるのは、少しどんよりとしてるって事かな。

「はよ。そつちは朝っぱらから元気だな？ 真中」

「そりやそうだろ！ いちごパンツの美少女の事がやーっぱ忘れられなくてよー」

「朝からは……」

さいごまで言いかけたけど、何とか口を噤めた。

毒されてる、ってマジで思っちゃったから。

「なあ、神谷も見たのか？」

「何かその訊き方嫌だな。オレを共犯っぽく言わないでくれよ。大草」

因みに、大草や小宮山も一緒だ。家がそばだからか、結構この4人で登校が多い。

「なんてゆーのかなあ、空から舞い降りた……まるで天使？ 逆光の中で少女が振り向いたシーンとかがやっぱオレの中では——」

真中は周囲とか関係なく、自分の世界に入っちゃってる。

昨日、あれだけオレに語ったのに、まだ語り足りない、って感じた。……でも、こういう強い強い芯を持つ様なヤツって、映画監督に向いてる様な気がしなくもない。表現物にはそれぞれ作り手の個性が出るし、それも大事だろうと思うから。

「あーあ。始まったな……」

「いつもの事だろ？」

「んあ、でもあの空想癖はいつもよりは強烈って思うぞ、オレ」

「小宮山が言うなら相当だな……」

「どーいう意味だ!!」

とりあえずまあ、周囲にはオレ達以外に誰もいないのは良かったって思うよ。……あんなの皆に見られたら目立って仕方ないって思うし。

「でも、パンツってのは置いていたとしても真中があんなに興奮するって事はよっぽど可愛かったんじゃないのか、神谷？ アイツ、ある意味お前よりそういう手の話しないじゃん」

「ある意味ってなんだよ」

「ん？ たまに神谷って女子と話してるし」

「ゼーンぶ、お前のとばつちりなだけだな！ もう、黒板に大きく書いてくれよ。メアドとか、番号とか」

西野が言うには……、オレに人気があるらしいけど、まーったく信じられないんだなこれが。大体が『大草君も誘って〜』とか、『大草君とどこ行つてたの〜』とかばっかりだったし。

「いやいや。流石にそれは……。ふっ、オレは女の子に頼まれたら断らない主義なんだけど、皆判つてないのかなあ……」

「誰と話してるんだ？」

「さあ、多分 PC画面の向画面こうの人達とだろ」

真中ほどじゃないけど、大草もたまに変なトコある。ナルシストくツ気があると言うか、何か決めポーズを取りながら実況したり説明したり。……正直、そう言う場面に限つては残念イケメンって感じなんだけど、女子ウケは抜群だから 主に男の意見だ。

あんまり大きく言うと 僻みくって言われそうだから皆気を付けてるけど。

「おっと、話しを戻すぜー神谷く。どれ程美人だったんだよー」

「うん？ ああ、オレは会ったんは会ったんだが……状況が状況だったし、そんな余裕無かった」

「ん??」

大草と小宮山に多少は端折ったけど大体の事を説明した。

「落ちそうな女の子助けるなんて、王道だねえ。とうとう神谷もこっち側に来るかい？」
なんか、大草が ずりっ！ と踵で地面にラインを引っ張って 小宮山とか真中を置き去りに 引き込もうとしたけど、ご生憎。

「謹んで遠慮させてもらおう」

「丁寧に話すときって結構嫌がつてるよね。お前って……」

しれっとスルーのつもりだったけど、何だか大草苦笑いしてるし。

「それはどーでも良いんだけどおく なあ、蓮くんく」

「……君づけ止めろ」

「名前とか知ってるって言ったじゃんか。教えてクレって〜」

「おっ、オレも知りたいな」

「ああ、名前ね。確かにそれは知ってるけ「ちよつと待った!」んあっ!」

さつきまで妄想空想ワールドに入ってた真中だったけど、帰還したみたいだ。

「小宮山レベルの顔のヤツならともかく、大草には止めてくれよ。大分モテてるし、教えたくねー」

「変に嫉妬すんなって……。それくらいで」

「ゴラアア!! そこをさらつとスルーすんな! どーいう意味だよ! オレレベルの顔って!!!」

こんな感じで朝っぱらから結構賑やか。

朝の家の疲れも忘れられるから、ある意味ではこいつらには感謝してるかもな。

でも、最終的には名前を公表したよ真中が。

受験シーズンだからって事と、大草は協力をするくって言い出した事もあって了承してた。

確かに勉強に身が入らないのは正直きついんだろう。真中って泉坂に行きたいって言ってたし。あそこ、結構難易度高いからな。

「それで東城綾って名前なんだけど、知ってる? オレらのクラスな筈だけど——」

女子の名前を言ったら2人ならまず間違いなく知ってるだろ、って真中の読みは的中するよ。2人は詳しいから。

でも、さつきまでのテンションが急に下がったのはちよつと気になる。

「東城……？ ああ」

「いたような気もするな、そんな名前のヤツ」

大草は、女子の事ならノータイムで言うんだけど、ちよつと少し考える仕草をして遅れた。小宮山に至っては「ふーん」って感じ。女子の話題なのに。

そして、その理由も直ぐに判明する事になる。

「ええっ！ いんの？ うそっ!! いやー オレって女子の名前と顔、いまだに覚えられなくってさあー！」

「他人の事言える筋合いはないってオレでも思うけど、もう直ぐ中学卒業だろ？」

「何言ってるんだよー！ 神谷だって1年は一緒だったじゃん」

「……仕方ないだろ。クラスの人気だって、前んトコよりずっと多いんだから」

と、2人で暫くそこそこ盛り上がりつつ話していると……、大草が神妙な顔をさせて真中に言ったよ。

「残念だけど、そのノートの持ち主はいちごパンツの美少女じゃないと思うよ。間違えて持ってた、とか借りてた〜とかじゃないか」

ま、オレは別に気にしないし、ノートは真中に預けたから義務感ってヤツも譲渡した
ようなもんだし、違ってたって別に深く考えてなかったよ。

ああ、話は変わるけど大草の話を訊いた後の真中の顔はちよつと面白かったかな。

8話

まあ 真中は違うって言われたからって『そうですかー』と引き下がる様な性格じゃない。

「わかんねーだろ！ ちゃんと確かめてやる！ 同じクラスなんだったら直ぐだ！」
と意気込んでいるんだけど……空回りしそうな気がするな。

あ、走っていった。

「そんなに可愛かったのかなあ……。あそこまでの意気込みだし」

「映画と連動させてるからだと思うな。今の真中」

「あ、それはオレも思う。アイツの中じゃ東城綾ってヤツは美少女だし。……ま 実物見たら180度変わると思うけど」

小宮山の意見でも たまには当たってもんだったよ。

学校に着いて、真中は東城つて子に会いに行つてたけど その表情メチャクチャ引き攣つてたよ。頭の中のイメージが一気に崩れたつて感じた。

でもはつきり言つて、正直失礼だと思つるのはオレだけか？

幾らイメージが崩れたからつてあからさまに表情に出さなくても良いのになーつて思ふ。

「あたしの数学のノート拾つてくれたの!? 昨日からずっと探してたのー。ありがとう、真中君っ!」

それに お礼を言つてくれてるんだから無反応なのはおかしいだろ？

と言う事で とりあえず、真中の隣にいたから、反射的に肘打ちしたよ。

「痛てっ!」

「いやいや、自分で言つておいて無視するなつて」

「っ! ま、まあ そうだな、そーだよなあ……………」

意気消沈つて言葉が一番しつくりくる。それ位意気込みが強かつたつて事が判るか

らなあ。あの時。

「ああ、でも良かった見つかって……………」

真中の顔を東城が見てなかったのがせめてもの救いだよな。うん。

でも…………両手に持った荷物が気になる。ノート見つかった事が本当に嬉しかったのかな？ 随分と喜んでるから落としそうだ。

って、考えてる傍から。

「ほっとしたよお……………って、きやつつー！」

ほっ としたせいとか、手に荷物持つてるの忘れちゃったらしい。

元々不安定気味だったし、ちよつと気になったから。

「おつ……………つと」

何とか、落ちる前に間に合ったよ。

プリントの束だったから、弾みで何枚かは落ちたけど大参事だけは免れた。結構重いし、落とさなかったの奇跡だ。

「わっ ありがとー。えと 神谷くん」

「いや。構わないよ」

「ナイスキャッチだな…………。ああ、ほら まだ落ちてるぞ…………」

真中も何かして気を紛らわせたいのだろうか、せつせと落ちてるのを拾ってくれてる

けど、今朝までの覇気は何処に行ったんだろうなあ。

「確かに別人だよなあ……、記憶にないってのもうなずけるよ……、こんな地味いくな女子だったとは……」

「よーいしょつとー!」

「うげつ!」

とりあえず、ずっとしやがみ込んで通行妨害してる真中のケツに向かって軽く前蹴り。

「痛いな! 何すんだ!」

「いやいや、いつまで座ってたんで。邪魔だろ? もう 紙落ちてないし、一体何探してたんだ?」

「あつ、いや……そ、そーだな」

まるで イジけてるみたいだし、それに 真中の顔みたらよく判る。『別人だ……』つて明らかに思ってる感じが。

まあ、流石に東城の前でその追及をするつもりはないケド。

それに、オレは大体判るんだ。

何がかつて、多分 東城があの時、屋上にいた子つて事で間違いないって事。

朝、大草や小宮山にマジマジと見たつもりはないから、つて言つた事は嘘じゃないけど、結構切羽詰まつたとは言つても顔はしつかり見てる。

確かに雰囲気は全然違ふけど目とか鼻とか口とか、それが変わった訳じゃないし。色々と頭ん中で組み替へたら……あの時の子になるんだ。

何で判るかと言うと……、身内に色々変装するヤツがいたから。

それは、黒歴史の1つでもあるからあまり思い返したくはない事だけど……。

不覚にもあの姉と一緒に掛ける約束をしてしまった事があつて、それで『これデートだねっ♡』と意気揚々、ホクホクだった。でもでも姉はメチャ有名。かなりの注目が集まる。

そう言うの昔から嫌だったオレの事を判つてゐるからか、雰囲気100%変わる見事な変装をしてのけた。化粧等も殆どせず 地味な恰好になつて誰からも気付かれる事は無かつた。

その日は乗り切つただけ……『ううゝ折角のデートだったのに。……蓮の前でもおしやれして、手を繋いでデートしたいのに』とメチャクチャ落ち込んだ。はつきり

言つてどうでもいいケド。

その後も 何度か誘われる事があつて、いつもスルーだけだったんだけど、『謹んで遠慮させていただきます』と丁寧に断るようになったのはこの時からだったかな？

それでもしつこく迫ってくる時は、パーフェクトスルー完全なる無視をしてたよ。今朝みたいに。

兎も角、東城は七三分けにした前髪をちゃんと下ろすだけでもガラッと変わると思つて事。

「あ、あのー それであたしのノートは？」

「おおっと、そうだったよな。ほれ真中。来た目的ちゃんと果たしてけつて」

ノートを返すつて名目で東城つて子を確認しに来たとはいえ、ちゃんと返すべきだろう。

一応、第一発見者としては しっかりと返す所は見届けたい、つて思つちやつたりしてるし。

「そうだな。ええつとノート、ノート……」

暫く鞆の中捜索してる真中。でも、この指定鞆はそこまで大きくないから、そんなに時間は掛からない筈なんだけど、と言う事でオレは大体察した。

……名目で、とはいえノート返しに来た癖に。

「……ごめん忘れた」

「アホか」

真中が答えた瞬間に、オレ ツツコんでたよ。察した通りだったし。

「ええ——っ!!」

「ここでちょっとびっくりしたのは東城の反応だったよ。大人しそうな印象だったんだけど、大きな声で結構取り乱してたから。」

「ええつと、いーじゃん。今日数学ないんだし」

「まあ……落とした東城にも責任あるとはいえ、返しに来たって言ったヤツが忘れんなよ……。返しに来たくって言つときながら、忘れたくって、一体何のいやがらせだ」
「うっ……。し、仕方ないだろ。今日数学ないし……。オレのノートと一緒に出しちゃったんだよきつと」

呆れてると、東城が一步前に出てきてた。

「ねえ真中くん！ あたしの……。なか、見てないよね？」

色々と誤解を招きそうな言い方だと思っただけ……、まあ ノートの事だろう、きつと。

「え、えつと……、ノートの事？」

「うんっ！ そう！」

「あ、ああ。見てないけど」

「おねがい!! 絶対絶対、絶対絶対、絶対絶対对中、見ないで！ ねっ！ 真中くん!!」

物凄くお願いの仕方。

この言い方じゃ、誰だって気になるけど……、まあ 所詮はノートだろう。誰かの悪口書いたり、……うん。そんな子には見えないかな。

「あ、えつと、ほら その……あたし 字 物凄く下手だから見てほしくないな……つて、思つて」

結構な剣幕だったから、真中も呆気にとられてたみたいだけど。

「わかつたよ。見ないよ」

と約束してた。

「見る見ないの前にちゃんと持つて来ような？ 手にでも書いとけよ」

「うっせーな！ 今度は忘れないって！」

「前に貸した漫画、帰ってきたの随分遅かったの忘れたか？ ほれ、天国先生べくぬく3
1巻」

「う、……あ、あの時は悪かったよ」

オレもこの時まで忘れてたけど 真中つて結構おちよこちよいと言うか物忘れがあると言うか……、マイペースなんだ。よくもわるくも。だからこの位の釘はさしといたほうが良いって思った。

「ともかくだ。東城。ちゃんと明日持つてくるし、中も見たりしない。ほら、早く行こう。鐘なるぞ」

「う、うん……。あ、神谷くん。ずっと持つてもらってごめんなさい。私の当番だから……！」

ずっと取り乱してたせいか、プリントの束の事漸く思い出したみたいだ。

まあ、オレ自身もちよつと忘れてたケド。

「いや良いって。同じクラスだし。それにコレ結構重いし、ついでに運ぶよ」
「え、そんな……」

「大丈夫だって。んしょつと」

「どわっ!!」

とりあえず、半分程真中にパス。

「手伝ってもらおうから」

「渡す前に言えよ！ 危ないだろ！」

「え、えつと……、ま、真中くんにも悪いよー」

「はあ……、ああ、良いつて良いつて。ノート忘れちゃったお詫びつて事で」と言う訳で、仲良くプリント分けて教室へ向かった。

あ、半分の方がやっぱ楽だわ。

9 話

とりあえず、授業に遅れなくて良かったよ。

色々落ち込み気味の真中には正直『鬱陶しいわ!』って思ったりしたけど、流石にストリートにそうは言っていない。ちよつと可哀想な気もしたから。

大草や小宮山が言う通り、真中があそこまで入れ込んでるのは映画以外では初めてだった、って思うし、その思いが打ち砕かれたのなら……仕方ないのかな？

でも、うん。……東城には失礼だよな。絶対。

んで、今はちよつと長めの休み時間。通常の10分より2倍長い20分休みだから少しゆつくり出来る。と言う訳で屋上にでも……と思つて階段に向かったんだけど、昨日の今日だし、ちよつと自粛を……と思いなおしてUターンしたよ。良い場所だけど、良く考えてみたら先生とかに目をつかられちゃ大変だし。

「あつ　神谷くん!」

「ん?」

そんな時だった。東城と廊下でばったり会ったのは。

「東城さん？ どうした？」

「あの、その……もう一度お礼を言いたくて」

「プリントの事？ それなら別に良いよ、ほんとに。真中に手伝って貰ったし。……それに実は詫びのつもりでもあるんだ」

「え？ お詫び?？」

「そうだよ。オレが真中にノートを渡したおかげで、遅れちゃったんだよくよく考えたら。まあ前にも考えた通り、落とした本人にも責任はあるけど、ちよつと軽率だったかな？ と少なからず自己嫌悪してた。役割を全部真中に渡した〜と思ったとは言え一番最初はオレだったから。」

「いや、ノートを一番最初に見つけたのはオレだったんだけど……、真中に渡したんだ。オレが渡しとく、って言ってたし」

「あつ、そうだったんだ……。で、でも別にどっちが悪いって事は無いと思うよ。だって、忘れちゃう事だつて誰にでもあると思うし、神谷くんが見つけてくれてなかったら、あたしのノート……見つからなかつたかもしれないし」

「そつか。ならちよつと安心できるかもな。つと、そうだ。東城は大丈夫だったのか？」

「え？ 何の事……?？」

もうちよつと早めに訊いた方が良かったかもしれない。……ちよつとカマかけになるけど、オレは自信があつた。

「あの時、落ちただろ？ 足とか怪我してないか？」

「つ……………」

あ、東城驚いてるみたい。

この様子じゃ本人も判つてゐるって思つてなかつたかも。

「え、えつと…………、その、それつて…………」

「そ。屋上での事。……………どうにか捕まえられた、つて思つてたけど…………、落ちたから、正直オレも焦つたよ」

東城は、今度はさつきとはくらべものにならないくらい、大慌てで頭を下げたよいきなり。

「ご、ごめんなさいっつ！ あ、あの時助けてくれたのに、あ、あたし逃げちゃつて…………」

「…………いやいや。別に構わないつて。でも ちよつと……………こんな所で大きな声でするのは…………」

思いの外、東城の声は大きかつた。それに頭を下げてるし。

ここは廊下で、その他大勢の生徒さんたちも往来してる。目立つ事この上無いつて訳だ。

「あつご、ごめんなさい……」

少しだけ小さくなつていつてるけど、まあ大丈夫だ。

「大丈夫だつて。あの場所、東城さんもお気に入り？ ……隠れてて、驚かせて申し訳なかつたけど、先に来てたのはオレだったから、そこん所は許してほしいな」

「いや、あたしを助けてくれたし……、許すも許さないも無いよ。えと、今度は感謝を受け取つてください。……ありがとう、神谷くん」

にこつと笑う東城の顔は、うん 謝つてる時よりずっと良い。皆地味地味つて言つてるけど、別にそうは思わないかな。大人しそうなのは間違いないと思うけど、オレにも真中にもはつきりと返事を返してる所を見ると、人見知りつて訳じやなさそうだし。「えつと……最終的には助けられてないけど、受け取つておくよ。ノートの方はオレからももう一回くらいは真中に言つとくから。念を押しかかないとな」

「クスつ…… 漫画が返ってくるのがおくれたんだよね？」

「そーそー。……あのせいでオレ結構面倒くさい事になつたんだよなあ……」

その後は時間こそは短いけど暫く東城と談笑してた。

西野に続く、家族以外の異性ととの交流つてヤツかな。……今の所は特に問題ないよ。

つていうか、あまり交流が無かつたのは、小学生 それも低学年時代から 姉に、『女子には気を付けろ』 怖い生き物だからね』つて何度か刷り込みされてたせいだ

きつと。

怖い云々は別にしても 交流していると姉が凄く絡んできそうだったから、と本能から判つてたからだと思う。きつと。……流星に今は学校だし、見られる心配なんかないから大丈夫だろ。

と言う訳でそろそろいい時間だ。

「さて、そろそろ予鈴も鳴るし、戻ろうか」

「うん。あ、あたし先生にちよつと用があるからまた教室で」

東城と別れて、教室に戻ろうとした時だったよ。

何時からかは判らないけど、何だか視線を感じる気がした。

気のせいかな？ っと思つてたその矢先。

『違うんだよ！ オレの場合は好きとか嫌いじゃなくて！ ただ あのコのパンツがめくれる瞬間をビデオに収めたいだけなんだ!!』

何だか、視線とかそんな些細なのが一気にぶっ飛んでしまう様な衝撃的なセリフが廊下の隅々に響いてる気がした。

うん、空耳だよきつと！ そんな正直な男子なセリフ。幾らなんでも理性が勝つって！ 考えたとしても理性が勝つに決まってる！ 口にまで出てこないって！

『あつ！ 違った!! 捲れるのはパンツじゃなくて、スカートね、スカート!!』

もう一度、聞こえてきた。

聞き覚えのある声……。いやあ とても身近にある声。さつきも何度か聞いたし、話してたヤツの声。

『パンツとかスカートとか、そーゆー問題じゃねえだろ!?!』

『わ——っ 真中が変態だああああ!!』

そうそう、真中って名前だったよ。忘れてた。……も、友達止めようかな？

ガツクリと頭を抑えた後、追いかけてこしてる3人を発見。
「違うっつの！ 芸術なんだよ！ オレが求めてんのは芸術!!」

まあ、確かに判る面もある。女性の裸体を描く裸婦画って言うのもあるし、芸術と言つても良いかもしれない。でも、ここは平凡な中学校。芸術美術専門学校！ なーんて肩書なんか無い極普通の生徒達が集まる中学校なんだ。

そんな場所に、そんな感性を持ち込んできて……。

「そんなんで周りに弁解なんかできる訳無いだろ！」

「ぶげっつー！」

オレは勢いよく横切りそうな真中の足を引っかけた。盛大に頭からダイブする姿を見て、少しだけ溜飲下がる。

「……欲望に忠実なのは良いかもしれんが、周囲の目を考えろつての」

「いつてえなあ！ って神谷!!? 違う違うつて！ 欲望じゃなくて芸術!!」

「その芸術を強く求めようとする欲の事言つてんの。傍から聞いたら普通に変態だから。……オレ、結構念を押ししたつもりなんだけど、真中の耳には届かなかったか……。くっ……。オレの声はお前には届かないの……。か？」

「何悲壮な顔して、んなセリフ言ってるんだよ!! 妙に感情も込めやがって!! 知ってるんだぞー! 絶対、それからかかってる時の表情と声ダロ!」

うん。判ってるならよろしい。

でも、お仲間だと思われたくないのは事実だった。偽らざる本心ってヤツだよ。

「それによお! オレなんかよりよっほど小宮山の方がエロいじゃねーかよ!」

「エロと変態は、正直違いう気がするケド。まあ 否定はしないな」

矛先が小宮山に向かったと思つたら、逃げてた小宮山が引き返してきた。

「コラアア……! ぬあに言ってるんだあああ? 真中に神谷あ! オレのどこがエロいっつんだよお……! 否定しろや!」

「否定なんかできつかよ。神谷の気持ちは判る! もうそれなりに長い付き合いだ。変態でエロは小宮山の方だ!!」

「なあ……大草。オレちよつと距離置いた方が良いかな……う?」

「止めたり纏めたりする役が減るから勘弁してくれ……。唯一の常識人が減られるのは困る……」

「……………はあ」

「なら、口直しに今度合コンにー」

「断る」

「デスヨネー」

真中は小宮山と、オレは大草とちよつとした言い合い。

いや、真中と小宮山だけかな？ 言い合いしてるのは。

「それにいつもいつも、つかさちゃん、つかさちゃん、って女の事ばつかじゃねえか。考えてんのはよお！」

「んだと teme エー！ オレのは健全な感情なんだよ。つかさちゃんの魅力も知らねえくせにこの野郎くくく」

「おめえだつてつかさちゃんの履いてるパンツくらい想像すんだろお、布団の中とかでよおくくくく!!」

……何だか、矛先がおかしくなっていないか？

「なんで、西野の話になつてんの？」

「ああ、それは かくかくしかじかで……」

大草に説明して貰ったけど、2人して盛大に間違えてる事に同時に気付いたよ。

あの屋上の女の子は東城だったんだし。

「布団の中であくくんな事やこくくくんな事考えて、いろいろとシちやってんだろく！」

「そー言う事はまじめな恋愛をした事ねえヤツが考えてんだよ！」

「んだよ、片想いのくせに!!」

「片想いをなめるな!! お前、誰かのことを想って 枕を涙で濡らした事があるのか!? ええっ!?!」

話しが何だか重い。……想い、じゃなく 重い。

誰かの事を想って涙を濡らすのは……オレだつてないな。うん。つてか、そんな事よ
り。

「お前から大声で何言い合ってたんだよ……。せめて誰もいないトコでやってくれやこのアホ共」

「その点は、私も同感だよ。もうっ 蓮の事見習ってほしいよ」

そーだそーだ！　って思ったんだけど……、なんだろう、この感覚。つい最近も　この感覚感じた事あるゾ？　ごく自然に会話の中に入ってきてて、本当に自然に一緒にいて、違和感の中々感じる事が出来なくて驚くって展開。

「……………」

一度経験したから、直ぐに反応する事が出来て良かった。後ろにいるのって絶対……………。

『あはは、ごめんごめん。名前で呼んじやった』

目が合うなりにこつ　と笑みを見せてくれる女の子がいたよ。

うん、西野だ。

後ろに沢山の男子生徒諸君を引き連れてる。……良かった。あの笑顔がオレに向けられてる、って事が判った様子はないし、皆ただただ顔を赤くさせてるだけだし。

ここの中学校の皆って結構純なんだな。直ぐに顔を赤くして。

西野は、オレの事をぐつ　と引き寄せて後ろに迫いやると、真中達の前に立ってた。それにしても、結構力強い……………？

「キミたちー！ 突然の告白。気持ちはずっともありがたいかもだけどおー ここは廊下ダゾ！ 告白するなら もっと人目につかないところでしろ！」

突然の西野の登場に度肝抜かれた事だろうな、特に小宮山。

「つつ、つつつつつつうっ!!」

だって、口が上手く回ってないし。

「つかさちゃん!!」

あ、漸く口に出せたみたいだ。

「も——っ こーゆの、嫌いなんだよなあ〜」

「つかさちゃん髪切ったの!?! いいなあ、その髪型もすつごく似合うなあ〜♡」

「うん、ありがと」

あ、真中も顔赤くさせてる。

……でもよく考えてみると 不思議じゃないか。西野可愛いし。結構傍で見たら、オレも恥ずかしかつたし。

「こんなヤツはほっといて！」

西野は真中の事見てたみたいだけど……、それに気づいた小宮山、真中を片手でぶつ

飛ばした。相変わらずのパワーだ。

「あ、あのつかさちゃん、オレは……………」

おつ、告白タイム？　って思った。あれだけ、西野の話題を出しまくって、本人を前にそれを伝えるなんて、相当な勇氣だな、と思ったんだけど……。

「悪いけど。あたし、怖い顔の男って駄目なの」

見事に一蹴された。

西野って、結構容赦ないんだな。小宮山に至っては、何処から降ってきた??　って思う、ドリフもびっくりな量の金盥が頭上からガラガラどっさりと振ってきて、埋まってしまうってた。

「それと、夜な夜なパンツの事考えてるのはキミ？　パンツの柄の事まで口にするなんて、えっち過ぎるぞ!？」　判るっ!？」

それって、オレの事も含まれてない？

と言う訳で　ゆっくりゆっくりと移動して逃げようとしてたら、西野って背中にも目があるの？　って言うくらいタイミングで。

「逃げたらまた呼んじやうかもしれないよ」

皆は、誰に対して言ってるのか判らないだろう。………だけど、十分伝わったよ。だって、動けなかったもん。きつきの東城の時とはくらべものにならない程の人数に囲まれてて、こんな場所で言われようものなら……、どうなってしまうのか。小宮山なんか、ゾンビのごとく復活して、襲い掛かってきそうな気がするし。

そもそも、先に約束破つたのそっちだろー！　って言いたいけど、それ言ったら火に油どころじゃなく、火薬だから止めといた。

それは兎も角　西野の言ってる意味が判らず、顔を赤くさせて固まってる真中にもう一言。

「あたしの今日のパンツはいちご模様！　判ったらこれ以上えつちな事、大声で言わない、考えない！　判ったな？」

自分でバラしちやってるよ。

うん？　でも昨日も同じだった様な気がするケド。

それは兎も角、西野は2人に笑いかけた後　この場から去っていきこうとしてオレの顔を横切った時。

「また後で」

「??」

「話したい事あるから」

「何が？」

「授業始まるから 早く帰ろーっと！」

小声で話してくれたのは、良かったかも。誰も聞いてないと思うし。

と、言う訳で嵐の様な西野は去っていった。嵐が去っていったら 当然の如く この場も静かになる。男子生徒達も一緒になって消えていったから。凄まじいの一言。ここにも一人天災クラスがいたか。

「おおい！ 神谷！ 手伝ってくれえ！ この2人動かねえ！」

「ん?? ……ああ、なるほど」

大草のヘルプを訊いて、真中たちの方を見てみると……、真中は石化しつつ 顔を赤くさせて、小宮山に至っては 瓦礫の山に埋もれててピクリとも動けてない。

死んだ？

「もー！ おまえら授業始まるってば〜！」

「オレは知らんぞー。庇ったりもしないぞ。次の後藤先生、結構なスパルタだつて事

判つてゐるくせに」

大草の大声が効いたのか、オレの脅迫めいた事実が効いたのか判らんケド、2人は何とか復活してた。

それにしても、西野の話って何？

その次の授業内容が頭の中に入ってこなかったよ。

嫌な予感 ビンビン感じたから。

10話

とりあえず、さつき西野が言つてた『また後で』つてセリフなんだけど、西野は正確に『何時にく』と言つてないからなあ。

ボクとしては何時アナタに会えば良いのか判らないのですよ、はい。

だから、休み時間も用事が出来たつて不思議じゃないしく下校時間になつたつて、大切な友達の方を優先させたつて別に不思議じゃない、よな？

オレは悪くないよねー？ オレは悪くねーつて叫んでも良いかもだよね？

うん。絶対しないけど。

「さ、帰ろうぜー！ オレは謎が解けた！ ゼー！ つたいそうだ！ 間違いない!!」

真中はと言うと、何でか最初からテンションMaxだった。固化現象解除された途端にこのテンション。

あ、実は西野じゃないって事、ちゃんと真中に教えてあげたかったんだけど……。
西野の言葉。云わば何か得体のしれないプレッシャー？ をずつと感じてしまつて
て そんな余裕皆無だったんだよ。

まあ、学校から離れたら余裕が出来るって思うし、大丈夫だろうな。うんうん。

「どうしたんだ？ 神谷。何だか表情がコロコロ変わつてて変だぞ？」

「……そう？ 別に何でもないケド」

「何でもないって顔じゃない、って思うケドな……。ま、無理には聴かないよ」

大草は、何やら察してみたんだけど、はつきりとは絶対に判らないだろう。西野と
面識を持った事を知るヤツはいないから。ずつとくたばってる小宮山辺りに知られ
たら ちよつと厄介だ。

でもま、得体のしれないプレッシャーをずつと感じるよりははるかに良いので、
とりあえず帰宅準備準備。

「おーい！ 神谷ー、神谷ー！ ちよつと待ってくれー」

「え？」

帰ろうとしてたら、担任の先生に呼ばれた。

行つて聞いてみたら、明日の日直の件だったよ。ちよつと忘れてたんだけど、明日はオレが当番で、HRが終わった後に教材運ぶの手伝つてくれ、と言う事。勿論、先生の頼みを『嫌です』なんて言える訳も言う訳も無く、了承する。だって、日直当番の仕事、皆の仕事だし。受けるのが当然だし。

「HRの後、と。うん、ちゃんと覚えとかないとな」

生徒手帳にせつせと記入して、さっさと帰ろうとしたその時だったよ。

「はーい。こつちの約束もちやーんと覚えてるよね？　そうやって忘れないよーにしているよね？」

ぽんぽんつ、と二度程肩を叩かれた。

声からして、誰だか判つたよ。しれーつと逃げようものならきつと、持ち前の読心術で見抜かれて『蓮ー！　逃げないでよー、蓮くく!!』って言うだろうな。そう、西野の性格ならな。うん間違いない。

「だけど、何となく嫌な気配がするから、振り向く動きも固いよ自分。」

「よし！ 今逃げようとしなかったな。エライぞ！」

「ま、逃げたら 西野サンに酷い目に合わされるし」

「ちよつとつ！ 人を悪女みたいな言い方しないでよ！」

ぷくつ と頬を膨らませる西野。

うん、後ろには誰もいないな。さつきみたいな大行列は。

「それにしても、何処の大名様ですか西野は。教室移動する毎についてきてるんじゃないか？ 皆。まるで参勤交代だな」

「もーっ！ それも茶化さないでよ！ アレは頼んでも無いのに、ついてくるんだから仕方ないだろうっ！」

腕を腰に当てて仁王立ちしてる西野。……これ以上言うと ちよつと被害が大きくなりそうだから、直ぐに本題に。

「それで 用って何だ？ 西野。……まあ あの時に大きな声で言わないでくれたのは感謝しとく」

「ふふつ、蓮つて目立つの嫌う恥ずかしがり屋さんみたいだからねー」

「……そう言う西野は、直ぐに忘れちゃうから 忘れん坊つてヤツか？ 坊じゃないか。」

忘れん嬢？ いや、坊つて確か女子にも使えた様な」

「何だよ！ 忘れん娘って！ それに別に間違ってるぞ。今2人じゃん。学校とは言っても2人の時はくっつけて言っただろ？」

「そう言えばそうだ。」

「揚げ足取られてしまったよ……。」

「わかったわかった。それで用事って？ 何だったんだ？」

「……うん。えつとねえ、蓮ってうそつきだなくって思ったから、その事のお説教を、だよ」

「……はい？」

「西野さんが言ってる意味、いまいち判らない。いまいちどころじゃないよ、全然わかんないよ。いつだれが嘘をついたと言うのだろうか？」

「ついたよっ！ 蓮、あの時『家族以外の異性と交流殆どないっ』って言ってたじゃんっ！」

「……若干ニュアンス違うと思うけど、まあ そうだな。似た様な事 言ったよ」
「それが嘘だったじゃんっ！」

「??？」

「いやほんと、何言ってるの？ って素で思った。」

「『何言ってるの？』みたいな顔しないでよ！ ……だって、あたし見たもん！ 休み時

間に、……その、女の子と楽しそうに話してただろ！」

「んん？ 休み時間？ 女の子……？？ あー」

西野が言ってる意味、漸く理解出来た。

そう言えば、真中達のおかげで頭ん中から速攻で抜けちゃったけど、あの時、妙な視線を感じてた。アレ、西野だったんだ。……そう言えば直ぐ後に西野着たな、確か。

「思い出したかつ!？」

「ああ。うん。……楽しそうかどうかは判らんが。でもそりゃ話すだろ。真中つてヤツと一緒に重そうな荷物持つてあげて、その礼を、だったんだ。……幾らなんでも、そんな状態でオレが無視するなんてするわけないだろ？ そりゃ、あんまり無いって言ったけど、オレから話す事があんま無い、つて事で」

確かに、つまらない会話とは言わないよ。東城と話す時もオレ自身は楽しかったし。それを他人が楽しそうな会話、ととらえるかどうかは判らないけど。……あ、西野が捉えてるから見えたのかも。

「ふーん……。そー言う風には見えなかつたけどなあ。何だか笑顔だったし、あの子、何度も何度も頭さげてたし。物持つてあげただけで、あそこまで頭下げるかなあ？」

「んー……。ああ、礼はそれだけじゃなくつてだな」

「わ！ 隠し事してるの!？」

「何でだ……。言う程の事じゃないって思ってたと言うか、あんまり言いふらすのもどうかと思っただけだよ」

「あ……。それは確かに。あの子も聞かれたら嫌かもだし」

西野は頭冷えたのかな？ って思えるくらい 声色が変わったよ。トーンも。

「だろ？ ってか 何でそれ位で怒るんだよ……。オレにはそっちの方が不思議だ」

「べ、別に怒ってなんかないよ!」

「そうか？ 正直 屋上での一件より怒ってる様に見えたけど……」

「おくじょうの……。って もうっ！ 忘れてよ! ああ、そうだった。あの男子たちの友達なんだよね？ 全く君たちは!! えっちは駄目だぞ」

あ、また元に戻っちゃった。……。これはオレのせいかな。

でも、怒らす事になると思うけど、言いたかった事があるから ぼそつ と。

「自分で柄をバラした癖に……」

「なんか言っただけ!？」

「いや。別に。ただ、西野が2日も同じのはいてる何でちよつと想像が、って思っただけで……。って」

あ、……。これはマズイ。

思わず、思った事そのまま言っちゃった……。確かにあの時間違いなく思った。真中にパンツの柄を告白した時に。

「ちよーっ！ そんな同じな訳ないだろー!! な、何考えてんだよ! ばかつ!!
えっち!!」

「あ、いや その……」

「あたしは、その……いちこのが好きなのっ! だから、好きだから同じの、持つてるからなのっ!!」

「わ、悪かった。今のはほんとに。……確かに、考えたらその可能性の方が高いし、わざわざ確認する様な事でもないし……」

口は禍の門だつてことわざ……。今更だけど身に染みたよ。うん。

「判つたら良いよ! もう 蓮は考えすぎだぞ! えっちな事ばかり!」

「うーん……。そう言うつもりで考えてた訳でもないんだけど……。ふとした疑問と云うか、何と言うか……」

「それも何だかあたしに失礼じゃん!」

「んじゃ どーすりやいいんだよ!」

互いにツツコミが冴えるね。

それにしても良かった。……この場にいるのが西野と2人だけで。他に男子生徒や

らがいたら一体どうなつてた事やら……。女子生徒だつたとしても、色々な噂を立てられる事間違いないだろうし。

今は下校時間で 先生に会つてた時間を入れたら更に時間が経つてる。

「ううー、なんだか 蓮に色々やられてばかりだ」

「変な言い方しないでくれって」

「でも言ったのは事実だもんね！」

「わ、わかつたわかつた。ほんと、悪かつたつて。——ううん、オレは西野に謝つてばつただ。……それに 冤罪が多い気もするし」

そう思つたつて無理ないだろ？ ぱんつ見た事だつて偶然と言うか西野の自業自得。東城と話してた事だつて、別に嘘ついたつもりはない。そんなの人の捉え方で変わつてくるし。

つまり失言だけだ。オレに非があるとすれば。……口にチャックだ。色々と。

「よーし。ならお詫びしてもらおうかなー」

「うん？」

「良いでしょ？ 無茶な事言うつもりないよ。でも、チャラにしたげるから」

「……へいへい。西野サンの仰せのままに〜」

何だか色々と理不尽気味なんだけど、……いや 正直に言おう。

西野と話すの、すごく楽しいんだ。

怒らす事が楽しい、って性格悪い様な事は言わないつもりだけど……、やっぱり色々表情いっぱいに出して反応する西野を見たら楽しい。可愛らしいし、気さくな西野の性格も相余って更に楽しさに拍車をかけてるって感じかな？

流石に何度もそう言う事を本人に言うのは恥ずかしいから言えないけど。

「うむうむ。苦しゆうないぞ蓮クン？ えっと それでお詫びなただけどねえ」

コツコツつ、と芝居が掛かった歩き方で、西野はオレに近づいてきたよ。それに中々止まらなかった。

えっ、ええっ!? って思う間もなく、滅茶苦茶近くに来たよ。

互いの前髪が触れるか？ って思える程至近距離だった。うん。近いね。

……つて、いやいやいやいや!

「ち、近いって! それぜつたい近いってっ!」

ちよつと間違つたら……唇さえも合わさいかねない程の距離だよ。ドラマとかでしかないんじゃない?

オレだつて男子なんだから恥ずかしいんだつて!

だけど、これに匹敵するかもしれない様なお詫びの内容を西野から依頼されちゃつたよ。

「蓮の歌、また聴きたいなっ? あたしに聴かせて欲しい!」

うん。すつごい笑顔だよ。

綺麗で可愛くて、輝いてるって言えるよ?

でもちよつとね……。

歌はちよつとした諸事情。私事だけど……色々ときついお願いなんだ。

「う、ん……。それ以外は駄目か？」

だから、内容の変更！ その要望を出したよ。思いっきり。

だけど—— 次に帰ってきたのが、本日一番。或いはこの学校に転校してきてから含めて、一番のモノだったんだ。さっきの超接近や、歌のお願いとかよりもずーつと凄
いモノが。

「えー、なんで？ あたし蓮に惚れちゃったから！ お願いっ」

「……………」

だって、オレ頭ん中完全にフリーズしちゃったから。

何にも考えられなくなって……『〇・ワールド』発動されちゃったから。

イツタイ、何テ言ツタノカナ？

11話

蓮は出会った最初から　こんな感じだったよね？　そう言えなきゃ。

でも蓮って、あんなに綺麗な歌声で凄く上手だって思うのに、なんでこんなに隠すんだろう。

うーん　男の子ってこういうのかな？　って思っちゃったよあたし。だって　やっぱり『綺麗な』歌声って言われるよりは『格好良い』って言われた方が男の子にとっては良いのかもしれないし。

でも、蓮の歌はとにかく凄かった。英語の歌詞をネイティブな感じって言うのかな？　ほんと帰国子女って思えるくらい　すらすらすら　と英語で歌ってるんだ。直接見た訳じゃないんだけど、そのの所を見たら　きつと格好良いかもしれないね。……うん、でも　やっぱり格好良いより綺麗な声って言うのが一番しっくりくるかな。

それに　あたしは思うんだ。

蓮と出会って、何だか毎日が違った色に見えてきてるって。

あ、でも別に蓮と出会う前までの生活や学校に不満があった訳じゃないよ？ 沢山囲まれちやう時は正直困っちゃうけど 頼りになる友達も沢山いるし、とても楽しい。もうちよつとで中学卒業は とても寂しいし。だってだって 沢山の思い出があるんだから。

でも、やっぱり違うんだ。違った色に見えるって言う表現以上に何だか上手く言えないんだけど、そんな感じがするの。

だから、このお願いだけはどうか聞いてもらいたいんだ。だって、あの歌があたしと蓮を引き合わせてくれたって思ってるんだもん。チャラにしてあげるって言ったけど……交換条件でも良いんだよねー。蓮はあたしに何かしてほしい事とか無いかな？ 勿論っ え、えっちなのはダメだって断るよ！ だって そう言うのって好きな人とするものだって思うし……。そもそも 蓮がそんな事言うとは思えないけどね。今まで散々怒っちゃってるし。

——ん？ でも あれ？ どうしたんだろ？

蓮が何でか固まってるよ。歌をうたうのやっぱり嫌なのかな。……でも あたしは

聴きたいんだ。また、あの時の様に聴いてみたい。

「蓮？ やつぱり…… 嫌、かな？ あたしは……その……」

「……………」

「？ 蓮？ おーい れーん！」

あれ……？ 何だかいつもと違う気がする。

よく見てみると、顔が凄く赤い……？

「つて、どうしたの？ すっごい顔が赤いよ？ 大丈夫??」

「……………」

「ねー、ねえつてば！ もうっ 無視するなっ！ ……………うー」

無視するな、つて言ったけど そうは見えないよ。

ここままで固まつてる蓮を見るのは初めてかも。

そこまで嫌だったのかな……？ 何だか罪悪感があるかも。

「ご、ごめんね？ そこまで嫌がるとは思ってなくて……」

「……………あ、あの に、にし……の?」

「う、うん？」

蓮の顔が凄く赤い。……歌をうたうのつて蓮にとつてはそれ位の事なんだ。そうだよね。だから誰もいない屋上とかで歌ったりしてたんだよきつと。……あまり無理言

う訳にはいかないかな。チャラにしてあげる、つて言っただけど 元々 蓮は殆ど悪くないんだし。

でも、あたしの考えとは何処か違う気配だったよ。

「ひよ、ひよつとしてだけど…… いま、なにを言ったのか……、わかつてなかったりするのか？」

「……へ？ どういうこと？」

「だ、だつて に、にしのが…… そ、その……つ」

蓮がめちやくちや動揺してたから。

でも なんで？ あたし変な事言っただけかな？

「あたしは蓮の歌をーつて言っただけど……。それが何か変だった？」

「……はあ、はあ、はあ……。……なあ 西野？」

顔が凄く赤いままだけど、深呼吸を何度かした後 蓮は少し調子を戻したみたいだった。

「歌が、なら 最初からそう言ってくれよ。……いきなりそう言う風に言われたら オレだつて驚くから。メチャクチャ驚くから。それに 前にも言っただけど オレだつて男子なんだぞ。西野がどう思っているのかは知らんけど、全く興味ない、つて訳じゃないんだからな？」

「えっ? えっ? どういう事?」

「……さっきのセリフ、西野自身が言ったセリフ、もう一回ゆっくりで良いから思い出してみてくれ。と言うか、オレとのやり取りも全部。数秒前だし ゆっくり考えたら思い出せるよ。……オレの口から説明するのは ちよつとハードルが高すぎる」

蓮は真剣な表情でそう言つてた。

あたしのセリフ……? さっきのセリフを思い出す、か。

よく考えたら蓮の歌のことばかり考えてたから、さっき言つたセリフなんて殆ど頭から抜けちゃつてたよ。

じゃあ、蓮の言う通りゆっくりと思い出してみよつかな。

えーつと 確かあたしが『蓮の歌また聴きたい』つて言つたんだよね。チャラにしてあげるからーつて。それで 蓮の答えが『それ以外じゃ駄目か』だつたよね。

うん。最初は断られちゃつたんだけど、あたしはどうしても諦めきれなかつたんだ。蓮の歌、また聴きたいつてずっと思つてたから。

だから、確か あたしは『蓮にほれ……』ん?

………んん??

あ あたし なんて言った？

蓮に 何？ 蓮に……ほ、惚れ？ え、ええ!?

「あ……………」

「…………判った？」

頭の中が……急速に熱く、それと同時に冷たくなつてく気がした。一気に血の気が引いたのと同時に 頬が真っ赤に染まつてると思う。だつて だつて あたしは蓮に 思いつきり言っちゃつたんだから!

「わ、わああああ!! ぐ、ごめつ え、えとそのつっ!!」

そうだよ! なんであたし、今の今まで判つてなかつたんだ??

あ、あたし 蓮にほ 惚れちやつたつて言つちやつたんだよっ!?! 蓮の歌のことばかり考えてとんでもない事口走つちやつてたんだよ!?!

れ、蓮が顔を真っ赤にさせた理由がよく判つたよ!

でも……顔が赤くなってるって事は、蓮も……。

「ふう、今回のコレは ほんとうに時間が止まった気がしたよ。西野は 人を驚かす天才だな。いつの間にか背後に現れるし、いつの間にか会話に紛れたりするし……」

「べ、別に天才なんかじゃないし、嬉しくないよ！ 元々そんなつもりだって無いんだし！」

「つまりは、天然と言う事か？ 随分と性質が悪いぞ……。心臓にも宜しくないな」

「た、ただ蓮が困ってる顔みてやりたかっただけなんだよーっ！」

「今は西野だって 言った事理解して慌ててたじゃん！ つまりぜんぜん説得力無しだ！」

確かに蓮の言う通りだよ……。

今回ばかりは蓮の勝ちだって思う。勝ち負けなんて無いって思うけど……。あたしの負けだ。

でも、この後だったんだ。

蓮の顔が さつきとは違った風に見えたのは。

「でも、西野がオレの歌で……。そんな風に言っちゃったって事、正直嬉しいよ。褒めてくれた事もそうだし、聴きたいって言ってくれた事も嬉しい。光栄だ。ありがとな」

少し恥ずかしそうにしてるけど、笑顔だった。はにかんだ笑顔って言うんだと思う。なんだろう……。歌を聴いた時みたいに あたし 胸がドキドキしてるのが判るんだ。

「オレはな。その……。『歌』をうたう事が嫌いって訳じゃないんだ。……まあ 歌は昔からちよつと色々とあつて。そのおかげで 以前は人前でも歌ったりしてただけど……。ちよつとした出来事があつて あまり歌う事が無くなって……。そこからずる と今の状態つて感じかな」

「え、うん……。そつか……。そうなんだね」

胸がまだドキドキしてる。蓮の言ってる事がなかなか聞きとれないよお……。でも何とか辛うじて聞きとれてる。

歌を聴けないのはやっぱり残念って思うけど、今日の所は良いって思ったりもしてよ。

ちよつと、あたしの頭も冷やしたいから。帰ったら水シャワーだね……。だつて頭から思いつきかぶりたい気分だから……。

「だけど、西野にチャラにしてもらえるなら、やっぱり構わないよ」

「……えっ!?!」

「ははっ、最初は 他のにしてつて言つておいて格好悪いけど。……そこまで褒めてもらえたのは、久しぶりだからな」

蓮が にこつと笑つた。さっきのあのはにかんだ笑顔に戻つた。

でも次に、困つたのはあたしの方だつたよ。

蓮がそう言ってくれたのは凄く嬉しかったんだけど、その後一体どうなった？ どうやって家にまで帰れたかが判らないんだ。

気付いたらあたしは家に帰ってて、考えてた通り思いっきり頭から水シャワーを浴び続けてた。まるでワープでもしたの？ って思えるくらい。子供かあたしは。

「うー 背中が、すっごい熱い……。ぜんぜん冷えないよお……」

どれだけ水シャワーを浴びてるか判らない。でも全然冷えないんだ。季節柄普通は寒い筈なんだけど……。

うん、そうだよね。もう 自分にくらいは白状しないといけないよね。

あたし あの屋上で蓮と出会ってから、蓮の事ばかり考えてる。確かに切っ掛けは歌だった。あんな綺麗な歌声初めて傍で聴いたから、惹きつけられて、引き寄せられたんだと思う。それから、蓮の事ずっと探してたんだ。屋上で逃げられちゃったあの時か

ら。

見つける事が出来て本当に嬉しかったし、別の女の子と話してる時は胸の奥がちくつとした。嫌な気分になっちゃった。

「そう、だよね。あたし……蓮のこと……」

うん。そうなんだ。

でも蓮はどう思ってるんだろう。顔は凄く赤くなってたけど『健全な中学男子なんだから』と言ってたから……やっぱり照れちゃっただけなのかな？

特別に……って事は無いのかな？

「ううう……！！ もやもやするー！！」

この後は、いつまでお風呂にいたのかは判らないんだけど、お母さんが心配して呼びに来てたよ。おまけに水シャワーだったから身体が冷えてて『何してるの！ 風邪ひくでしょ！』って怒られちゃったよ……。

ちゃんとお風呂にその後入ったんだけど、身体が冷えてるってお母さんに言われたんだけど、背中はまだ凄く熱かったよ。

でも、心配かける訳にはいれないから ちゃんに入ったよ？

それに風邪引いて……蓮に会えなくなるのも嫌だからね。

「よし……っ！ あたしからぐいぐい行っちゃおう。そうだったよね。あたし 本当は告白を待つんじゃないやなくて、自分からガンガン告っちゃうタイプだもん！」

攻めに攻めてが心情！ 受け身なんて性に合わないもんね。

歌を聴きながら告るって言うのも面白いかもね。

「ううくん……。ユリは告白はロマンチックにくって言ってたけど、歌も結構そうだよね？ あたしは好きだもん」

「ちよつとー！ つかさちゃん！ 今度のはぼせちゃうわよー!?」
「わわっ！ ごめんお母さん！ 直ぐにあがるよー！」

意気込んだんは良いけど。

なんか、今日のあたしダメダメだよ……。

12話

——本當にびっくりしたんだ。

西野の言葉に本當に。

それに あそこまでびっくりして動揺した事って今まであったどうか判らないんだ。

いや、今も思い返してみてるけど やっぱり多分無いって思う。実の姉がオレに色々とかミングアウトした時の衝撃よりもずっとずっと上だと思った。

……それはそれでどうかと思うけど、まあ 良い。姉のアレは日常茶飯事になってしまってるから、もう記憶も薄れてるんだと思う。寧ろ永遠に忘れ去りたいって思ってるくらいだし。

『あたし蓮に惚れちゃった』

西野からそう言われて、オレの頭の中でずっとその言葉がぐるぐると回ってる。今も回り続けている。

当の本人は 何だか判ってなかったっぽいけど、それはそれで有り得るの？ って後から思った。でも、西野の慌てっぷりを見てみると あるんだろうな。きつと。

それに殆ど告白に近い。いや まさに告白だって思う。そんなの今まで……受けた事無いとは言わないけど、他人に言われたのは初めてだったし。

慌ててる西野を見て、逆に何とかオレは平常心を保てたけど やっぱりまだ胸の奥が熱い。顔もきつとまだ赤いって実感してる。

そんな時だったよ。皆と合流したのは。

その時は正直嬉しかったかもしれない。幾ら西野の勘違い《？》《？》だったとしても、色々と考えすぎてて、頭の中が悶々としてしまっていたし、今は気を紛らわせたかったんだ。

でも…… 違う意味で疲れる事になるんだよな、これが。

「なあなあ！ やっぱあの女だと思うんだ！ 髪型は違ったけど 切ったとかなんとかって言ってたし、あいつスカートめくれてもパンツ隠さねーよーなタイプっぽいもん！ オレのことなんか 気にしてた気がするし、いちごのパンツ履いてるって言ってたし！」

「……こんな住宅街地でんまもん力説すんな。訊かれるとメチャ恥ずかしいだろ」

そう言えば、真中に説明してなかったよ。あれは西野じゃない、って。

「でもさあ……。真中がそう言うのならそうかももしれないけど、西野が2日も同じのを履いてるなんてちよつと想像したくないなあ……。……」

「んなら 想像しなきゃいいダロ……。……（オレ、直接言っただけど）」

「でもよー。神谷も見ただろ？ 知らんって言っただけど、学校じゃ一番可愛いつて評判の女の子だぞ？ そんな子が……。……って思っても」

「気持ち判るよ。……真中。大草の様に単語に気を付けて話せよ？ これなら変質者扱いされない、って思うから」

大草は、必要最低限の単語を使用して、意図を伝えようとしている。パンツパンツって大声で言ってる真中とは大違いだよ。……

「うっせーな！ オレは今メチャ熱くなってるんだよ！ やったぞー！ とうとう見つけたんだ！ それに、パンツの件はオレは許すね！ 2日なんて大甘だ！ オレなんて最

高5日間履きっぱなし！」

「だから力説すんな！ 聴きたくもないわ！ んな情報！」

「そーだ！ それに西野とお前を一緒にすんなよ!!」

真中のコレは熱が冷めるまで無理だつて判つた所で、はてさて、どのタイミングで話せば良い事やらつて考えてた時だったよ。うるさいのが復活したのは。

「おいコラっ!! そのさんにんツ!! フラれたオレに慰めの言葉も無しかよ！ ええッ?! 真中や神谷が屋上で見た女の謎が解けりやそれでいーのかよ!!」

今の今まで死んでた小宮山が復活したのだ。

オレは、途中で合流したから魂の抜けた様な顔した小宮山を見てるんだけど——、まあ つまり『返事がないただのしかばねのようだ』となりそうだったから、放置してたよ、うん。多分 大草と真中は完全に忘れてたっぼいけど。

だつて、あからさまに顔に出てるし。こう言うのを表情に出るつて言うんだと思う。じゃあ、西野から見るとオレつてこんな感じだったつて事なのかな……? だったらちよつと複雑だよ。でも今は小宮山だ。

「そんなもん仕様がないだろ。……大体、廊下であんな大声であんなやり取りされりや、誰だつて嫌がる。女子なら尚更だ」

「そ、そうだが……。つて待て、それつてつまり……」

あ、小宮山が真中の方に行つた。何か不穏なオーラを纏つてる気がする。

「てめえのせいかなぁあつあぁ!!! 真中あアあア!!!」

「んぎやあぁ!!!」

小宮山の渾身の右ストレートが炸裂したよ。真中は綺麗に放物線を描きながら飛んでいったよ。……おお すげえ 人つあんなにて飛ぶんだなあ。

「痛えええ!! なんすんだよ! だいたい、フラれた理由つててめえの顔のせいだろくく!! 怖い顔駄目、つて言つてたじゃん!!」

「うるせええ!! 大体お前がつかさちやんのパンツがどうのこうの、つてあんな場所で言うからだろうが!!」

「だから 本人がそこじゃねえー! つて言つてたろーが!!」

真中はちやつかり無事だったみたいだ。

その後は 見てられない男同士の取っ組み合いと言うかじやれ合いと言うか。受験シーズンで色々肌寒いと言うのに、見てて暑苦しいし。今はオレの頭の中は、こいつらと同じ様に（なんか嫌だけど）西野がいるから。それに加えて更に熱くなつてしまつてるんだよ……。

さつき会つた事、そして 合つた出来事を含めて話したら、オレも小宮山右ストレート喰らうかもしれんから気を付けよ。

「真中あア!! おまえも告れ!」

「はあ!?!」

「おまえもつかさちやんに告白してみろつつつたんだよお!! おまえも告つてオレみたいに、フラれてみる!! 同じ痛みを味わええい!!」

「んぎやああ!!」

おつ、今度は左アッパー。

真中死ぬんじゃないか? ……ああ、大丈夫みたいだ。

小宮山の気持ちは判らんでもない事もない。つまりはただの八つ当たりじゃん。つて思うよオレは。だから正直それは反対だったよ。……………色んな意味で、賛同出来ないんだ。

「そうだよ。告つてみればいいじゃん」

オレが何か言う前に大草が先に言つてたよ。

「よくわかんねーけど、西野のパンツを撮りたいんだろ? はつきり言つて彼氏にでもならねーとそんなカツコ、撮らせてくれねーぜ?」

「そもそも、幾ら彼氏だつっても そんなトコ撮らせる方もおかしい、つて思うのは気のせいかな? 大草」

「惚れた相手なら、何されても許すつてよく言うじゃん。そりや暴力とか超えちやなん

ない一線はある、って思うけど『可愛い所をビデオに撮って収めておきたいんだ……』って、甘い言葉で誘えばどうにかなるってオレは思うよ。オレは成功する場面しか想像が出来ないな」

そんなん許すのって、大草の周囲の女子だけだと思ふ。

例え大草だったとしても、相手が西野だったら『そんなえつちなな駄目だろ！ ぜつたい!!』って言いそうさ。いや、間違ひなく言う。しつこかったら 小宮山顔負けの攻撃放つてきそうだし。

……うん。ここに西野がいなくて良かったよ。持ち前の読心術使われたら、オレが被害を受けるから。……絶対。

「う、ううん、確かにそうだよな……」

「馬鹿言つてんじやねえって、大草！ 何本気にしてんだよ。オレは真中がフラれる所を見るだけで十分なんだ！ それに、つかさちゃんは今までどんな野郎が告つても、一度も『うん』って言わねえ強者中の強者なんだぞっ」

真中が悩んでるのを見たからなのか、大草の助言があったからなのか、今度は止めに入ろうとする小宮山。一体どつちなんだ？ お前つて言いたいけど……。今は頭の整理が先だ。

「でもさ、西野って誰かと付き合ってるって噂ないしさ、やってみなきゃわかんねーじゃ

ん」

「そりやそうだけどよお……」

「当たって砕けてみるって言うのも有りかもしれないなあ……」

何だか方向性が決まりかけてきたって思ってしまった。だから、オレは。

「それは駄目だ」

真中が意気込む前に止めたよ。自然と口に出たよ。多分いきなりだったからと言う事と全員が色々乗り気気味だった所に反対の意見だったから 反応したんだと思う。

「何でだよ。折角やる気が出てきたのに！ それに上手く行けば学年No.1アイドルのカレシだぞ！ 野望が叶うに続いて、そんなでさえ特典がついてくるんだ。男ならやらなきゃ損だ」

「……理由、か。理由。うん、そうだな。……たぶん、真中が後悔するって判ってるからって所だ」

「どういう事だよ！ オレはフラれたりしねえよ！」

「おつ、真中がいつになく強気だ！」

「へーん、ゼーったいフラれるもんねー！」

何だか、盛り上がってるけど　もう、このタイミングじゃないといけない、ってオレの中で言ってるよ。西野じゃない、ってちゃんと言わないとって。

「悪い。話すタイミングがつかめなくてアレだったんだが……、屋上での件だけどアレ西野じゃないよ真中」

「「はあ。」」

何だか爆弾発言？　でもしたのかな。　って思うくらい3人の空気が固まった気がする。

別に大した事じゃないって思ってるんだけどなあ。

「そんな訳ないだろー！　色々符号が一致してってるじゃん。状況証拠は揃ってるし、あれ程の美人だし、答えは1つ！　だろ!？」

「何かの映画のセリフかそれ？　それは兎も角、オレの話聞いてって」

一先ず、オレは3人に説明したよ。

あの屋上で女の子……東城の事をオレが助けた事。幾ら短い時間で慌てたから、ってあそこまで間近で見ただから、間違える訳ないって。

「確かに——神谷にそう言われたら説得力あるな。ある意味真中より一番近くで、その

美少女の事見てるんだし。……真中が見た部分以外は。ってかもっと早くに言ってくれば良かったじゃん」

「だから言つただろ？ タイミングがアレだったんだって。後はこいつらが暴走し過ぎなんだよ」

そもそもパンツパンツ、って連呼してる連中の中に加わりたくない、って大草に目で伝えたら、伝わったよ。うん。気持ちは判ってくれてるみたいだ。

「オレは、この変態野郎よりは神谷の事は信じられる！ 信頼もできるぜ！」

「小宮山にだけは言われたくねえよ!!」

「……なんかすごいな。信じてくれて、信頼されてるってまで言われてるのに、全く嬉しくないって事があるんだな、この世に」

「どういう意味だ!!」

小宮山も色々と暴走してるから仕方ないし。

「それじゃ、誰なんだよ……。あー最初に戻っちゃまったじゃん……。もっと早くに言ってくれりゃ、こんな消沈する事無かったのに……」

「だーかーらー、タイミングつっのがあるって言つただろ！ そもそも、お前らがもつと落ち着きがあれば早かったつっの！ 逃した理由はお前らに原因ありだ！ それにまだ続きあるから訊けて！」

とにかく、オレは続きを説明したよ。

あの少女は東城だったって事。

ちゃんと本人にも確認したし、証拠だって簡単に用意できるんだけど……。

「流石にそれは無いって思うぞ、神谷」

「オレもだ。ソレは絶対気のせいだって」

大草と小宮山が盛大にダメ出ししてくれたよ。

……最後まで聞けつての。

「東城の前髪を下ろしてメガネをのけたら直ぐ判る」

「いきなり東城に、『髪型変えてメガネも取つて!』ってお願いするのか? それこそ彼氏彼女にならんと厳しいだろ?」

「……いやいや、確かに厳しいとは思うんだ。それに関してはオレもな? でも、真中が欲しがってる映像の恰好をもらうより、断然難易度低いと思うんだけど。いつたい

何を基準に難易度考えてんだよ、お前は」

「ううん……。真中を信じるか、神谷を信じるか……」

「オレは現時点では難しいかもなあ。神谷は信頼できるヤツって判ってるんだけど、……流石に相手が相手だから。いきなり信じろって言われてもな。……西野なら大体一致してるし、信じやすいんだけど。前は髪長かったし」

小宮山と大草はちよつとばかり悩んでるみたいだった。

「うーん……。とりあえず、神谷の事を無視出来ないし、西野の事も気になるし、……オレ2人に確認してみるよ」

「そうしろ。2人があの時の子って訳無いんだから、もしどつちかに真中が告白したとして、……それに伝えてくれた場合さ。違ってたらどうするんだ？ 『人違いだったから、さっきの無しにして』って言うのか？ ……流石にそれはオレはどうかと思うぞ」

「あつ、それに関しては神谷に賛成だ。告白しといて、別人だったからゴメン、って最低な男だぞ、それ」

芸能人とかでその手の話題は沢山あるっぽい。身近にその業界人がいるし、色々と話は聴いたりする。

『不倫とか浮気って最低だよね!』

『蓮はぜーったいしないですよ! あんな事する蓮なんて、見たくないんだから!』

とか何とか。

つまりは勝手に話してくるから嫌でも頭に入ってるんだ。しかも ちよつと端折ったり、隠したりしないで、モロに名前を言ったりするから現実味があつて、その世界の闇がスゲエ見えてきたから 初めて聞いた時マジで幻滅したし。

因みに、暴露してるのは姉だけど、姉は姉で色々問題があるけど 嘘を言ったりはしないからその点においては 嫌な事に信用できるんだよなあ。

「た、確かに…… そこまで考えてなかったよ。皆サンキューな! んー でもやつぱり 映像を取るとなったら、彼氏彼女にならないと……だから、そっち方面も頑張ってみる! あの時の子に告白して、それで成功させてみせる!!」

「……………ああ、頑張れよ」

真中は、あの時のいちごパンツの美少女《東城》に告白をするつもりの様だ。間違いなく東城だったから100%。

それはそれで良いって思う。

でも、何でだろう……。オレこの時なんだか凄く安心したんだ。

ずっと強張ってたって思う表情も、柔らかくなってるって実感してるんだ。

「うー……。つかさちゃんに真中が告って フラれるシーンこそを一眼レフカメラで撮ってやろうって思ってたのに！ ちよつとオレとしては残念過ぎるぞ」

「小宮山あく……。おまえ性格悪過ぎだぞ！ それじゃどの女子からも嫌われるって！ 神谷も言ってやれよ。フラれたの必然だーって」

そうだったな。ほつといたら 真中は西野に告白するつもりだったんだよな。

「西野に告白するのはダメだ」

……。つ。考える前に、口に出てた。

「……。ん？ なんだ？ いやにこだわるんだな。神谷。西野に告る事」

「……。だつて、ダメだろ？」

「いや、別に告る告らないは 本人次第だから。オレらの学校にそんな決まりなんて無いって。暗黙のルールってのも無いって。西野は小宮山が言う通り鉄壁の要塞だし。

……。んー」

大草は、何か考えてる様子だ。

でも、ちょっとオレの方も調子がおかしいよやっぱり。いつもなら、こんな風に言わない筈なんだけど、つい言ってしまったんだ。

「(神谷……西野の事好きになった？ んー でも2人って確か接点無かった筈だし、それは本人も認めてるし……。一目ぼれ？ いやー、神谷に限ってそれは無さそうだしなあ。前に別の学校だけど、そこで一番の子と一緒に誘った時も一蹴されたし。……性格には難ありだったけど、容姿だけだったら西野に匹敵する子だったし)」

「なんだ？ 人の顔じろじろ見て」

「ん？ いや別に何でもないよ」

「……なら、さっさと帰るぞ。あの角曲がってから全然先に進めてないし」

「それ絶対真中と小宮山のせいだから」

小宮山と真中のじゃれ合いのおかげで全く進めてないって言うのは正解も正解、大正解だよ。

とりあえず、オレ達は帰宅再開。数分後皆と別れた。

うん。今日は色々とおつた。たった数十分の間だったけど、メチャクチャ濃い時間だったよ。

「……とりあえず、帰って頭冷やすかな」

頭がまだまだ熱い。今夕方だったから、皆に表情が見えにくいんだと思うけど、間違
いなく顔は赤いつて思う。

その後、家に帰って 当然の如く 誰かさんに色々とお表情の事で追及されたり、風呂
場にまで突入しそうになったりとしてたらしいんだけど（後の母情報）。

いつもより強力な完全なる無視パーフェクトスルーになってたらしく、姉は色々とお断念して 散々喚いた
そうだった。

全然気づかなかつたけど、それはそれでよかつたかな。

13話

学校が始まって、まだ午前の休み時間。

オレは短い休み時間だけど屋上へ行ったよ。

だって屋上が学校の中でやっぱ一番良い場所だから。

今までも考えすぎてて、頭の中が大変だった事は何度かあったけれど、ここだったら忘れられるんだ。

でもまあ、今までは、の話なんだけどな……。

これまでは一面倒事に巻き込まれたり（大体がいつもの面子絡み）とあって、その度にここに逃げ込んできてた様な気がする。

もうここは憩いの場と言うよりは、駆け込み寺だな。うん。

だから、今日も色々考える事が多すぎるからここに来てみたんだけど、どうしても考えてしまうんだよ……。

「……やっぱり、無理かな。簡単に吹っ切れる程、オレは単純じゃないって事か。……そ

れもなんか複雑だけど」

何度も何度も頭の中でループ再生されるのは、西野のセリフ。歌に関してを言ってるんだ、って何度も言い聞かせても……、やっぱり難しい。

『蓮に惚れちゃった』

ずっと、残ってるんだ頭の中に。一晚寝ればと思ったんだけど どうにも駄目だったんだ。

「こういうのって、時間が解決してくれるんだろうけど……」

色んな意味で長い間格闘するハメになってしまいそうだって改めて思う。

それに 西野と顔を合わすのが……正直難しくなってしまうてる自分がいるから。

歌の件、約束したんだけど現時点では無理難題です。はい。

それに学校内だから、クラスは違っても合ったりはするんだ。午前中だったのに2度も……。以前までは見た事無かった筈なんだけど……、遭遇率が上がってるとしか思えないし。

でも、あからさまに無視とかはしないよ？ 流星に、それはどうかと思う……: : : だけど、そうも言ってられないんだよなあ。

何せ、視界の端に西野の気配を感じたら、それとなく方向転換してる自分がいるから。

殆ど条件反射になってしまつてゐるみたいで、この分じや『逃げたら名前で呼ぶから』つて言つてた西野のレッドラインに当たつてしまつてゐる可能性が高いかも知れないし。

「……ただでさえ、こんななのに 今 西野に名で呼ばれると……。うーん……。ちよつとどーなるか判らん。……破裂するんじゃないか？ オレ……」

色々悩みがあるけど、この手の悩みを打ち明けれる相手がないのが少々痛い。

家族は大々NGだし、まあ 大草には割と話せそうな気がするんだけど、……なんかまた強引な誘いをしてきそうだから、とりあえず現状その案も却下の方向。それに小宮山は論外だ。真中に関しては、考える前に反射的にくとはいえ 自分が止める、と言つた手前 どの面さげてこんな相談すりやいいのか、自分でも判らん。

つまり、自己解決しか方法はないのが辛い所です。はい。

「……気晴らしでもするかな。今じゃ焼石に水つて感じだけど、ちよつとだけ——」

オレは、ゆつくりと 静かに、誰にも聞かれない様にハミングを奏でた。

声に出さないのは 何やらこの屋上で歌が聴こえるくなんて、妙な噂が女子の間では持ち切りらしいからつて理由もある。

自粛をくと考えてただけで、やっぱりここ以上に安らぐ場所が他にはないんだ。だから、せめて数日くらいは、つて思いながらハミング。そして 目を瞑つて一眠りしようとしたそんな時だったよ。

うん、最近はずつとこんな感じだったよそう言えば。

「あつ！ やっぱりここだった！」

そう、誰かがいつの間にか傍にまで来ているんだ。考え込んでる時、色々意識をカットしてしまうのかな？ オレつて。

「西野……」

「おつす！ 蓮」

敬礼ポーズをする西野。

いや、うん。とつても可愛いよ。ちよつと前までは普通に言葉にしてただけで、今は何だか喉がつかえてるみたいだよ。出てこないんだな、これが。心臓がスゲエ鳴つてるし。……大丈夫かな？ オレ。

「……どうしたんだ？」

「えへへ。なかなか蓮と話す機会が無かったからねー。言ったでしょ？ あたしは蓮と話すのが楽しいって！ 蓮も言ったもんね？ 『そう言う言われ方して嫌とは言えない』って！ 蓮は言いそうだけどー、こんなタイミングで言っちゃう程 S って訳じゃないでしょー？」

とりあえず、何とか自然に話せて良かった。

西野は、『あたしの事いじめないでよ？』って にこにこ笑いながら言ってる様に見える。凄くアンバランスな気がするんだけど、やっぱり今の西野の笑顔はオレにとつては刺激が強いよ、ほんと……。

でも、無視する事は出来ないな。オレは。

それに、西野には思った事をそのまま伝えた方が良いんだ、って思えた。

そう思えたら言える。少しずつでも言ってみようって思う。恥ずかしいセリフな気がするけどな。

「ああ、そうだな。……何だか不思議だよ。西野と知り合ってまだほんのちよつとなのに、……ずっと前から一緒だった様な、そんな自然さがあるんだ」

「っ！ い、いきなり何言いだすんだよー。びっくりするじゃん！」

「だってそんな感じがしないか？　また、こうやってオレの傍に西野がいるんだ。……最初に会った時も、ここだったし、こうやって寝っ転がってた時だ。今もだろ？」

ああ、因みに刺激が強いと言う意味では今の現状だ。

西野がオレの顔を覗き込む様にしてる。

オレは寝てるから距離を取る事は出来ない。西野が離れない限り普通に無理。

そして　西野との距離は非常に近く、離れる気配は0だし。会ってない時もめちゃくちゃ葛藤してたのに……。

あ、頭の中で一周まわったから出来るのかも知れないな。つまり　もう感覚が麻痺ったって事かな。

「知り合って直ぐって感じは全くしないんだよなあ、これが」

「……ふふっ、そーだね」

西野はオレの顔を覗き込むのを止めたくと思ったら、更に刺激的な事になった。麻痺なんぞ吹き飛ばす勢いだ。

「よいっしょっつとー！」

「お、おい。制服汚れるぞ?？」

「だいじょーぶだよ。ここって結構綺麗じゃん。蓮が寝床にしてるからだねー」

西野も、オレの隣で寝転がってたんだ。

丁度隣り合わせになつてる……。

健全な男子には、色々ときついよほんと。だから、オレは上半身を起こしたんだ。流石に寝るのは……なあ？

それで 西野は不満だったみたいで、口をとがらせてたけど、直ぐに笑顔に戻つたよ。「さつ、リクエストするからねー？ 歌、よろしくっ！」

オレは色々と大変なのに、西野は凄い普通に接してる。

何でだろうな。それが、何処か複雑だったんだけど、それ以上に西野の事を見習おうって思ったよ。

あ、因みに 歌のリクエストに関しては 好都合だつて思う。歌をうたつてる時は 紛らわせる事が出来るかもしれないから。

「ここで聴くつて言うのも何だか良いよねー。蓮と初めて出会つたのもここ。それで初めて歌を聴いたのもここだしね？ やっぱり最初はここからだよー！」

「……最初はつて事は、まだまだ続くつて感じ？」

そこがちよつと気になった。いや 結構気になったかも。確かに、歌に関してOKと

言ったんだけど……、広がっていくのは好ましい所ではない。大勢の前でくとかになつたら流石にNG出すし。

でも、西野が考えてたのはまた別の事だった様だ。いや、ある意味一番強烈なのを考えてたよ……。

「もちだよ！ 何ならデュエットでもどーかな？ つてさー！」

そう来たか!! つてマジで思ったよ。でも、何か企んでそうな西野の表情も結構気になつてた、というか勘付けたよ。

「ま、西野は この後オレが何言うか判つてるよな？」

「あはははっ、もつちろん！ うーん、あたしとしては 一緒に歌うのも良いかな？ つて思ったりしてるんだけどー 蓮の邪魔になっちゃうかもだからね」

「邪魔？」

「だってー、蓮に比べたらあたしの歌なんて……。歌うのは好きだけどね。自信はぜんぜん」

これは何度も思ってる。

西野は一気に顔を真っ赤にさせた。面白いくらい真っ赤だ。

それにあたふたしてる。こう言うって結構冷静になれるもんなんだな。自分の事じゃないからさ。

だから、オレは西野のおでこを軽くぴんつ！ と弾いてやったよ。西野は小さく『あうっ』って言いながら仰け反ってた。

「この間のお返しってヤツだ」

「……へっ!？」

「改めて西野。……オレの歌に惚れてくれてありがとな？」

「……」まで言って漸く西野はオレの意図に気付いたみたいだよ。

顔を赤くさせつつも、ぶくつ と頬を膨らませてたから。

「も、もー! …… からかったんだなー! …… なにさ! …… あの時の意趣返しってことー?」

「意趣返しって……随分と物騒な例えだな。それって恨んだりとか、遺恨とかだったと思うぞ? そんなもんある訳ないじゃん。オレの事褒めてくれたのに」

「ぜー! …… たい似た様なもんだって思うしつ! …… あの時、蓮すー! …… つごく慌ててたもんっ!! …… 慌てさせた事、恨んでるんだろー! ……」

「……恨みはぜー! …… せん。西野の慌てた顔もまた見れたし、オレとしては上々だ。ま、慌ててたのはオレも否定はしないケドな。………ははっ」

「むー！　ずっるい！　あたしばっかになつてゐるじゃん！　あたしの方が多いじゃん！」

「大丈夫だ。……西野はオレを驚かす天才だろ。……オレは、いつも集中しとかないと、だからな。今みたいに——」

オレは一頻り笑うと　また寝つ転がつて目を瞑つた。

頭の中で思い浮かべる歌。メロディーも自分のハミングで奏でる。

西野も、きつと判つたんだつて思う。声が聴こえなくなつたから。訊いてくれてるんだつて思うから。

オレにとつての初めてのコンサートのお客様は西野ただ1人。

うん——、最高の場所で、最高の相手。最高の舞台だ。初めてにしては出来過ぎてるつて思う。

でも、アンコールは無しだからな？

14話

うん。そうだよ。ガンガン攻める！　それが　あたしなんだ。

どんな事だって　受け身でなんて性に合わないんだ。

それに　よく考えてみたらやっぱり昔からだったと思うしね。

そう幼稚園の時だって、小学校の時だって、中学の今だって　待ちなんて無かったよ。

どんな遊びだって全部全部攻めるのが一番楽しいし、面白い。　守りなんて二の次

！

ま、まあ　流石に中学にもなってきたら　それなりに気を使う様にはなつたよ？

だって、女の子だからさ。それにいつかは、こう言う時だつてくるだろうって、ずっと思ってた。

でもやっぱり、こう言う時だつて　ガンガン行くんだ。絶対に負けたりしないよう

に。……誰にも。勿論自分自身にもね。

ずっとそう思ってるのに…… ずっとずっとそう自分に言い聞かせてるのに なかなか思つた通りにいかないんだ。

そうなんだ……。だつて今日は、なかなか蓮に会えなかつたから。

いや、違う。それはやつぱり嘘だね。

だつて会えてるって思ってるもん。でも…… 会えていないのは最後の一步を躊躇してしまつてるんだつて自覚もしてるから。

これは蓮に出会つてからだつた。こんな気持ちになつたのは蓮の歌に惹かれて、それでお会つた時からだつたんだきつと。

普段なら、蓮以外の人なら 絶対自分から行けるって判る。廊下で騒いでた2人組にも躊躇なんかせず入つていけたし！

でも、蓮は違う。蓮だから見えない壁が邪魔してくれてる。蓮とあたしの間にあるその壁は、自分が作つちやつてる理性の壁。

でもでも 立ち止まり続けたくない！ とりやー！ とそんなのなんか蹴つ飛ばしてつき進みたい。このままは嫌だから。ちよつとでも臆しちやつたらずると続い

てしまうって思っちゃうから。

厄介極まりない壁だけど、隔たったままなのは絶対嫌。何度も何度も自分に言い聞かせて頑張ってきたんだから。昨日のお風呂の中でもずっと考えてたから。

だから あたしは今度こそ決めたんだ。行く場所はひとつ。きつと、そこにいて思ってたから。

思ってた通りだったよ。そこにいた。……蓮がいた。想いが通じたってちよつとだけ思っちゃったかもしれないかな。

やっぱり 蓮と話すのは楽しい。すごく楽しい。休み時間が本当にあつという間だよ。昼休みの時間が良かったって思ってる。正直短すぎるから……。

ちよつと授業サボっちゃおうかな。 つと提案しようと思つたくらいだったよ。んー、後でほんとに言ってみようかな？

それで、直ぐ後に 念願の蓮の歌を聴く事が出来たんだ。

「(これは——あの映画の主題歌の……)」

有名な邦画の主題歌だから直ぐに判った。上映してた時は ニュースでの何度も取り上げられて、その度に流れてるし、今でもコンビ二に流れてるから。

心地良くてゆっくりやわらかなテンポ。だからかな、心の奥にまで響いてくるんだ。

「(後は多分……蓮が歌ってるから、だよな……。いや 絶対そうだよな)」

あたしは 自然と目を閉じていた。

蓮がそうしてる様にあたしも目を閉じて耳を、いや身体全体を集中させた。耳だけじゃなくて、身体全体で受け止めたって思ったから。

「(あ……、目を閉じたら、ほんとに気持ちいいかも……。蓮の歌が心地よくなって、優しいから……)」

これじゃ子守歌になっちゃってるよー。でも 今寝ちゃうのは勿体なさすぎるから駄目！ 起きてろよ！ あたし!!

「……………」

それで、ほんとにあつという間だったよ。ゆっくりで、それでいてサビの部分では激しさもあつて、遊園地にでも行つてる様な気分になつちやつた。だから、終わつちやうのは寂しさがあつたんだ。

「はい終わり。ご清聴ありがとうございます」

「……………ん」

「? 西野?」

「あ、いや……………何だかふわふわしてると言うか、何と言うか……………」

「ん」

「……………ひやつ!」

びっくりしたよ。眼を瞑つてて判んなかったけど突然、おでこが暖かくなつたんだ。ビククリして目を開けてみると、蓮があたしのおでこに手を当ててた。

「熱がある……………つて訳じゃなさそうだな」

「わわつ! も、もーそんなんじゃないよ! ほら、ふわふわ浮いてる様な感覚つてあるじゃん。心地良過ぎてーつてヤツだよ。浮遊感、ていうのかな? だから蓮のせいなの!」

蓮が離すのがもうちよつと遅かったら、あたしの熱、勘付いちゃつたかもしれない。

触れられてるって判って 蓮が手を離れた途端に熱を帯びちゃったって判ったから。

「ああ、なるほどそう言う事か。……ありがとな」

「ふふつ あーほんつとまた聴けて良かったよー。これから毎日頼もうかな？ 蓮
！」

「CD買って聴いてください。若しくはレンタル。これ普通にビデオ2000においてる
から」

「もー!! その丁寧に断るのやめてよー! それに蓮が歌ってるから良いんじゃない!
CDじゃ感動も半減しちゃうよー!」

何だか歌手の皆さんに失礼な事言ってる気がするけど、いいや そんなの今は。

「ねえー アンコー「ルはダメ」えー! なんでだよー」

先読みされちゃってたよ。何だか笑顔で返してくるのちよつと腹立つな。……でも
あたしは蓮の笑顔は す……っ へと、笑顔が似合うから良いけどね!

「だって、もう時間がアレだろ? この歌は大体4〜5分だし、時間的に無理」

「うー…… よしっ! ねえちよつと授業をさり「いやダメだろ」もー! ちよつと言
い終わるまで待つてよ」

何だか今は蓮に心読まれてる気がするよ! あたしの事何度も言ってきた癖に。

「成る程。顔に出やすいつてこういう事を言うんだな。よく判ったよ西野。……ふふんっ 仕返しだ」

「むむっ！ 蓮に言われちゃうのは複雑だ……。気を付けないとー」

あたしは、思わず頬をぺちぺちと叩いてた。

そんな時、だったよ……。2人しかいない、って思ってたのに！ 誰かがやってきたんだ。

「……ほんとびっくりしたよ……」

「神谷って、歌メチャ上手いんだな……。オレ知らなかった」

それも——2人も増えちゃった。

これは、想定外も想定外。

完全に油断していた。此処には西野しかいないって思ってたし、風もそれなりにあったから他に聴かれる様な事は無いだろうって考えてたんだけど、……まさかの来訪者登場だよ。

それも 真中に東城の2人。

何で屋上^コにつて思ったから、その理由を訊こうとしたんだが、……真中と東城の方がメチャクチャ早かった。

「いや、すげーよ！ オレ、歌でこんなに感激したの初めてだ！ マジでマジ！ 東城の

小説と同じくらい!!」

「ちよつ、ま、真中くんっ!？」

「あ……わ、悪い……」

何か真中が口走って東城が思わず止めてたけど。しっかりと聞こえてるんだよな、これが。

「あの一、なんで2人はここに居るのかなー」

西野だけは何だか不機嫌気味だったよ。視線が結構鋭いし。……まあ 西野は可愛
いからどうしたって そっちの方向に考えてしまおうケド。

「あ、ご ごめんなさい。邪魔をするつもりは……」

「お、おう。ってあれ? 西野……さん?」

「そう言うキミは真中くんだったねー。ちゃんと考えない様にしてる? えっちな事は
ダメだぞ」

「し、してないって! 今のオレは猛烈に感動してるんだ。2つもデツカイのがあって
オレ今やばいんだって!」

やばいのはオレの方だったの……でも。

「んん……、はあー まあしょうがないか。こうなったら1人も3人もあんまり変わん
ないし……」

という事で受け入れたよ。

歌を3人つて数に聞いて貰ったのは、あの時以来だったな。

あまり——良い思い出じゃないから、忘れよ。

「ううー 蓮 機嫌悪くしちゃった?」

「いや、大丈夫だ。……つて、西野」

「あ、ご、ごめん!!」

ちやつかりいつも通りに名前前で呼んでくれた西野だったけど、まあ この面子ならつて思つた。

でも真中だから……ちよつと困りもんだ。

「神谷……、勝手に悪いつて思うけど、ちよつと良いか?」

「ん? なんだ?」

あ、多分西野の事を言われるんだな、と思つたよ。

だつて 西野に告白はダメつて言つていて 当の本人は西野と一緒にいるんだからなあ。色々と誤解される可能性だつて捨てきれないし。

真中は言いふらす様なヤツじゃないから、まだ助かった。これが小宮山だったら えらいこつちや、だ。

「なあ！ オレの夢、神谷にも聞いて貰いたいんだ！」

「……へ？」

「オレな！ 将来映画を作る人になりたいんだ！」

まさかの予想外のお言葉。

この流れでなんでそうなる！ って聞きたかったけど、とりあえず今は聞き手側に回ろう。というより、真中が返事を待たずに続けてきたし。

「映画作る人……。あー成る程、オレが真中監督ーって言ったのって結構的を射てたつて訳ね。変態役じゃなく」

「ちよつ!! それは今は どーだつて良いだろ！」

「……ふーん、変態役、ねえ。キミだったらありそーだけど。ね？ そう思わない？」

えつと東城さん」

「ふえ!! え、えと…… わ、私はちよつと判らないかなあ」

西野にまで言われような真中。ある意味可哀想だと思つたけど 廊下でのやり取りを考えたら仕方ないよ。

んで、西野と東城は互いに自己紹介をし合つた。

オレは、何故か真中に夢の話の色々と聞かされてた。

「なるほど。……はあ けっこう真中って酷いやツだな。女の子に『見ないで!!』って言われてたノート、勝手に見た挙句に翌日にはその本人の東城を屋上に連れ出して……。将来警察の人にお世話になるのはやめとけよ」

「うぐぐー! そ、それはオレも悪かったって思ってるけど……、って んなヤツにはならねえよ!! で、でも おかげでオレは東城の事訊けたんだ。本当に凄く面白い話で、今でも頭に浮かぶ。文字しか見てないのに、まるで映像が見えてたような感覚があった。自然とカメラワークまで考えてて……」

いつもの真中の空想癖……とは思えなかったよ。

そこまで真剣なんだ、って事が 情熱的なんだ、って事がよく判った。嫌でも伝わったからな。東城のノートの件も、まあ本人が許してるんなら大丈夫だろ。あれだけ見ないで、って言われたら見たくなっちゃう心情も判らないでもないし。

「うん。それでな。オレ……東城の物語に彩る歌声が、神谷のものにピタッ、ってくっついたんだ。色んな演出、キャストもそうだけど、それら全部を更に彩るのが歌。映画の

エンディングだけじゃなくて、途中でもあったりするじゃん。それがお前の歌だっと思っただんだ！」

「お、おお。そ、そうなのか……、なるほど……」

西野とはまた違った意味で強引な真中だよ。

でも、真中でも西野でも同じなのは……、ここまで言ってくれて悪い気なんて全然しないって所。それでいて、それ以上に恥ずかしいって事だ。

「それでよー！」

「あ、東城さんって 確かどの教科も学年トップクラスだったよね？ 今度さ！ あたしに数学教えてよ！ ちょっと一次関数の問題が辛くって——」

「え、えっと 私で良ければ……。でも 数学だったら——」

真中が延々と話し続けてるよ。言葉のキャッチボールが出来ない。まー 映画関係だったら大体こんな感じだったけど。恥ずかしいって思ったり、声に出したりする暇が無いくらいだし。

だけど、うん。皆仲良さそうなのは良い事だな、うんうん。

真中に至っては、ちよつと最低なタイミングでの西野との出会いだったし。東城に
関しては、いきなり友達を作れる様な感じじゃないって思ってるし。西野の性格なら、
外見だけで色々と反応を変える様な奴じゃないし。流石に、最低ラインっつーのはある
と思うけど。

あ、西野は東城とばかり話してるから、真中と仲良いかどうかは判らないかな。
でもなあ……。

キーン コーン カーン コーン♪

「……………」

学校休みとかの時にやらない？ そのやり取り。せめて昼休みとかにさ……。

15話

屋上で鐘の音を聴くのも乙なもんだな、と思ったり思わなかったり。

ただ、もうちよつと慌てても良いって思うんだけど、案外皆ケロツとしてたよ。いや東城だけは慌ててたかな。

それは兎も角、当たり前だつて言われるかもしれないけど、あの後、先生に怒られて大変だった。

まあ、西野のクラスでは運が良かったのか、先生が来るのが遅れたらしく、全くお咎めなしだった様なんだが、ちよつとオレの中で何か引つかかっていたりするケド。

今はもう放課後。色々あつて、直ぐに帰らず、ちよつとゆつくりしてた所に真中が

また出てきた。多分、また映画関係の話になってくるんだろうけど、先ずは言いたい。勿論午前中の事だ。

「はあー朝はたいへんだったな？ 注目されんのは正直嫌なんだがなあー 真中は慣れてると思うケドさ」

「つて 別にオレだつて慣れてる訳じゃねえつて……」

「そうか？ 小宮山や大草と授業中に、まあ色々とかミングアウトしてたらしいじゃん。メツチャ目立ってたらしいぞ？ お前ら。……オレ保健室行つてて良かったつて心底思つてるよ。そこに いたら100%巻き込まれてるパターンだろ」

「っ……」

因みに、前にも少し話してたけど、改めて説明すると それは小宮山が抜き打ちの持ち物検査で引っかかった時の事だ。

原因は グラドルの写真集を集めた写真を張った下敷きだった、らしい。

まあ その後は、先生に取り上げられて、それに抗議する真中がそれはそれは勇ましかつたらしいよ？ うん。……裸じゃない水着だーとか、それはオレ達の活力剤だとか、清涼飲料水だとか、色々と言つたらしいわ。

おまけに大草を巻き込む形になって、最終的にグラウンド50周を課せられた真中と

小宮山。

此処でもう一度。大切な事だからもう一度言っておこうか。

『オレ、そこにいなくて良かった!』

因みに東城も残ってた。今日一日ずっと暗いのは絶対今朝の事だろうな。怒られたから気分が悪い、とかではなく、東城はずっと気にしてる。

「あの、ごめんなさい……神谷くん」

「いやいや大丈夫だって。それに、大体は真中が悪いって事で片が付くし」

「何で大体がオレなんだよ! ってか、オレで片付けるなよ!」

因みにこれは最初じゃないから。2, 3回目くらいだよ。何度も良いって言ったんだけど、気にしてるみたいだったから、ここは真中に活躍してもらおうと思った。

勿論、オレは真中が全部悪いとは思ってないよ? だって、あの時屋上に先に行つてたのはオレだし、その後西野が来て、あの場で歌う事を決めたのも最終的にオレだし。歌をうたってたら、2人が来て……

ん？ つまり、オレが一番悪い……？ つて少なからず思ったケド。それは全力で否定したよ。オレの中で。

真中は兎も角、東城ははっきり言つて優等生だ。

授業態度等の内申点も申し分ないし、今までもこんな事無かつたと思う。それにずつと氣にしよう程優しい性格だったのはよく判つた。

そんな東城も遅刻したのは同じだから一緒に先生に説教されたんだけど、……される切つ掛けは東城も一枚噛んでるんだけど、何だかいたたまれないんだよ。

と言う訳で 真中に活躍ならぬ、全部かぶつてもらおうと言う事だ。性格悪いかもしれんが 今までも真中に付き合わされた事とかを考えたら、絶対釣りがくるつて思う。

「ふふふ……」

それに、こうやつて東城が笑顔に戻れたんなら良いだろう。辛そうな顔をさせるくらいなら何も問題なしだつて真中も思つてる様で ただただ笑つてたよ。

「まあ、真中の事はとりあえず置いといたとしても、正直……西野だけがお咎めなしつーのがちよつとばかり納得しかねるだよなあ……」

「あ、あははは。それは西野さんは運が良かったんだ、つて思うよ。2組の先生。授業準備で遅れたつて言つてみたいだし」

「それは、オレも聞いたが…… 一番最初にアイツがサボろう！ とか言いかけてたんだしなあ……」

うん。西野は間違いなくあの時『サボっちゃおう！』とか言いかけた。オレが途中で割って入ったから最後まで言えてないけど、今回の主犯だつて言つても良いくらいだ。

でもまあ、仮に教師側にオレがいたとして、西野が申し訳なさそうに謝つたりでもすれば……。うん。無条件で許しそうな気がするけど、それは それ、これは これ、という事で。

「(……西野さんは、きつと神谷くんともつともつと一緒にいたかつたんだつて思うよ)」

「ん？ 何か言つた？」

「んーん。何でもないよ」

何言つたのか判らないけど、さつきまでの顔よりは良いだろう。笑顔が良い。

なんか、西野と出会つてオレ色々と変わつてきてる気がする。

真中とか小宮山、大草はまだ男同士だし 話す事は多いかもだが、基本的に女子と話す事は殆どないつて言つていいし、……こんな風に考える事も無かつたんだけどな。笑顔が良い、とか。考えるだけで恥ずかしくなりそうだし。

「おーい、2人とも。そろそろ帰らないか？ 東城！ 後小説の続きもよろしくな！」

「あ、うん。でも 真中くんちよつと、その……」

「声デカいって。まだ帰ってない人だっているかもしれないのに。小説の事あんま知られたくないんだろ？ 東城は。……ああ、オレの事も心配になってきたよ。ヤバイ奴にバレたな……」

「わ、悪かったって!!」

真中は声がかいし、色々な意味で一直線だから。

歌の件も、妄りに言わない様にと約束させたけど、この分じやいつバレる事やら。

「……あのー、キミたちはまだ帰らないのかなあ〜？」

そんなもって、こんな感じでいつの間にか現れるのは西野だ。もう定着するんじゃないか？ って思う。真中の映画で言えば西野の登場のシーンが。

「あつ、西野さん」

「やつほー、東城さん！」

「もう良い時間だし、オレらも帰るか？」

「……そうだな」

と言う訳でオレ達は帰り支度。

ん？ 何だか西野とも一緒に帰る様になつたらしい。流れに身を任せたと言うか何と言うか。4人いるから別に問題ないと思うんだが……。

「流石に放課後は賑やかじゃないみたいだなー」

「もー！ だから、勝手についてくるんだってば！ しみじみと言うなよっ！」

西野に取り巻いてる人数はねずみ講？ って言いたいくらい倍々に増えてるのを見たから、しみじみそう言っても良いって思う。……うん。それだけだと思う。きつと。

「ふふつ（きつと、神谷くんは ヤキモチ妬いてるんだね……？）」

「ん？ どうしたんだ？ 東城」

「いいや。何でもないよ、真中くん」

うん。神谷くんと西野さんの2人を見てて、私は思った。

次に書くとしたら、小説の登場人物は2人をモデルにしたいって。真中くんにも凄く褒めてもらえたし、少しだけ自信をもって書けると思う。

男の子の方は、なかなか女の子のアピールに気付いてくれない。女の子は必死に気を引こうとしてるんだけど……、やっぱり気付いてくれない。そうなっちゃったら、ちよつとありふれた恋愛物語になっちゃうから、そこにファンタジーの要素も少しずつ入れて。

ん。男の子の歌には、神秘の力が宿ってて……、諸外国のトップがそれを狙ってる。でも、男の子は、女の子の前でしか歌ったりしないんだ。

その歌の力が本当に覚醒するのは、本当の力が宿る為には、心から想ってる相手がい

ないといけないんだよ。そう、男の子にとって唯一無二の女の子じゃないとダメなんだ。

その想いが愛だと知るのは ずっと先の事で――。

「つて、東城!?! 前、前!」

「きゃんっ!」

あ、あたたた……、考えすぎてて電柱に当たっちゃった……。メガネかけてないって訳でもないのに。

「大丈夫か? 結構な音鳴ったぞ」

「わっ、東城さん! 女の子なんだから 顔に傷でもついちゃ大変だよ」

西野さんが、私にハンカチを貸してくれた。

うん。西野さんはすごく優しい。

容姿だけじゃない。男子にも女子にも圧倒的な人気がある理由が本当によく判るよ。

「あ、ありがとー。 あ、ちゃんと洗って返すから」

「んーん。 だいじょーぶだつて。 ぜんぜん汚れてないし」

こんな地味な私にも分け隔てなく話してくれる事が、嬉しかったんだ。

「んー……」

「ん? どうしたの西野さん。 あたしの顔になにか……」

何だか西野さんが私の顔をじつと見てる。……お、女の子でも何だか照れちゃうよ？

西野さんみたいな綺麗な人に見られちゃったら。

「やっぱり東城さんって すつごくキレイな顔してるね？ 何だかその髪型とメガネで

絶対損してるって思うよ？」

「え……っ」

「ねえ 皆もそう思わない？」

西野さん、真中くんや神谷くんの方を向いたけど、私凄く恥ずかしかったりするよ。

……だって き、綺麗って 西野さんが言ってくれたから……。

「え？ あ、まあ……うん。か、かもな？（これは、神谷の言ってる事を確認する絶好の

チャンス？）」

「……かもな」

あ、神谷くんは流してくれた。

よく考えたら神谷くんは知ってるんだよね。丁度 屋上で会った時……そうだった

から。

「でしょ？ 蓮も真中くんもそう思うでしょ？ ……うーん、あたし 東城さんがメガ

ネ取ったところ、見たいな！ ねえ 見せて！ 見せてよ東城さんっ！」

「きや、きやあつっ」

わわわっ！ に、西野さんってこんなに強引な人だったのっ？

「おいおい……嫌がつてるなら無理強いするもんじゃないだろ？」

「だって、あたし色々訊い……っ　じゃなくて　東城さんって凄くキレイだって思うから　見てみたいもんっ」

西野さん……　色々って　何だろう。で、でも　今は。

「だ、だめっ！　あたし本当にメガネとつても変わんないし、だ、だから……」

何とか諦めて貰おうと思ったけど、中々止まってくれないよお……。

「そんなことないって！　絶対にかわいいってば。ね？　ちよつとだけ、ちよつとだけっ」

「ちよつとは落ち着けて西野」

「あうっ！」

あ、神谷くんが止めてくれた（軽いゲンコツで）

「さつきも言ったけど、無理強いはやっぱ良くないって。ってか、オレン時もそうだが、知り合つて間もないのに　結構アグレッシブだよな、西野って。……色んな意味で」

「むー！　授業の内容が飛んじやつたら蓮のせいだから！　って、色んな意味ってどー言う事だよっ！　引っかかるぞー！」

神谷くんには、本当に何度お礼を言ったり　謝ったりしても足りないよ……。

でも、西野さんや神谷くんは気付いてないのかな？ 神谷くんの事名前前で呼んでる事。確か前は、神谷くんがそれとなく止めてた様な気がしたんだけど……。

「ねえ、真中くんも思うでしょ？ 東城さんの顔見てみたいよね？ 絶対かわいいよね？」

「あ……う、うん。オレもメガネ取ったらイメージは変わるとは思うけど……」

「（ああ、真中にオレ 言っちゃってるからか。んで、東城の反応を見て そこまで強く賛成できない、と）……難儀だな。お互いに」

な、なんだか 西野さん真中くんに協力してもらおうとしてるのかな??

お願いします神谷くんっ！ なんとかかしてくださいっ！

16話

東城に大して結構強引な西野だったけど、結果としたら その暴走を止めたのはオレでも真中でもなく……。

『コリアー！ お前ら！！ 下校の時間はとっくに過ぎてるぞー！』

寒い真冬だつていうのに ランニングシャツを常に着続けてる男。

そうまるで寒さを知らず、季節感と言うものが無く、いつも元気に外を走り回ってる子供の様な男。……まあ 散々言ってるけどこれでも先生。生活指導の白鳥先生だったよ。

ここで見られたのが 良かったのか悪かったのか、目を付けられたら 教育と言う名のスパルタランニングを強要されてしまうかもしれないし、それが無かっただけで儲けものだ。

それに まあ 東城が西野から解放されたから、良しとしようか。とりあえず。

「はあ……あの姿を見たら 暑苦しいのか、見てるだけで寒いのか正直判らんない つもながら」

「だね。この寒い真冬でも一貫してるあの姿。長袖一着も持つてないって噂も、頷けるなあ」

「おまけに妥協を許さない性格と来てる。ちよつとルール違反、と言うか帰るの遅かっただけでこれだ。店ん中とか買い食いとか気を付けないとな……」

只今下校中。

真中と東城とは別れて、丁度西野と2人で下校…… いやしかし、何でこうなったのかな。一緒に下校と言うのは真中や東城がいた4人だったからまだ良かったんだけど、流石に2人きりは……ちよつと。

「……西野」

「ん？ なーに？」

気を紛らわせようと、話しかけたんは良いんだが、何だか西野は妙に笑顔だった。直視するのが、非常に難しいくらいに。

「ああ、何で東城にあんなに強引に行つたんだ？」

「……なに蓮。今日は何だか東城さんの事ばつかだね。何かあるの？」

あ、何だか むすつ とさせて 頬まで膨らませた。

……東城に嫉妬？ いやいや 何でオレなんか。あ、歌かな？

西野は歌に惚れたって言ってたし、独り占めしたいって言う独占欲もあつたりするか、多分。

「いやいやいや、流石に仕様がないだろ？ それにヘルプ視線も貰ってたし、真中は頼りにならなかつたし。幾ら強引だつて言つたつて あそこまで拒否してたら 言いたくもなる」

「……そーだね。蓮つて何気に優しいし」

「何気つっーのは余計な気がするケド」

「だつてさ。蓮は女子とあんまり話した事無い、だつたんでしょ？ なのにやっぱ東城さんとはけつこー話してるみたいだし、やさしーからじゃん」

「その言葉、東城より まんま西野に当てはまると思うんだが……。寧ろ量で言えば東城より圧倒的に西野だぞ？」

それは自分でも納得出来る話だ。

東城と西野。

東城に関しては 同じクラスだとは言え、まともに話したのはつい最近。

西野に関しても同じであつて、クラスは違うが それでも話し始めたのは同じく最近の事だ。

タイミングは一緒で、どっちと話したのか？　と言われれば西野って言う。

こんな質問と答えに何の価値がある？　って正直思うが……小宮山辺りに訊かれたとしたら、うん。考えたくないな。

「つ……　じゃあ、あたしにも　もつと優しくしてよっ！」

「なんじゃそりや……」

優しくしろ、って言う要求にどう答えたら良いか判らん。

「……あたしはね。色々と訊いてたの。東城さんに対する周りの声って言うか、何と言
うか……」

「ん？」

西野の要求について考えてたら、話しが変わったよ。

東城に対する周りの声って、東城ってあまり目立たないから　そんなに声なんて上が
らないんじゃないか？　って言うのがオレの意見だった。

「ダサイ、とか　ブスな黒縁メガネ、とか……　他にも色々聞いた。綺麗事かもだけど
人間って中身だつて絶対思う。外見だけ男なんてあたし絶対嫌だし」

「……………」

この時漸くオレは理解したよ。

東城に対する悪口。オレは聞いた事無いけど、西野は聞いたらしい。たまたまだった

のか、日常的に陰口叩く様なヤツがいるのかは判らないが、仲良くなったって言っている相手の悪口を言う話だったら、嫌だろう。

つまり……、あの強引な行動の真意は 東城の事を想つての事だったらしい。本人の意向を訊かないのは正直どうかと思うが、それでもその行動の理由を聞いたら思う。

「やっぱ、そうだよな」

「ん？ 何が??」

「優しいって言葉。……オレなんかより」

オレ、自然と手が伸びたよ。

話だけでも緊張するし、顔を見ても赤くなりそうなのに、自然と西野に手が伸びてた。

「西野の方がよっぽど優しい」

伸びた手は、西野の頭に置かれてた。

ゆっくり頭を撫でる。うん、心地よい感触……。うんうん、自分でやつといてなんだが、異常に身体が熱くなってきた。

「はー……………」

西野は暫く何をされてるのか判ってないのか、固まってたけど。直ぐに背伸びする様に頭を出して手を払った。

「も、もー！！ れ、れんっ!? あたしのこと子供扱いしてるだろっ!! あ、頭撫でられて喜ぶ歳じゃないってば!」

「ははは。悪い。ちよつと不躰だったな」

払われたんだけど、良かったかもしれん。オレの熱が伝わらなくて良かった。

放課後、夕日の下だから更に良かった。顔色なんて判らんから。

東城さんの髪とかメガネとか、改善してあげようって思った。

その理由は、東城さんの事を悪く言うのを止めさせようと思ったから。

東城さんの顔、近くて何度か見てみたけど やっぱ綺麗な顔してるから。少しでも弄っちゃえば、絶対綺麗になるって確信してるからね。髪の毛やメガネだけで印象が変わるのなんて、ざらだし。

もし、綺麗になった東城さんが 蓮と——って思ったら正直嫌な感じがしたんだけど、それ以上に折角仲良くなつた東城さんが悪く言われるのだけは嫌だったんだ。

強引だつて言われたケド、もうちよつとだったのに、白鳥先生が来たおかげで全部おじゃんになつちやつたよ。

あ、でも どさくさに紛れて蓮と2人で下校出来たのは良かったかな。色々な話題で盛り上げられるし 話しててやっぱ楽しいから。それに、頭を撫でてくれた事。子供扱ひされてるっ！ って言っちゃったし 恥ずかしかったから払いのけちゃったけど嬉しかった。蓮は不躰だつて言ってたけど、そんな事なかったよ？ 本当はさ。

ただ、やっぱり恥ずかしいから。蓮に撫でられるのは気持ちが良いんだけどね……。
「あつ、優しくしてつて言つたから行動に移したの？ な、なら良い心掛けだよ。うん」
「嫌がつといて今更だよ」

嫌がつては無いんだつてば！

「も、もう！ 良い心掛けだつて言つたでしょ!? 別に嫌がつてなんかないよ……」

うう、大きな声で言っちゃって何だか恥ずかしくなっちゃった。

「そうか。……ん？」

あ、蓮の携帯電話が鳴ったみたい。

この着メロは……確かあのアイドルの歌？ 蓮ってアイドルとか見るんだ。ちよつと意外だったかも。あ、歌が好きなのかな？ それだったら判るかも。洋楽、邦楽どっちも凄く上手だったし。

「……………」

あれ？ 何だか蓮の表情が険しくなっちゃった。あまり良い内容じゃないのかな？

「あー、西野。悪いな。用事が出来たみたいだ」

「ん？ そっか。じゃあここで、だね。もう家も近いし」

嘘じゃないよ？ ……ちよつと正直に言えば家に招待して、とかいろいろと考えてたんだけど……………」

「じゃあな」

「うん！ また明日ねー」

今日は楽しかった。

途中から、とは言っても蓮と一緒に下校出来たのも良かったし……、ね？

でも、この後だったんだ。

とつても、……とても衝撃的な光景を目にしたのは、ね。

蓮と別れて、暫く歩いてもうちよつとで家つて所で、蓮の姿を見掛けた。

あれ？ この辺りの家なのかな？ とか もうちよつと行つた所に商店街があるか

ら そこに行つてるのかな？ って思つたんだけど……それよりも問題だったのは、蓮一人じゃなかつたつて事だよ。

「……あ、あれ？ 誰だろう、となりの人」

凄く気になった。

だつて、蓮の腕を取つてるんだもん。腕を組んでるんだもん。

後ろ姿だったんだけど、間違ひなく蓮で、それにとり人の人は、女の子だった。帽子をかぶつて、髪は東城さんより少し長いくらい。黒い髪でとってもサラサラなのは遠目からでもよく判る。それに横顔も見えたけど……すつごく綺麗な人だった。

メガネもかけて、帽子も。一瞬だけ変装？ って思つたりしたけど そんな事する意味は解らないし、それよりも蓮の腕を組んでる所にだけ、あたしは釘づけになつてた

んだ。

「……だれ？ だれ、なの？ ねえ れん……」

自然とあたしはそう呟いてた。

蓮に直接聞きに行きそうだったんだけど、足 地面に縫い付けられたみたい動けな
かったよ。

その日の後、家に帰ってあたしは 何したか覚えてなかった。
ただ、蓮の隣の人、誰なの！ って言う事だけしか。

17話

「……………」

「おーい、つかさー」

「……………」

「つかさってばー！」

「……………」

誰、なんだろ。

あたし、昨日から ずっと、ずっと考えてる。

普通に、普通に考えたら判るよね。あんな風に並んで歩く関係って 普通……。だつて 街中に行けば沢山見かけるもん。みんな、みんな あんな感じで並んで歩いてるもん。

「つーかーさっ！」

「わ、わあっ!? な、なにになに?！」

突然横から大声出されちゃって凄くびっくりしたよ。

犯人はユリだね間違いない。だって席が隣同士だもん。

「も、もう。いきなりなにつ!? ビックリするじゃん!」

「何回も呼んでるのに無視するつかさが悪いーっ! もう　つかさの事、5回は呼んだんだよ?」

「……えっ? 5回? なんで?　嘘!」

「嘘じゃないもん。ねー皆?」

ユリが回りの友達の方を向いて聞いている。皆が頷いてた。

あ、あたし　考えすぎててユリのこと無視しちゃったの?

「つかさ何だかずっとおかしいよ?　何だかポーっとしてるし、さっきの授業中だって、当てられて、聴いてませんでしたーっって、つかさが言うの初めて聞いたし」

「うう……」

恥ずかしい所思い出されちゃった……。

うん。さっきの授業中も全然集中できなくて　授業の内容だって頭に入らなくて先生にあてられた時本当に頭の中が真っ白になっちゃって……。

「まっ　つかさは日頃の行いが良いからか、お咎めなしだったのは良かったよね?」

「う、うん……」

「さあ はくじょーしちゃいなさいよ。つかさ！ 最近 すつごくご機嫌だったのに、今日に限っては一気にテンションダウンしてるんだもん。気になるよ」

「えっ わ、わたしそんなだった？」

「バレバレだつて。あそこまであからさまだつたらさう？」

うう…… 何だか恥ずかしいよお。ユリとは長い付き合いだからかな……？

「ああ、因みにね？ 判つたの私だけじゃないよ？ みーんなにバレてるから」

「ええっつ！ つて もー 心読まないでよー！」

「あははは。最近つかさつてば判りやすすぎだよー」

やっぱり恥ずかしい……。今の私 絶対顔赤くなつてるよお。

「それで、好きな人でも出来たの？ つかさ」

「ええっつ！ な、なんで？」

「いやいや、判るから。女の子だつたらゼーったいピンと来てるから。昨日までの笑顔もそうだし、ちよくちよく休み時間教室抜け出したりして、バレバレだから。それで、ひよつとしてだけど——」

うっ……、ユリつてば 鋭い所があるから……バレちゃつてたのかなあ？ や、やっぱりちよつと恥ずかしいかな。幾らガンガン行く性格っ！ つて自分で判つてても、こゝうも指摘されちゃつたらやっぱり。

「4組の……」

「つ……つ……！」

4組。……うん。ユリ間違つてないよ。……やっぱり凄く鋭い。

「大草くんの事、でしょ?」 学校一のハンサムだし、サッカー部でエース。運動神経も抜群だし、美男美女。つかさとはお似合いだつて思うよ? でも、大草くんつてけっこー周りに女の子多いし……、何だか そんな場面にも遭遇しちゃったのかな? 本命がいるつて噂は訊かないから 諦めるのは早いよつ つかさ!」

……うん。早速だけど前言撤回だね。ユリ凄く間違つてる。でも間違つてくれて嬉しかったかも。

改めて思うよ。持つべきものは友達だつて思う。大草つて人の事 話しには聞いた事はあるけど、余り知らないんだよね。でも、嫉妬されるレベルの格好いい男子つて言うのは判る。そんな子と噂とかになっちゃつてたら 女子だつたらきつとーつて言うんだけど、ユリにはそんな気配はないし、あたしの事心配してくれてるし、励ましてくれる。うれしいよ。

あ、でも、ユリのタイプは弟君だからかな? 興味とかあまりないのつて。

「あはは……。全然違う違う。ユリ? だつて大草つて人とあたし話した事も無いし」

「あれ? そーなの?」

「うん。話しには聞いてるけど……知ってるでしょ？　そー言う噂とか、見かけとかだけで判断して、舞い上がってくなんてしないって事」

「そうだよねー。うんうん。そこなんだよねー。つかさつてさあ。と言う事は　何かあつたんだよねー？　絶対にさ」

「え、えつと……ユリ？」

あれ？　何だか、ユリの言い方と言うか　雰囲気と言うか、ちよつと変わってない？　「うーん。結構最近なんだよねー。つかさが変わったかな？　って思ったのは。でもクラスでは目立った事起きてないしー。こんなつかさ初めてだしー。大草くんじゃないって事は他の？　4組の子と言えば誰だっけ？」

「……」

判ってきたよ。ユリが何をしようとしてるのか。

「しれつと探りを入れないでくれるかなー！　誘導尋問とかしよーとしてるでしょ！」

「あははつ　バレたか」

ユリつてば！　そこまで行ったらあからさま過ぎるよっ！

「もうっつ！」

「ふふ。でも笑顔には戻ってるね？　つかさ」

「え……？」

「さつきまでの顔よりは良いよ？ ほら、もう授業始まるからね♪」

「も、もうっ！」

やっぱり……、持つべきものは大切な友達だよ。でも心配をかけちゃったのはほんと申し訳ないかな……。

「気が向いたらで良いから。相談ならいつだって乗るからね？ つかさ」

「あ……。うん、ありがとねユリ」

これは簡単に解消できる悩みじゃないけど本当に嬉しいよ。ありがと——ユリ。

本当にありがたかったんだ。とつても。

でもやっぱり心のもやもやは取れたりはないよ……。

「(だれなのかな……？) あの時間で、あの後直ぐに会えたって事はこの辺の人……だよ
ね？) でも、学校では見た事無いし、会つてたりもしてないって思うし……。あまり話
さないって言つてただけど、ウソだとはもう思えないし……。」

どうしても考えちゃうんだ。

蓮の隣で歩いていた女の人の事。腕を組んで歩いてた女のひとの事。

その時、蓮つてどんな顔してたんだろう……？

女の人の横顔は見えた。でも、蓮はずっと前を向いてたから見えなかった。とてもき

れいな人で、あんな風に密着されたら、男の子だったら嬉しくない筈ないって思えちゃうし……。

「(うう……。色恋事に無頓着な朴念仁って訳じやなさそうだよね……。だって、ほらあ、あの時 あたしが。……蓮について『惚れちやった』って言った時、顔凄く赤くなつてたし……)」

うう……ユリや皆にこれ以上心配かけたくないんだけど……やっぱり考えちゃうよ。蓮の事、だって だって、あたし——本気だから。蓮のこと……。

「(……うん！ うじうじするのは駄目！ あたしらしくない！ また蓮に……蓮に会いに行く！ 頑張るっ！) よしっ!!」

「お、気合入れたな西野。よし、その勢いでこの問題解いてみる。三平方定理を使った証明問題だ」

「……っっ!!」

また、あたしベタな事しちやったよ……。それも苦手な数学の時間に……。

あの後ユリにちよこちよこフォローして貰って、○はもらえなかったけど、部分点。△くらいは貰えた。

証明問題、特に苦手だから……重点的にしないと、だね？

蓮がどこの高校を狙ってるのか判らないんだけど、絶対同じトコ行きたいから。5教

科の中でダントツで数学がダメだから。……蓮の事をすっかり解決した後にも。

……うん、頑張らないと。

「なあ 神谷ー。どうしたんだ？ 今朝から生気が抜けた様な顔してんぞ？」

「はあ…… 大丈夫だって。ただ疲れただけだ……。昨日、いろいろあったから……」

「んだとおお!! 神谷テメエ！ つかさちゃんと一緒に帰って疲れた事があったのか、コラアア!! いったいナニしたんだ!!」

「喧しいし、違うわ!! デケエ声で変な風に言うな！」

確かに、真中が言う様に オレは凄く疲れてる。

生気が抜けた顔って結構あつてと思う。ほんとに色んな意味で昨日は疲れたから。

でも、誓って言うが小宮山の様な事じゃない。西野との下校は楽しかった。疲れる、何てことはない。……ちよつと気を使って、それで心労が　と言うのはあるかもしれないが、学校に影響がある様な事は今の所無い。

それに西野との下校の話をデカイ声で言われるのは正直頂けないんだ。色々とひそひそ話されるかもしれないから。あんな行列を作ってる西野なんだ。他の男子が黙っちゃいないだろうし。

「お前からほんと目立ってるぞ……。特に小宮山だけど」

「遠目から眺めてるなよ……。止めてくれ」

「無理だって、小宮山は西野に振られてから　色んな意味で暴走してるから」

「だれが暴走してるだあ!!」

「お前だ!!」

オレと大草のダブルなツツコミを喰らった小宮山は、またまた何処からか飛んできた金盞を喰らって仰け反ってた。

「あ、真中。東城との事はどうなんだ？　色々確認するゝって意気込んでたじゃん」

「う……」

大草が突然真中に話題を振ったら、明らかに挙動不審に陥ってた。

でも当然だって思う。

「まあ……確かに幾ら仲良くなったからって、真中の動機をそのまま東城に伝えるのは……なあ?」 神谷

「まあ男子なら判らんでもない、って思うケド、言葉に出した時点で完全な変態だし」
「オレもそー思うぞ」

小宮山がこそこぞとばかりに乗っかってきたけど。

「小宮山だけには言われたくねえよ!!」 でも、オレゆつくりと行くつもりなんだ。東城とは、話しが合うし 話してるだけで楽しい! だから今は……今は良いんだ。東城はいちごパンツ以上のもんがあるんだよ!」

ああ……、さつき言った事完全に理解してないみたいだったよ。

オレ、釘刺すつもりで言ったんだけどなあ……、『言葉に出した時点で』って言ったの、自覚を更にさせようとしたんだけど……。

「頼むからオレ達を巻き込まないで。教室でデカイ声でんな単語はヤメテ」

「変態過ぎだああ! ヤツパお前が一番だ!!」

「つつ!?」 ち、ちがつ!! ってか、だから小宮山だけには言われたくねえってなんど言わすんだああああ!!」

あ、真中がなかなか腰の入ったパンチを小宮山に当ててた。いつもなら、小宮山が暴走して パンチ喰らわすシーンが多いんだけど、珍しいな。『真中ぱーんち!』だって

……。

「ま、真中の方針は悪くないって思うよな？ 神谷。東城を落とすなら時間をかけて、ゆっくりと外堀を埋めてかないとってオレは思う。ほら、あーゆるタイプって男を信用してないってゆるか、恋愛に関してはかなり慎重っぽいよな？」

「……何でオレに訊く？ そう言うデータが多いんなら、自分の中で完結できるだろ……？」

「神谷の考えと一致すれば、更に効果が発揮するんだって」

「一体何の効果だよ……」

まあ、色々疲れちゃったケド 昨日に比べたら大した事無いか。商店街で誰にも会わなかったのは 本当に幸運だったよ……、ほんと。

18話

うん。学校が終わってもやっぱり疲れはとれんな。

父さんが仕事終わりに毎日くたびれて帰ってくるんだけど、こんな感じなのかな？

まあ、こんなのが毎日続くなんて考えたくないからそう思いたくないかな。

ああ、父さんは仕事で疲れるってよく聞くけど、基本オレは家で疲れる事があったりするんだよなあ。原因は判りきってるけど。

「なんて不景気な顔してるのよーっ、れーん！」

「……………さて、何でだろうな？ 多分、その理由はきつと近くにあると思うんだよ。考えてみて」

「んー………… はっ!! ま、まさか、学校で何かあったっ!? 告白とかされて、『自分には姉ちゃんがいるのに!』ってなったとか?」

「かーさん。今日の晩飯なに？」

「ん? カレーよ。ちよつと手伝ってくれたら嬉しいかな?」

「OK。今行くよ」

母さんもいつもいつも大変だっと思う。育ててくれて感謝だっしてしてるさ。だから、

自分で出来る事はしつかりとやろう！　って決めてんだよな。……ちよつと恥ずかしいから、口に出して感謝はまだまだ伝えられてないって思うんだけど、何れはまたちゃんとしないと、って思ってたりはしてるよ。

と言う訳で、1人おいて離れていく。

「もーっ！　蓮のいけずーっ！　あの時みたいにもつともつとカマつてよー！」

「こらこらこら、愛ちゃん。家で暴れないの。と言うより、もうちよつとでお迎えくるんでしょ？」　出発の準備出来る?？」

「わああ！　蓮のことばっかりで忘れてたっつ」

「早くしなさいよ？　ご飯は食べてく時間ある？」

「もちろんだよっ！　お母さん！　蓮とディナーっ♪」

「うーくん、お母さんやお父さんも入れてほしいけどねえー」

「あはははっ！　もっちゃん。忘れたりしないよー。でも　私の中では蓮が一番なのっ」

「そんなのずっと前から判ってますから」

本当に疲れる原因だ。

自分自身も忙しい癖に、その合間縫って迫ってくるんだし。母さんは母さんで　マイルド過ぎるし。父さんは、……姉LOVEだから、『別の男や芸能人関係の男にくっ付く

くらいなら、行け！ 蓮!!』って めちやくちやな事言ってるし。

「はあ……」

色々と疲れてしまうのは、我が家族のおかげ、って事だな。間違いなく。今日の心底疲れた理由は、姉が言っている《あの時》の事だ。色々と気を使ったり、変な意味で緊張したりと 心労が溜まったんだって判る。一発で。

ああ、でも ゼーっつたいに本人の前でとかは口にしないけど、姉の事 心底嫌ってる、とか 見たくもない、とかそう言うのではないんだよな。

昨日、何だかんだで西野と下校になった時、携帯に入った連絡は《姉》からだった。

いつもの調子の文面だったんだけど、最後の方には真面目な内容だった。簡単に言えば『皆の為の買い出しを手伝ってほしい』だった。

皆、と言うのは家族の事ではなく アイドルグループの皆さんやマネージャー、はたまた現場で働いてくれる皆への買い出し。

一度や二度程度なら兎も角、結構な頻度で行っていて、普通はそこまでしないらしい。

生憎芸能界の普通つて言うのは判らないが、それでも同じアイドル仲間やマネージャーさんとかになら、判るけど、現場の全員に〜と言うのは無いと思う。

サプライズのプレゼントとかも有ったりと、色々相談されたりもした。女の子へのプレゼントとか正直、オレに訊いても判らんとするんだけどな。

仕事に関して姉は非常に真面目で努力家。

そして勿論ながらファンの事も大事にする。どれだけ疲れててへトへト。家に帰ってきたら リビングでボタンつと倒れる様に眠る程疲れてても、握手とかサインとか、本人は拒んだりせず決して顔に出さず笑顔。(でも、マネージャーが行き過ぎる時は止める)

幾らオレの前ではメチャクチャ迫ってくる面倒な姉とは言え その姿勢に関しては本当に尊敬する所はあるから、真面目な話に関しては出来る限り手伝ったりはするんだ。

でも、あまり訊き過ぎると調子に乗って、すり寄って来り、……まあ メチャキスしてくる(勿論回避済み)。でも それでもめげずに どんどんせがんだりとしてくるんだ。当たり前だけど色々とアウトな所はスルーする。

でもまあ 手を繋ごうとしたり、腕を組もうとしたりしてきた時は、周囲の目があるし、無理に振り払ったり、メチャクチャ拒否したりすると かえって色々と目立ったりするんだよ。(過去にもあったし) その上変な噂がたったりする可能性もあるし……うん 後々が大変かもしれないから、行き過ぎない限りは黙してる。

何せ軽く変装してる姉と自分は姉弟には見えないから、傍から見れば恋人らしく、それに冷たく乱暴に扱ってるオレと言う構図が出来上がってしまふのだ。……姉に対しての周りの評価だったら別にそこまで思わないんだけど…… 『恋人(笑) に対しての対応が最悪な蓮くん』と言う噂だけは頂けない。

いや寧ろ事実無根な噂は全部拒否したい所だけど。

それは兎も角 昨日の商店街へ買い物に行った時の事だった。誰も見知った相手がいなくて本当に良かったって思ってるよ。

「蓮(ご)飯よそつてー」

「ん。OK」

「あつ お父さん帰ってきたみたいだよー」

仲良き事は美しきかな。

家族が仲が良い事は歓迎すべき事だつて事は判るよ。ニュースとかでは考えられな

い、信じられない事件とか起きてるし。

でもなあ……。

「今日はねー。ジョニーズのグループとの共演で〜」

「むむ！ とーさんは 蓮以外はゆるさんぞ!!」

「もー、お父さんつたら〜！ わかってるよつ。だって 私は蓮一筋だもんつ」

「よし！ 行け！ 蓮っつ!! 愛を離すな!!」

「……………」

「あらあら♪ まあまあ♪」

ちよつと変だよな……？ こんな家族も……。

『何でどうしてオレだけ 浮いてるんだらう……？』

つて歌っちゃいそうになるよ。某アニメの番外編の歌。

19話

「はあ……ほんつとあたしって意気地なしになっちゃったんだなあ……。こんなじゃないって思ってたのにな」

あの日から今日で4日目だよ？ 一週間、終わっちゃうよ？ 時間は無限じゃないんだよ??

って自分でも思ってるのに、頑張ろうっ！ っでずっと思ってたのに。……なのにあたしは 蓮と一言だって話せてない。それどころか 蓮に会えてない。蓮の歌……いや 声さえも訊けてない。

「……やっぱり寂しいよお。でも まあ 行けてないあたしのが悪いって言えば 自業自得なんだけど……。うう……。でも 蓮だって、蓮だっでえ……」

クラスは違うけど 会おうと思ったら会えない筈はないんだ。現にちよつと前にはあたしは蓮に会っていたんだから。

でも蓮とも仲良くなれたって（あたしは）想ってるし、ずっと会えてなかったら様子を見に来てくれたって良いのにつ！

「そうだよ！ 蓮が来てくれないのも悪いっ！ あたしだけのせーじやないっ！ 蓮が悪いんだゾ！ 絶対につ！ ……」

「はあ……」

「おーい つーかーさっ！ 猫背になつてるぞー！ それに ため息はすればする程 幸福が逃げてくんだぞーっ！」

「きゃあっ！」

突然、背中を叩かれてビックリしたよ。

「うん、誰にされたか判る。声で判つたし それに何より いきなりこーいう事するのは間違いなくユリだよ、絶対。」

「も、もーっ！ やめてよーユリっ！ ビックリするじゃんっ」

「だって、もういい加減見てられないんだよつ。生返事だつて多かつたし、あの時は吹っ切れたー！ つて笑顔になつたと思つたらすぐに戻つちやつて！ それでも頑張るつて言つてたから見てたけど……、全然変わつてないんだから！ だからほら つかさ！ いい加減に話してよ！ 元気ない つかさ見てるの私も辛いのか！ ほら、向こういへっ！」

「うう……」

今のユリ 全然フザけてる感じじゃなかつたよ。強引なのは変わらないんだけど。

それに、こう言うのつて『余計なお世話』とか『自分の問題なんだからほつといて!』とか言う人だっていると思う。

それでも、あたしは不快になんか思えなかった。前の時もそうだったけど、やっぱりあたしの事を本当に、本気で心配してくれてるって伝わったから。……それと同時に、やっぱり凄く心配かけてるんだって事も改めて思ったよ。また、同じ事言われちゃったから。

だから、もうちゃんと話したよ。相手の事も。……相手が蓮だって事も。

勿論、周りに誰もい無い事は確認したよ? 蓮つて 騒がれるの嫌だつて言つてたし。あたしも……、流石に恥ずかしいし それにその…… 望んでないのいつも周りには誰かついてくるから。

蓮と一緒にいる時は2人が良いから。

うう……やっぱり恥ずかしいな。本人はいないとはいえ告白しちゃうのつて。

真中君やあの怖い男子は堂々と廊下で言つてたけど…… 今はある意味尊敬するかもだよ。

「ふむふむ……。成る程ねえ。難攻不落なつかさを見事撃沈陥落、ハートを射止めたのはあの神谷くんだったのかあ……。うーん。でも 分かる気はするかな? 言つたら大草くんが表で、蓮くんが裏つて感じ? 隠れイケメンつて呼ばれてるもんね。で

も 他の子よりもずっと大人っぽいし、大草くんって結構女子に囲まれる事が多いし 楽しく遊んでるのも見た事あるけど、神谷くんは そう言うのなくって 雰囲気も他の男子とは全然違うしねー」

ユリ 凄く良く知ってる様な気がする……ケド、これがほんとスタンダードなんだよね。蓮は頑なに認めなかったり、信じなかったけど 結構人気だったんだよ？ 聴こえてくるんだよ？ ほんとに。

「う、うん。あたしは 蓮とは付き合いはとても短いんだけど。そんな感じがするのは確かだよ」

もう、誤魔化したり はぐらかせたりせずに、蓮の事どう思ってるのか 認めたよ……。ユリにはもう嘘つきたくないからね。

「ほほう……付き合いねえ……」

「あつ、ち、違う違う。知り合ったのはくだった！ 付き合いうって言ったら彼氏彼女って感じだし、そんなトコまで行けてないから！」

「どーどー、落ち着いて。うむ よしよし。と言う訳で つかさとの馴初め話なんかはどーなの？ その話 プリーズ」

「うえっ!? な、馴初め!?!」

馴初めって言われたら、何だか凄く恥ずかしいよ！ だ、だって確か恋人同士とか

付き合ってる男女とかが知り合ったきっかけとか、そんな意味だった筈だし。

「べ、別に話して面白いものじゃないよ?」　　そ、それに今は　違うじゃんっ!　今はかんけーないって!」

「あつ、そう言えばそーだったねー。つかさを元気付けて神谷くんのトコに送ろう!　　って会だったね」

「うう……　　ユリ、絶対楽しんでるだろ……」

「あははは。ごめんごめん。そんな事無いって」

笑いながら謝られたってなあ……。

でも、やっぱし軽くなれたって思うかも。……最初からユリには相談しとくべきだったかな?　面白おかしくされちゃうのは嫌だけど。

「でもさ、訊いてみたいって思うかもだね。だって　つかさ　ってば　ほんと色んな人に告白とかされちゃったりしてるけど、まーったく靡かなかったじゃん?　大草くん　とまではいかないけど、秀才クン、イケメンクンとか沢山いたけど全部撃沈させたしー」

「う、うるさいなー!　　あたしだって　好きでされてるんじゃないよーっ!　　そう言うの興味ないって言ったただけだもんっ!　　それにまだまだあたし達なんて子供っ!　　中学生なんだから!」

「そうそう、判ってるってば。あたしが一番つかさの傍にいたんだし、判らない訳ないでしょ？ だからこそ思っちゃうんだよ。あの、つかさがねーって」

「むー……。しょーがないじゃん。蓮と一緒にいるととても楽しいんだから。何気ない話だつて楽しくて仕方ないんだから。あたしと一緒に笑つてくれると、なんだか幸せな気分になれるんだから。……でも」

あたしは 今までの事を思い出しながら、続けたよ。

屋上で出会った時の事。逃げられちゃった事。思わず告白みたいな事しちゃった事。……それで歌まで聴けた事。

蓮の歌つてた曲がコンビニとかで流れた時さ。何だか今まではあまり聴かなかつた曲だったのに すつごく聴く様になって、好きになって……。……なつてたのに。

「……あれから好きになつた曲だったのに、全然良い曲に聴こえなくなつちやつたし。もう4日目だつて思つたんだけど…… 本当はあたしは凄く長く感じてたんだ。ご飯だつて何だか砂を食べてるみたいで美味しくなくて。……やつぱり つまらないんだ。蓮が隣で笑つてくれないと。蓮と一緒にいないと……」

「……………」

「あつー！ ぐ、ごめん！ 違うよ！ ユリや皆といふ時が楽しくない訳じゃないんだよ??」

「あつはは！ 無理してそんなフォローしなくて良いってば。友達との付き合いとはまた別次元の話だって。そのくらい判るから。甘い物は別腹って感じですか？」

ユリは腕組しながらうんうん頷いてた。

でもなんだか例え話が変わって思ったケド、今は良いや。

「あのね、つかさ」

「う、うん？」

「話聞くと、つかさは れん…… 神谷さんと喧嘩した訳でも こつびどくフラれた訳でもないんだよね？」

何だかすつごく不吉な事言ってくれてるよ…… ユリ。そんな訳ないじゃん！

だからあたしは、反射的に首が痛いつて思うくらい頷いてた。

「神谷さんと一緒に誰かが帰って……、その後ろ姿が恋人っぽくみえて、つて事なんだよね？ んで、そこからSTOPしてらつて事？」

「う、うん……。そこから先に行けてない……。行けてないんだ」

うう 改めていわれたらすつごく落ち込んじゃうよ……。

情けないつてあたし自身でも……。まだ そうと決まった訳じゃないのに。……確かめるくらいなら 簡単だろつ！ つて思うのに……。

「ふんふん……。ま つかさが初めて好きになった人。つまり初恋の相手だから

ちよつと奥手になつちやう理由も判らなくもないよ」

「う……。ど、どーも」

初恋つて言うのは……。うん。間違いない、かな。きつと……。こんな気持ちになつたのつて初めてなんだし。

「よしっ！ なら まだまだ望みはあるつてば。道は途切れてないよ！」

「うえっ!？」

突然ユリが身を乗り出してきたからびっくりしちやつた。思わず仰け反つたつた。

「『うえっ!？』じゃないつて。どんだんアタックしようっ！ ほら 私も一緒に行くからさ。1人じゃしんどくても、傍にいてあげる！」

「あ……………」

それは……。確かに勇気が出るかも。……。ユリがいてくれたら、いつものあたしに戻れるかも。

「それに話を訊くと 神谷くんつて つかさに『家族以外の異性と話のはつかさが初めて』つて言われたんだよね？」

「え、えつと……。うん まあちよつと違うつて言われたケド。普通に話しかけられたら話し返すつて言つてたし、実際にそこは見たし」

「違う違う。話の肝はそこじゃないつてば。……。良い？ つかさ。私が思うにね……」

「——っ」

「(なんだか……遅いな。まだ始まって10分かあ)」

最近のオレ 結構な頻度で窓の外見てる気がする。

飛行機雲見つけたり、鳥が飛んでその数数えたり、ただぼーっと眺めてたり。
つまり凄く時間がたつのが遅いんだ。

「——やっ！」

「(……今日の晩飯、なんなんだろ……。姉貴は帰ってこないって言ってたし、少しは落ち着いて食べるな……)」

何か考える事自体を考えてる。

集中してたら、時間って凄く早く感じるから、それを狙って考えてる。でも、一向に

早くならないんだ。

「——みやつ!!!」

「(……:はあ、もう認めろよオレ。会えてないからだろ? ……アイツに会えてないから、なんだろ? そうだろ。……認めなつて。もう)」

無理矢理判らない風を装ってたんだけど、……判つてた。もう流石に認めるしかなかった。

ここ最近 アイツ……:西野の声、訊けてない。顔だつて見てない。

何でだろう? 今まででは 西野の方から……:だつたのに。見ない日はないって思うくらい連続だつたのに。逃げようとさえしてたのに。

「(……:こんなに考えてんのに、自分で行動せずに西野の事待つて言う事 事態女々しいつて事なのかな……:?) オレから行かないとダメつて事か? でも……:なんでだろ? なんで来なくなつた? ああ、勉強とかかな。東城と勉強するとか何とかつて言つてた様な気がする……。それに、……:他に、……:その)」

それは 考えたくない事だったんだ。

西野くらい可愛かったら、正直引く手数多だ。西野がいる所には男が集まるのはこの目で見たし。知ってるし。

西野本人は 見た目だけでは嫌！ って言ったんだけど 好きな人が出来たって全然不思議じゃないだろ。……その、ここのオレでも、今まで考えもしなかったオレでも、こんなになっちゃったんだし。

「(……どうするのが正解、なのかな。この数学の問題なんか目じゃないくらい難しい……。ん？ 東城??)」

ふと、東城と目があった。

西野が東城と勉強するって話を思い返した時、反射的に東城の方を見たんだ。それで目があった、何だか慌ててる。

「(ん？ どーしたんだ)」「コラア！ オレを無視するたあー良い度胸だな！ 神谷あ！」っつ!!」

考え事、一気に全部ぶっ飛んだ。

耳元で怒鳴なれたら誰だってそうなるって思う。

その後の展開は、容易に想像つくと思うから…… うん。考えるまでもないだろうな。

と言うか、考えたくないってのが実情だ。

「どうしたんだよ神谷。お前にしちゃ珍しくないか？ あんなの」

「……オレも戸惑ってんよ。これでも内申点はすげー気にしてるんだし」

「ま、オレとしては神谷のおかげで嫌いな数学の授業が短く感じたから良いけどな」

「小宮山に好きな授業ってあるのか？ そもそも」

「あるわ!! た、体育とか？」

「オレに訊くな。……大体返答判ってたし」

数学の先生にこっぴどく怒られたんだな。当たり前かも知れど、名前呼ばれてた（らしい）のに、ずっと無視してて外見てたんだし。

一応、名指しされて解かされた問題は 答えたんだけど授業態度に問題があるってさ。……受験を控えてる身とすれば、内申点に―― が着くのはほんと勘弁だ。

「ほほう。抱える悩みが何となく見える様な気がしたなあ、神谷君？」

「芝居がかった動作と口調で何しに来たんだ？ 大草君」

「お、軽口反撃が出来るトコ見ると、そこまで深刻じゃないって事か」

「怒られたオレを慰めにきたってか？ ……そりゃどーも。一応貯金があるみたいだから大丈夫だつて」

「いやいや、そこはオレも心配なんかしてないぜ。推薦じゃなくなつて神谷なら大体どこでも行けるだろ？ それとは別な事だ」

「？」

真中と小宮山に続いて、大草もやつてきたよ。

まあ、この4人でつるむ事が多いから、別にーって感じだが、言った通り口調や仕事に違和感バリバリだったから。数学の授業で怒られた事を慰めにでも来たのか？ 程度しか思つてなかつただけ……。

「最近来ないよなー、西野」

「……………」

悔り難しだ。やっぱり大草だけは。

でも、そつち方面（恋愛事？）に関しちや偏差値がダントツ大草だから……仕様がないかも。

でも——
どーしよ……。何て返せば……？

20話

「なあなあ神谷。西野はどうしたんだよ。最近オレらのクラスに来てないじゃん」

「それを何でオレに訊くんだよ。それに　そもそも　そんな頻繁には来たりしてないだろっ！」

さっさと切り上げたい気持ちが凄く強いんだけど……上手くあしらう事が出来ないんだ。大草は　他の連中（真中や小宮山）と違って単純じゃないから。

でも、大草はそんなオレの気持ちを見抜いていたみたいだに笑ってたよ。

「……まっ　オレはしつこくは訊くつもりは無いよ。でも　あんま皆に心配かけるものじゃないぜ？　他の皆はまだ気づいてないっほいけど　このままじゃ時間の問題だつて」

「っ……………」

どうやら、オレは　心配をかけてたらしい。

そこまで気の抜けた顔をしていたんだらうか、と自己嫌悪になりそうだった。

「……なんか悪いな」

「いやいや。唯一の常識人である神谷が抜けるとなると、オレにとつても負担が凄い増えるんだ。頼むぜ？ 相棒」

「そう言う扱いは 止めてくれって。めっちゃ疲れるんだから」

腕を回してきた大草。

オレは苦笑いしつつ ゆっくりと大草のその腕を払ったよ。……なんか周囲の女子の視線が少々気になったけど、やっぱり大草を見てるんだろう、と結論した。結構強引に。

だって オレが人気…… とか全然信じられないし。

「でもさ。オレなんかちよつとだけ安心って感じだ」

「は？ 安心？」

「ほれ、神谷つて中坊らしくないって先生にまで言われてただろ？ オレも妙に大人びてるよなー、つてずつと思つてたし。的確なツツコミ入れるし」

「あー、まあ そうだな。……てか ツツコミ云々は ボケ役が濃すぎるからだろうが」
「ははっ！ そりやそうか」

大草の言う通りだ。先生とかに何度かそう言われた。転校してきたばかりで 話す機会自体少なかったんだけど、それでも言われた。色んな荒波に子供ん時（今も子供だけど）からずつと揉まれてきたから仕方ないって、自分を客観的に見れるよ。

ほんと……色々と大変だったからなあ……。

「つまり、お前が人並に恋煩いをしたってのが卒業前に見れて良かったって思ってたって」

「つつ！ こ、こいわっ!? な、なんでそーなるんだよ!？」

「いやいや何でも何も、そもそもアレで誤魔化せてるって思ってたの? 『なんか悪いな』って返事返した時点で認めてるだろ」

「う……」

「違う。……全くその通りだ。いかん 最近のオレ隙だらけって感じだよ。」

「つとと、しつこく聞くつもりないつつたしな。この辺にしとくけど あんま無理はすんなよ? ……西野もお前が来るの、待っててくれるかもだぜ」

「……………」

「(うーむ、……オレも結構西野の事気になってたから、話してみようかな と思っただけ…… 神谷コイツが先に手だしたんだったら ま、手を引いた方が吉かな。神谷だし)」

大草は 女子に關しては外れた事は言わない。相手が西野だったとしても……そこまで変わらない的中率だと思う。

いや、オレがそう思いたいだけかもしれないな。

「ほれ、もう下校の時間だぜ。あの2人は補修受けてるみたいだし、今日は久しぶりにオ

「レらだけで帰るか？」

「……そうだな」

大草と2人だけつてのは 最近じゃ珍しい。いつも真中と小宮山の2人がいて、4人で帰る事が多かったから。ああ、大草が女子に呼ばれていないってパターンはあったか。

と言う訳で、真中と小宮山の2人は置いて 帰る事にした。

『オレ達を見捨てるのかああ！』

と、小宮山が騒いでたけど、『この時期に んな点とるヤツが悪い』とドストレートに言ったら何にも返してこなくなった。いや、言葉が槍になって 小宮山を貫いちやつたからだと思う。言霊って具現化する事が出来るんだな…… とバカな事を考えつつ、オレと大草は教室を出たよ。真中は まあ 小宮山のお守兼勉強だろう。 僅差だけど 小宮山より真中の方が学力は上だから。……団栗の背比べだけ。

「そう言えば、真中は東城と勉強って言ったと思うんだけど、まだやってないのかな？」

「あー、そういう話 確かに真中もしてた様な気がするな……。東城日直の仕事がちよ

「こちよこ入つてたし、今日はしなかつただけなんじゃないか？」

「あ、そう言えばそうだった。……皆の前で盛大にこけたの思い出したよ」

東城は、本当によく転ぶ。何にもない所でも くきつ！ と足を踏み外したりして転んでしまうから、教室の様な机や椅子のジャングルだったら、高確率でこけても不思議じゃない。……でも 今までそんな気配は無かつただけだな。そんな頻繁に転ぶ女子がいたら、目立つし 名前と容姿だつて 幾ら真中でも覚えれると思う。……東城は真中と知り合つてから 転ぶ事が多くなつたとかか？

「おっ？」

「……いてっー！」

オレも人の事言えないかもしれない。前を見てなかつたから、オレの前に行く大草にぶつかったから。

「つと、危ないな。何で急に立ち止まつてんだよ」

「ふふ。良いタイミングかもしれないぜ？ 神谷」

「は？」

「ほーれ！」

大草は、オレの腕を掴んで強引に前に行かせた。……それで 目の前に見えてきたのは2人。黒髪をポニテで纏めた やや長身の女子。名前は 知らない。それと……

もう1人は明るい金髪のシヨートの。

「あ……」

「っ……」

西野、だったんだ。

「(互いに目と目が合って3秒。……赤くなつて目をそらせたら 惚れてる。これ間違いない診断だけど、2人はどうだ?)」

西野の顔、久しぶりに見た気がした。たった4日間だったのに、1週間も経つてないのに。本当に久しぶりに感じる。それと同時に、何だか顔が赤くなつてきて 西野の顔中々見れない。反射的にオレはそらせてしまったよ。

「おおうっ 噂をすればなんとやら、だね? っーかさっー!」

「ゆ、ゆりっ!! (ま、まだまだ心の準備出来てなかったのにー!)」

「(だいじょーぶだいじょーぶ。5秒前の自分を思い出してつて。すっごく気合入れてたじゃん? 後はあたしの勘を信じなさいっ!)」

なんか、向こうも賑やかになつてたよ。……それに、こつち側で言う大草みたいに、西野の事を強引に前に出した。

「ん？（ほほう 向こう側も似た様な事考えてたつて訳ね。んじや 一口乗りますか なつて）良かったなあ、神谷。さつき考えてた事が、こんなに早く叶うなんてなあー つて、いでえっ!!」

「……アホ。んな事言つてねえ。考えてたつて、なんで判んだよ」

オレは にこやかに晴れやかに笑う大草の足の爪先をストンプ。慌ててたつて事もあつて結構強めに入つちやつたけど……良いだろ。

「……………」

「……………」

その後は自然と西野と対面したよ。させられた、つて言うのが正しいかも。

でも やつぱり、動悸が止まらない。頬も赤くなつてゐるつて思う。

だから夕方だつて本当に良かったと思つてるよ。夕日が窓から差し込んで、結構辺りを染めてるから。夕日の色に。

でも ちょっとだけ会ってなかっただけなのに…………… こう、なるんだな。

「おつす……、れ、れ…… 神谷、くん」

「ああ。……」

物凄くぎこちない。うん。滅茶苦茶違和感ありまくりだ。平静を装うとしても 霧散してしまうよ。……どうすりやいいんだろう。ほんと。

いつもどうしてたっけ……？

「さーと！ おお、大草くんじゃん！ 今日も相変わらず格好良いねー？」

「ん？ ああ、確かキミは椎名さん」

「へー、あたしの事知ってたんだ？」

「そりやね。前に話した事 あるじゃん？」

「ありやりや、そうだったっけ？」

横で2人が話してるんだけど…… ほんと頭に入ってこない。

西野に全神経が集中しちやってるから。

「あー、つかさ？　こんなチャンスあんまりないから、ちよつとあたし　大草くんと話し
てくるねー？」

「……………ええっ!?!」

「おー、神谷。オレもちよつと椎名さんとは話があるんだったんだよ。ほれ、確か椎名さ
んつて生徒会の書記やつててさ。サッカー部の事もちよつと聞いとかないとくだった
んだ」

「……………はあ!?!」

驚いた。

ほんと、2人は示し合わせたかの様に、あらかじめ　打ち合わせでもしてたん？　つ
て聞きたくなる程自然に、離れていつちやったんだから。

『ちよつとまてー!』つて言う暇もなくさ。西野も同じ気持ちだった様で、口をぱくば
くさせてた。

ほんと、あつという間の出来事。……ぽつんつ、と2人きりになつちやつた。放課後
だし周りに生徒がいなかったのがせめてもの救い……かなあ。

それで その後少しだけ変な間があつたんだけど、最初に話したのは西野からだつたよ。

「……え、えと。ねえ 蓮？」

「……おう」

「ちよつと、歩かない？」

「……ん、わかつた」

西野に連れられて、一緒に歩いた。肩を並べて、ね。行き先は 大体だけど想像がついたよ。

階段を上がって、上がって……一番上まで。そこにある扉を開くと 夕日が身体を照らしてくれた。

「ここが西野と初めて出会った場所だったから 感付けたかもしれない、かな。」

「……西野、ちよつとだけ待ってて」

「え？ どしたの？」

オレは、ちよつとした階段の踊り場にある机やら椅子やらを屋上に引つ張り出した。

西野は、何してるのか判らないからか、頭に幾つもの《？》を浮かべてる感じだったけど、今は説明はせずに ある程度引つ張り出した後は、屋上の扉の前に積み上げる。大分完了した所で、西野は声をかけてきたよ。

「なにしてんの？ 蓮」

「……覗き見とかしてきそうな気配がするから。その予防策を、と」

「……あ、な、なるほど」

西野にも心当たりがあるのか、うんうん と頷いてた。

でも…… 冷静に よくよく考えたら 2人きりの空間。その出口を塞いで……つて 状況も不味いんじゃない…… って思ったケド その辺りは西野は気にした様子は多分ない。きつと信頼してくれてるんだろうし、オレはそんな馬鹿な真似は絶対しないし。

兎も角ちよつと疲れたけど完了だ。これだけつんでれば、開けない……事は無いと思うけど、開けようとするれば音は出るし、ちよつとだけ開けてくって事も出来ないと思ふから。

「へへつ てーつきり 出口塞いで あたしの事、襲っちゃおう！ とか考えてるのかと思つちやつたよ」

西野は、もうすっかり元の調子に戻る事が出来た様だつたよ。うん、そりや良い事だ。何だか、様子がおかしかつた気がするからさ。

「はあ…… んな事するわけないだろうが。この大変な時期に」

「へー、大変な時期じゃなかつたら、シチャうんだ？」

「揚げ足取らないでくれって……。それに、ちよつぴり はしたないって思うぞ？」

「うつ……、そ、そんなことないもーんっ！ 蓮がそんな感じにするんが悪いんだから！」

「あー…… はいはい。そーだな」

「もうっ はい は一回、だゾ！」

「はーい」

「伸ばさないー！」

「OK」

「つて、なんで今度は英語になるんだよっ！」

「……あはははー！」

面白いくらい会話が弾む弾む。

あ、ちよつと思ひ出したよ。『女の子が、そんなはしたない事言うもんじゃありません』つて、確かオレの母が最初の方には姉に言つていたんだつた。それを思ひ出したら、何だか笑えてくる。西野と話してる楽しさに相余つてさ。あの時は全然通じなかつたし、多分西野に言つても通じないだろう、つて思うからなあ。

「ふう……」

「ね、蓮。ここはまだゴールじゃないよ？ ほら、上！」

西野は上をさした。そう、給水塔が立つてる本当に一番高い場所。……本当に初めて出会つた場所だ。

「ここでも良くないか？」

「駄目。折角来たんだもん。……うえ、いこ？」

ここで上目遣いするの……か。

それを断れる……か？ 男が。

と言う訳で、選択肢 YES / ON の内の1つを一瞬で消し去って、颯爽と返事する事にしたよ。

「はいはい。西野サンのおおせのままにー」

「うむうむ。くるしゅうないゾ？」

にこつ と笑ってオレから先に上がったよ。

だって西野から上がったら…… まあほら ちよつとしたトラブルが起きるからそれを見越しての行動だ。

西野もそれには気付いてる様で ただただ笑っていた。

「ふー、やつばここだねー」

「下も上もそんな変わらんだろうに……」

「いいの！ ここが一番いいの！」

「はい。了解であります」

西野はちよつと膨れながらそう言つてる。その顔も良いんだけど、やっぱりオレは笑つてる顔の方が良いからすぐに認めた。認めたら、西野は本当に直ぐ笑うから。……笑つてくれるから、さ。

「……ねえ、蓮。ちよつと聞いても良い、かな?」

でも、西野の笑顔は直ぐになくなつたよ。……何だか真剣な顔になつてた。

「うん? 良いよ。答えれる範囲内なら、だけど」

何を訊かれるのか……この時は想像できなかつたんだ。

でも、訊かれた内容。……それを訊いて オレは正直震えてしまつたよ。

ほら、西野に歌を聴かせて、つて言われたあの時みたい……。

「その……前に、蓮が 女の子と一緒に……歩いてたけど、だれ……なのかな、つて」

前とはいつての事? 学校での事? 歩いたのつて西野の事じゃ?

色々疑問を強引に生んだけど……、それらの疑問は一瞬で消えたよ。

だつて、判つたから。西野が言つてる前つていつの事なのかと、それと 女の子つて 誰の事をさしてるのかも。

——見られてた……!!?

でも 何だか 色々とバレるのって……西野から始まる事が多い気がするけど 気のせいじゃないよな？

21話

蓮と話すの凄く久しぶりだなーって ほんとしみじみと感じちゃった。蓮も……同
じなのかな。そうだったら嬉しいかもだね。いや 絶対嬉しいよ！

ほんとにほんと 凄く久しぶりだなって感じちゃったなあ。話ししてる最初の
方はほんとに緊張しちゃったみたいなんだ。

うーん…… これも全部全部ユリの計画通りなのかな？ って思ったりしたんだけ
ど 流石に幾らなんでもそれは無くて、偶然 蓮や大草くんとぼったり出会ったんだっ
て思う。

でも そこをすかさず色々と合わせたユリには ほんつと脱帽だよ。

その後だけど 色々と皆の勢いに圧されちゃって、2人きりになったんだ。その時は
心臓がどうにかなくなっちゃいそうだった。痛いくらい鳴っててさ……。生きてるって実
感出来てる？ っていうのかな、こういうのってさ。

後、確かに色々と決心はしたんだよ？ でもさ 決心したと言っても、いきなり！

途端に！！ 蓮とぼったり会うなんて 一体誰が想像できるって言うんだよー！ 無茶

じゃんっ！　ぜーったい!!

あー 勿論 色々と愚痴っぼく言っちゃってるけどさ、とても感謝はしてるんだ。すっごく感謝してる。ユリにはさ。後 乗ってくれた大草くんにも勿論ね。

最初こそは 凄く緊張したけど やっぱり蓮と話すのはとても楽しいから。たった数日程度でぽっかりと空いちちゃったあたしの胸の中。……あたしがすっごく満たされてるのが判るから。

だから やっぱり あたしは——蓮の事が好きなんだって思った。

だからこそ訊いておかなきゃいけないって思ったんだ。

初めて蓮と出会ったこの屋上で……あの時のことを。

蓮と一緒にいた人のこと。

「その……前に、蓮が 女の子と一緒に……歩いてたけど、だれ……なのかな、って」正直に言ったら本当は訊く事が怖かったんだ。

だって あの後ろ姿をみたら、誰だって想像しちゃうもん。……連想しちゃうから。夕日の中を2人で、腕を組んで、……そんなの見たら誰だっけ。恋人同士なんじゃないのかな、って。好き嫌いに歳なんか関係ないもん。だって、あたしも好きになっちゃったんだからさ。

それで訊いてみたら、……蓮 何だか固まっちゃったよ。

でも その蓮の気持ちは判るかも。だって 蓮は恥ずかしがり屋だって事知ってるし。知られたくないって思ってるんだって判るし。……でも、訊かずにはいられなかつたんだ。蓮の口からはつきりと言ってほしい。……そうじゃないと あたしは進めないから。

蓮が何かを言おうとするまでの間、凄く長く感じたよ。何度か口をパクパクさせてね。違う内容の話だったら 餌欲しがってる金魚みたいだよ。って笑ってたかもだね。今は全く笑えないけど。ほんの数秒の時間の筈なのに、信じられないくらい凄く長く感じるから……。

「え、えと…… 東城の事……か？」

「え？」

蓮の口から出てきたのは、東城さんの名前だったよ。

これは今のあたしでも判る。……蓮、何か誤魔化そうとしてる？ 気付いてないふりもしてる？ 東城さんの話題だったら、ノンストップで回答。100点満点の回答をしてくる癖に！ しかもため息とかセツトでき！

「だから……東城の事、かなあーって思ってる。……だ、だって ほら！ 西野、前にも東城と話してる所見てて色々あつたじゃない？」

「……………」

「だ、だから 今回もそれかなあ……って。ほ、ほら 最近じゃ女子と話すのはマジで西野が東城だけだs 「ちつがーうっ!!」 っっ」

思わずあたしは 蓮の顔、両手で挟み込んだ。うん。凄く近い。蓮の顔が直ぐ前にある。それに顔が赤く、熱くなっているのが自分でも判る。

「蓮……絶対判っていつてるだろ?!? 判ってて恍けてるんだろー?!?」

「……………」

「それに 東城さんならあたしだつて判るよ! 結構離れてたけど、それ位判るからっ

! ……それに、学校じゃないっ! あの日、あたしと一緒に帰ったあの日! その

……路上で……………、蓮、うで、くんでた……もん」

「あ……………」

「ここまで言ったらほんと後退のネジなんてないもんね!

蓮は前に、顔が近いっ! って慌ててた時があつたけど もうそんなの知らないもん

! 全部、ゼー…んぶはつきりするまで、走り切るから!

「おしえて」

蓮の口からはつきり聴きたかった。歌の時とはまた全然意味が違うのがちよつと嫌だケド。

「あ……………う……………んん……………」

蓮、何度も何度も……うん。唸ってるってヤツだね。唸って唸って、今度は考え込ん
でた。

何だか、こういうのって『二股かけてたんだろっ!』って問い詰めて、問い詰められ
た蓮はあたしに『どー言えば良いかなあ、どー言い繕えば良いかなあー』って色々考え
てるって思っちゃうよ。

べ、別に……付き合ってる訳じゃ、ないんだけど。あくまで　その……　そう見え
るってだけだし!

「はああああああ………」

蓮はあたしの気も知らないで、今度はすっごい長いため息吐いてた。ちよつとムカっ
てきたケド、何とか黙っていられたよ。顔には出ちやっと思ったけど。

「あのな……西野。ちゃんと話すよ。だけどここだけの話にしてほしいんだ。それが条
件。……それで良いか?」

「……うん?」

「だから、その………」

あ、つまりは皆には内緒にしてって事かな。

蓮は恥ずかしがり屋だから。……でも、つて事は やっぱり付き合つて、コイビト だつたりするのかな……？

「うん判つた。……誰にも言わない、から。教えて。……お願い」

今度、胸の中に湧き出てきたのは聴くのが怖いって想い。蓮に会いに行けてなかつた 頃の気持ちだつた。

でも、それでも、あたしは押し殺す事ができたよ。今のままは、絶対嫌だから。

「……あのな。あの時は……」

まさか あの時 西野に見られたとは思ってなかった。

呼び出しくらって直ぐ傍だったからちよつとは周囲を気にかけてたのに。そもそも西野は反対方向に帰って行ってたし。……なんで見られたんだらうなあ。

オレが悪いのか、アホ姉が悪いのか…… いやいや間違はなく、絶対ッ断然ッ！
後者。

でも、油断してたオレも悪いことは悪い。姉は冗談抜きで超がつく程の有名人だ。……色々と気を付ける事。昔から判ってたんだけど、新しい街に来た事で、大分緩んだみたいだったよ。それに、今まで見られなかったのって結構奇跡的なのかもしれないしな。

それは兎も角、西野にちゃんと説明したよ。

あの時一緒に歩いてたのは、姉。色々と頼まれごとがあつたから付き合ってたって。……それで、姉は異常に過干渉だと言うか、色んな意味でぶつ飛んでるって、それとなく伝えた。最初こそは西野、固まってたけど、だんだん驚いた表情になつてた。

あ、そうだ。それ以上に気になる事が出来たんだった。

「(ト)、どっだ?」

「え? 何言つてんの蓮。入り口にでつかく書いてたじゃん『カラオケ sea』って! カ・ラ・オ・ケだよ!」

「……………」

なんか判らんが、今オレと西野はカラオケ店に来てるらしい。屋上での一件後にそのまま直行したらしい。あまりの強引さと言うか急展開と言うか、今までの流れが完全に頭ん中から抜け落ちたよ。

「てか、一緒にいた友達が良いのかよ。ここまで来て今更だけど」

「ユリ？ うん。メールも送ったし、大丈夫だよ（……）が、頑張れって言われたのがなんか恥ずかしかったけど……）」

オレ、もう一度ため息吐こうとしたら 西野に止められた。

「もーっ 『今日は騒ぐぞー！ ストレス発散だーっ！』 ってあたしが言っただけだ！ てくれたのは蓮だろっ！ なのになんでため息ばかりするんだよーっ！！」

「ふがっ、ふがっ！！ えふんっ！！ ふあ、ふあるふあったって！」

結構西野の力強い……。それに苦しい。苦しそうなのを察してくれたからか、西野手を離してくれた。でも、確かにため息ばかりつくのは 西野に失礼だよな。……でも、冷静に考えてみてくれよ？ 2人きりで……カラオケ、ナンダヨ？ 個室で照明かなり薄暗くて、2人きり……ナンダヨ？

「今日は蓮と一緒に歌います！ 歌えるように願います！ それが叶うまで帰しませんっ！」

「……いやいやいや、ここまで来といて逃げないって。店ん中入ってんだし」

「えー わっかんないよー！ だつて蓮逃げ足凄いし。屋上から飛び降りたと思つたらいつの間にか消えちやつてるしきー！」

「だから逃げませんでした。西野サンのおおせのままにー、だつて」

「うむうむ。余は でゆえつとをこそ望んじゃぞ？ 蓮くん」

「……はいはい」

オレはすつごくドキドキしててヤバイのに 西野はなんか凄いハイテンションになつてゐるみたいで凄く楽しそうだ。……でもまあ 元気なよりは断然いい。……西野は笑つてゐる方が良い。

「はい！ 蓮。マイク持つて」

「へーい りよーかい」

「んーとね。ほら、この曲で行こうっ！」

西野が入れたのは……あの時の歌だった。あの日屋上で歌つた曲だ。

「よーし！ 蓮に負けないからっ！」

「ははは…… なんの勝負だよ」

カラオケには採点機能はあるけど、今は勝負する感じじゃないんだ。まあ その辺は勿論ツツコまなかつたよ。

だって、この綺麗な笑顔をずっと見ていたかったから……。この際薄暗いこの個室だったから、ある意味良かったかもしれないな。まだ……。見ていられるから。

勿論 絶対に口にはしないけど。

ガンガン歌ってすつきり笑顔なのは西野だ。

「んんんん！ あー、気持ちよかったー！ やっぱり受験勉強で溜まったストレス発散は大声だよねー！ 受かるかな、とか落ちるかもしれないな、とかぜーんぶ忘れて気持ちいいっ！」

「勉強の内容までは忘れない様にな？」

「もう蓮っ！ 水差さないでよー！ 折角気持ちよかったのにー！」
「ぐええっ！」

『つかさパンチッ!!』と、何だか真中みたいな掛け声とともに、西野からパンチを頂きました。これって所謂リバーブローと言うのだろうか、肝臓辺りにぐぽっ！ って入って それなりに……。というか メチャ痛いし苦しい。身長差もあるから丁度入りやすかったのかな？

「おーい、蓮！ そろそろあたし 門限もあるから帰ろうよー」

悶絶してるオレを差し置いて 笑顔で先に行く西野。

とりあえず NICE 笑顔って言ってやりたいかも。からかいながら。

「……………ふう」

……でも、今はちよつと待つてくれ。リカバリーまだだから。

さて、帰る前に喉乾いたかな。

「けふんっ…………」

西野は ちよつと歌い過ぎたのか、咳き込んでいたよ。

「西野」

「こほっ…………、んー？ どうしたの」

「ほら、そこ。向こうにコンビニがあるだろ？ ちよつと寄ってきていいか？ ……」

ジューズ、奢ってやるよ。なんか知らんけど、オレが結構振り回した（らしい）し。詫
びだ」

カラオケで散々西野に説教のようなものをされたんだよな。事ある毎に 『蓮が悪

いーっ』って。結構というか普通に理不尽だったけど まあ 良いって訳だ。

「ほんどっ!? わー 嬉しいな。ありがとー 蓮」

「ん。ひとつ走り行ってくる」

「え？ あたしも行くよ?！」

「いや、もう時間も遅いし。門限あるんだろ？ ささつと行ってくるから待っててくれ」

西野の言葉を待たずに、オレは走り出した。

『ありがとうー 蓮!』

それだけで充分。こちらこそ ありがとうだ。

だって嬉しかったから。西野と一緒にいられた事もあるけど、何よりもカラオケ。

……久しぶりだったから。本当に久しぶりで、心の底から楽しいって思えたから。

これくらいで良いなら、幾らでもだ。

まあ……パシリになるのは嫌だけど

2 2 話

走っていく蓮の後ろ姿を目に焼き付けてる。……うん。こう言う時つて追っかけた方がやっぱり良いよね？ 今逃げちやう……何てことは流石に今更だし、絶対ないって思うけど、やっぱり……せつかく一緒にいられてる時間。あとちよつとだけしかないから 離れちやうのは勿体ないもん。

それにしても、今日はほんと色々とあつたなあ。

あたしは 蓮の事ずっと気になってて、大変だった。

うん。勿論 蓮と一緒に腕を組んで歩いている女の人の事だよ。

あの日の夕方……。

夕日の中に2人の男女が入っていく光景。

今思い出しても 凄くロマンチックに見えるし、ユリが言つてた展開にも似通つてたつて思うから（ま、流石にオーロラは無いけどね）。

それで色々あつて 今日初めて蓮の口から大きく事が出来たんだ。

最初は蓮、すつごく顔強張つてたり 固まつてたり 慌ててたりと世話しなかつたなあ。でも やっぱり誰かに知られるのが嫌だつたんだとあたしは思つてた。蓮は騒がれたりしたりするのが苦手、つまり恥ずかしがり屋だからね。

それで蓮が言つてた真相……なんだけど。

『あ、あの……あのな？ 西野。……あ、あれは……、……ね、なんだ』

口籠つてて、更に声がいつもの3倍。歌を歌つてゐる時の5倍は小さな声だつたから、とーぜんあたしには聞きとれなかつたよ。最初。

『え？ なに……？』

凄く聞きたいつて気持ちもあつた半面、怖い気持ちだつてあつたりしてたけど あたしは、蓮にもう一歩近づいて聞こうとした。蓮は口をもごもごさせて……、それで何度か呟いた後、はつきりと言つたんだ。

『だから あの時ののは、 あ、姉なんだよ!! つまり、ねーちゃん! 姉貴!! 2個年上の姉!!!』

周囲に滅茶苦茶響いてるんじゃない? って思えるほどの大絶叫だつたよ……。

姉もねーちゃんも姉貴も同じ意味なんだけど……それは兎も角、今度はあたしが固まっちゃつてた。

数秒固まった後。

『……………あ、あね?』

一度聞き返しちやつた。

『う……………むむむ、そーだ! そーだよ姉だ!! ってか、ウソだったとしても、そんな嘘言もんいたくなんかねえよー!!』

蓮の絶叫は止まんなかつた。

だから、あたしは思わず蓮の背中摩つてた。すつごく興奮してたから。

それでね。ちよつとずつ落ち着けたみたいで、話してくれたよ。

『あの時…………… その、メールがあつて姉に買い物付き合つてつて頼まれたんだ。買い物手伝つてつて。…………… 姉は色々と難がある性格というか、アブノーマルと言うか…………… 色々あるんだけど、世話にはなつてるし、借りを作つたままつて言うのはオレも嫌だし。基本、頼まれた事は断らない様にしてるんだよ。…………… それ以上に貸してる気がすんだけど、まあ……………』

蓮は思いつきり頭を掻き続けた。

うん。…………… 嘘言つてる様には見えないんだ。ぜんっぜん。

それよりも、あたしは驚いてた……………。

え? 驚いたのは蓮の事じゃないヨ?

その……ね。ズバリ、的中したんだ。

あたしの友達のユリが言ってた事が……。もうっ、ユリは超能力者だよ！　ここまで来たらさ！

あの日、あたしがへこんでた時にユリ、言ってたんだ。

『良い？　つかさ。私が思うにね……。その一緒に歩いてたって人。神谷君のおねーちゃんじゃないのかな？』

なんか、ユリ思いつきりあたしの手を握って断言してたんだ。

とーぜん、あたしの顔は『はあっ!?』なつてたと思うよ。自分でも。だって　ほんと突拍子もない事だったし、説得力って言うものもないと思つたもん。

それがユリにも伝わったんだよ。きつと。

『つかさつ！ 世の姉はね…… 本心では弟の事が好きで好きでたまらないモノなのよーっ！ みーんな、理性とか世間体つー偽善な壁を作っちゃって、自分を誤魔化してるだけなのよーっ!! みんなみんな大好きなのっ!!』

どんっ！ と胸を叩いてそう言われても……ね？ 確かにユリは弟のサト君LOVE Eなのはずーっつと知ってたけど、世間一般の皆さんも同じくと言うのは聊か強引過ぎやしないかい??

そりゃ、弟の事、家族が大好きって言う人も当然沢山いるって思うけど…… ユリ のって、親愛じゃなくって愛情、……LOVEって事だもん。LIKEじゃなくって……。

『だからきつと神谷くんのお姉ちゃんだったんだよ！ 間違いないよ？ キタコレ！ だよ!!』

ほんとに……、ほんとに……。

『当たっちゃった……?』

『……うう。んん? 何が、だ……?』

『い、いやっ! ナンデモナイヨ? 蓮っ! うん。……そ、つか。……そつか!!』

あたしは、驚いていたんだけど、直ぐにそれを覆いつくす程、ゼーんぶ消えてしま
う程嬉しかった。とても、嬉しかったし、安心もした。

『蓮のお姉さんは、蓮の事が好きなんだねー? 蓮もそうなの?』

『誰があんなアホを……っ。……当然 家族としてはある。……家族としては、だ!!
あんなのと一緒にされたら困る!!』

『あははははっ! 仲が良い事は良い事だよっ! うんうん。でも アホは酷いと思う
よー?』

『西野は知らんだだけだ! 姉貴は限度を超えてるんだよ!! それにさつきも過剰すぎ
るっつったろっつ!! 無茶苦茶なんだっ!! だから、あんまり答えたくなかった!!
……なのに。……うう、言いたく、無かった。血反吐……吐きそうだ……』

『あははははっ。って血反吐!? そ、そこまでっ!』

蹲りそうな蓮を思わず支えちゃったよ。

すっごいストレスだったって事……かな? でも、コレ ユリが聞いてたら……。

それどころかサト君本人から言われちゃったら……。

うん。怖いから考えるの止めよう。ってか、それよりも。

『はぁー……』

凄く、凄く安心出来たせいか、気が抜けちゃったんだ。

それで この後はカラオケに行ったんだ。

とても、とても楽しかったよ。

それで今。

蓮はコンビニに入っていった。本当は あたしも一緒に行くつもりだったんだけど、先に行っちゃったんだ。ただ、待ってるだけだったらアレだから、あたしも向かった

よ。

「……はあ、会えなかった時間つて凄く苦痛に感じてたのに、今はへっちゃらだ。あはは。不思議……でもないかな。それに あたしの為に……だもんね」

ちよつとはしやぎ過ぎちやつたんだ。そのせいで 喉痛めちやつて、ちよつと咳き込んだ所を、蓮が見ていてくれた。

「(……嬉しかったなあ。あはは。奢ってくれることじゃなくて、……あたしの事 ちやんと見ててくれてるんだ、って思ってた)」

だからこそ、もつともつと蓮と一緒にいたいから、ちよつと歩くスピードアップ！

もうちよつとで、コンビニ。……うーん、出てきたところで思いつき抱き着いてみようかな?!

「ふふつ、流石にそれはちよつと早い……かな?」

「おつ、可愛い子ちゃんはつけーんつ！」

「え……?」

突然、だったよ。

突然……目の前に男の人が2人、ほんとに突然出てきたんだ……。

「2点で220円になります。ポイントカードはお持ちですか？」

「いえ、ポイントカードはありません。あ、袋は大丈夫です」

「はい。ありがとうございます。またのご来店をお待ちしております」

「このコンビニは初めて利用するんだけど……この女性店員は凄く丁寧な対応

だった。

多分高校生のバイトかな？　　って思う。

……なんでこんな事考えてんのか？　　って疑問はきつと前に利用したトコの接客対応が結構雑だったからだと思うな。前のトコは『ませー』『ありっしたー』しか言ってなかつたし。

「ま、別にオレはあれ位でも全然OKだけど」

最低限の接客つてのはあると思うけど、オレは別に気になんないんだよな。もつと濃い人とあつた事だつてあるから。

それは兎も角……。

「うーん。買う前に西野に何が欲しいかくらいは訊いてた方が良かったかな？　　コーラとオレンジジュースでも良いかな。……嫌いだったらもう一回買えば良いか」

西野がそう言う風に言うとは思わないけど……　　リクエスト聞かずに飛び出したオレに非があるし、余ったら家に持って帰ったら良いだけだし。

「さてと。早く戻らないと……ん？」

ふと外を見た時だったよ。

西野がいた。それは不思議じゃない。それ以外に誰かがいたんだ。

「……………」

それに雰囲気明らかに悪かった。
だから、オレは足早にコンビニを出たよ。

「ちよつと何よ、あんた達……！」

「お、キミつて噂の美少女、西野つかさちゃんだろ？
ねえー♪ 触つちやっつたっ 手、やわらかーいっ！」

中坊とは思えねえくらい可愛い

「おー！　いーなーいーなー！　オレもさわつとこつと♡」

「あの！　用が済んだなら、離してくれろ!?」

「駄目だーめ！　離さないよーん。こーんな幸運逃したら、罪つてもんでしょ?」

「噂は訊いてたしね。すつげー可愛い子がいるつてさ?　それに　もう中学生はお家に帰らなきゃな時間だろ?　ちゃんと保護してあげないとなあ」

凄く、凄く不快だった。

こんなに触られるのつて不快だったんだつて　思った。

学校の男子たちなら、『離して』つて言ったら　ちゃんと聞いてくれるのに、この人たちは全然聞いてくれない。

凄く……凄く、怖い。……怖い。

「(こわい、怖いよ……　助けて、……助けて……つ　れ、れん……)」

目の前が真っ暗になっていつてる。

逃げなきゃ、いけないつて判つてるのに……　掴んでる力が凄く強くて、振り払う事が出来ないよ……。

あ、あたし……　ど、どうなつちやう……の?　

「れ、れん……」

「んー?　なんだつて?　これからデートしてくれるつて?」

「おつ、マジで?? 嬉しいな〜! この辺ってあんま詳しくないし〜。案内してよ〜」
「れん……、れん……っ」

あたしは、ただただ 名前を呼ぶ以外できなかった。
助けて、つて、ずっと思ってた。 その、時だったよ。

「れん? 何それ?」

「……オレの事だよ」

「あ?」

後ろに、いたんだ……。

蓮が、来てくれたんだ……。

「その子と付き合ってたんの。オレなんだけど……。勝手に連れて言ったら困るな」

「はあ? 誰お前」

「つーかダメだろ。つかさちゃんは今オレらと付き合ってたの〜! 何? 彼氏? なら ちよつと彼女貸してよ。大事に扱うからよ〜」

「はあ…… つかか、中学生狙って恥ずかしくないのか? アンタら。……同学に相手にされないからって」

「ああ!!」

だ、駄目だよ……。あ、相手は2人、いるんだよ? あ、危ないよつ!

「何お前。舐めてんの？ クソガキ」

「つかさちやんの前にお前と遊んでやろうか？」

「……はあ 受験前に問題起こしたくないんだけど」

「なんだお前。ビビっちゃった？」

「はっはは！ 今更詫び入れたって許さねえぞ。オレらにケンカ売ってきてんだからよ！ 彼女の前でぼっこぼこにしてやんよ！」

や、やめて………！

「やめて………っ!!」

なんとか、声に出せたのに。ようやく、出せたのに。もう遅かった。あの男達があたしの手を離して、行ってしまったから。心臓が締め付けられるような感じだった。とても苦しかった。

でも、もつと 驚いたのは その直ぐ後だったんだ。

「ぶわあっっ!!」

男の顔に、何かが、水か何かが掛かって、仰け反ってたから。

「ったく……、折角買ったコーラだつてのに」

「てめっっ！ 何しやがる!!」

「ん」

蓮の方に、もう一人の男が飛びかかった……のに、飛びかかった方の男がひっくり返っちゃった。

「ぐええっ!」

「ぎゃああ!!」

丁度……顔に何かが、コーラ……かな。それが掛かった男を巻き込んで。

それで直ぐに蓮があたしの方に駆けつけてくれた。

「ほら。今の内。走れるか?」

「え、あ、……あ、あたし……っ」

頭ではわかっても 行動する事が出来なかった。そんなあたしの事、判ってくれたのか。

「ちよつとゴメン」

「え…… きゃあっ!」

蓮があたしの事 抱えたんだ。

「ちよつと揺れるけど、我慢してくれ。ちよつといたら この先に交番あるし。あ、店員さん。110番も宜しく。何かあったら 証言してくれると助かります」

「え、えと。は、はい! 判りました!!」

気付かなかったけど、コンビニの店員さんが 外に来てくれた。遠巻き、だっただけ

ど。女の人だったから、それも仕様がな、よね。だって、あの男達があの女の人を狙う事だってあるかもしれないんだし。

でも、その心配はなかったよ。

「け、けいさつはまずい!! 行ってえ……っ　こ、こしうった……」
「に、逃げるぞ!!　うげっ、ま、前が見えねえ……!」

さっきの男達、へっぴり腰でよたよたと逃げていったから……。

23話

人通りがそれなりに多い場所について、とりあえず一安心だろう。

さっきの連中も逃げていったみたいだし。

「大丈夫か？ 西野。無事でよかった」

「……………」

西野の事、何とか助ける事は出来たけど あれから西野はずっと黙ってしまっている。

当然だと思う。……あんな目にあつたんだから。

そんな西野を見てたらやつぱり罪悪感が凄く出てきた。だって切っ掛けが オレがコンビニに寄つたからだから。

「その…… ごめんな。オレが寄り道しないで 真っ直ぐ帰っていれば……」

オレは西野に謝ったよ。ちゃんともう一度謝ろうと下ろそうとした時だったよ。

「れん……、れん……っ」

離したくないって言わんばかりに西野が、オレの首に手を回して　ぎゅつと引っ付いてきた。

……いい、幾ら非常時だったとしても、罪悪感がメツチャあつたとしても、これは……いい、色んな意味でヤバかった。段々思い出した、と言うか実感してきた。

オレ　西野を……抱いてるんだって。へ、変な意味じゃないぞ??　でも、オレだってれっきとした男なんだから仕方ないって!

「あの、に、にしの?　そろそろ……降りない、か?」

「れん……れん……　こ、こわかった。こわかったよ……　あ、ありがと……ありがと
う」

ずっとずっと抱き着いてきてる。

抱き抱えた時は　あまり意識しなかったんだけど、今　西野を全身で感じる……。西野の体温や耳元で囁くように言ってるから吐息もはつきりわかる。

つまりすげえ恥ずかしい!　……それ以上どう表現していいか、わからなくて……と、と言うか何か考え続けてないといけなかったんだ。

「(だ、だって　理性……跳ぶ、かも……だし。やっぱり凄く柔らかい……)」

やっぱり、と言うか、……まあ オレは姉に何度も抱き着かれたりしてるから、それなりに女の子の柔らかかさと言うか、感触と言うか その辺の事は大体判ってたつもりだったんだ。

でも、西野は今までのとは違った。……やっぱり、初めて好きになった女の子だから、だと思う。

でも……。

ひそひそ……………。

—— やあねえ……、最近の子供は。

—— 節操つてもものが最近のこつてないのよねー。

—— こんなところでイチヤイチヤしなくても……。

—— 見せつけやがって……！

だんだん周囲の目がきつくなってきたよ。痛いくらい視線が集まってくる。

何か 鋭い視線と言うか殺気と言うか、嫉妬染みたものも感じるけど、今はそれどころじゃない。早く逃げたいからここから。

「っ…… 西野、走るからな！」

「れん……れん……っ」

オレは 正直少しばかり疲れていた。あの連中を上手く撃退できたのは良かったけど、やつぱり、身体は疲れてたみたいだし、西野を抱えてきたから、って言う理由もあるかな。

でも火事場のバカ力が出たみたいでしっかり走れた。

あ、一応言っておくけど 西野が重いから……とかそう言うのは無いから。と言うか、そんなの考えられないから。ただただ……柔らかかった、とだけしか……。

後 何処に行くかとかは考えてなかった。第一この場に居続けるのも無理だし、それに今の状態の西野を下ろすのも無理だ。走ってる間も西野はオレにずっと強くしがみついていたから。……その、恥ずかしいけど 西野は今オレを求めてくれてる。怖かったって事だって理解できる。……それなのに、それを無碍にするなんてできないから。

それで 何とか人が少ない場所、日も落ちかけてる黄昏時って言う時間帯の公園につ

いた。近所の子供達が沢山遊びまわってる場所だけど、流石に今は誰もいなかったよ。でも もしもつて事だつてあるし、さつきみたいなになつたら嫌だから、遊具のひとつのドームの中にとりあえず避難したよ。西野もさつきと比べたら大分落ち着いたみたいだし、一安心だ。

西野を抱き抱えるのは 今考えても凄く恥ずかしい。……でも、名残惜しかったりする。下心はない、とは言わないが それを掻き消すくらい西野の身体 とても柔らかくて、何だか心地よかつたから。

「西野。大丈夫か？ 落ち着いた？」

オレは 座つて前をじつと見つめていた西野に話しかけた。

その言葉に反応したみたいで、西野はゆっくりとオレの方を見た。

「……蓮」

「ん？ どうした？」

「……さつき、『ごめんね』 って言つたよね？」

「ん……ああ。だつて あのコンビニ。オレが寄ろうつて言つたから。そのせいだ。ああ言うのがあるなんて思わなかつたけど、切っ掛けは オレ……だから」

そう言つたオレが 今度は西野みたいに顔を俯かせたよ。言葉にすると より実感してしまふんだ。

もしも…… 相手が大人で、車でも乗ってきていて 西野をそのまま連れ込んでしまったら？

考えるだけで怖かったよ。……本当に。

オレでさえ それだけ怖かったのに 西野本人は比べ物にならないくらい怖かったと思う。

そんな時だった。風が吹いて、外の冷気で少しばかり肌寒かったんだけど、頬が凄く暖かくなったのは。西野の手が、オレの両頬を挟み込んだんだ。

「……あたしはさ、『ありがとう』って言ったんだよ。蓮があたしを助けてくれたから、あたしは無事だった。悪いのはさっきの男達！……だから、蓮に謝ってほしくない。何度も言うけど 悪いのは、さっきの人達だから。蓮は、何一つ悪くないから。……だから もう一度……だけ言うね」

西野は目を瞑って 額をオレの額に、当てた。

「ありがとう。……蓮。助けてくれて、うれしかった……。ありがとう」
「……………」

言葉が出ないって言うのは こう言う時の事を言うんだろな。

さつきまで罪悪感で押し潰されそうだったんだけど、何だかいつの間にか……消えてた。消えたのを実感したと同時に、また改めて西野が本当に無事でよかったって思え

た。それと同時に安心感が凄く出てきたよ。

「よかった。……無事で、良かった」

オレは 西野に身体を預ける様に、額を付けるとそつと目を閉じた。

「それでさー、蓮？ あたしと付き合ってるって本当なのかなー??」

「うん？ 何の事？」

すつかりと調子を戻した西野。

本当に良かったとは思うけど、何言ってるのか判らなかつた。別に恍けてるとかさんなのじゃなくて、本気で。

それを多分西野も感じ取ったみたいだ。凄く頬を膨らませてるから。

「なんだよそれっつ!! あの時、テキトーな事言っただけ言うのっ!!」

「??」

「本気で判らないって感じ!! 無意識っ!!」

「ええつと……」

「う、うう……」

西野は 怒って頬を膨らませていたけど、今度は少しずつ顔を俯かせてた。

「蓮、言ったもん。『その子と付き合ってるの。オレなんだけど、勝手に連れて言ったら困る』って、言ったもん」

「……………!!」

「言ったもん!!」

「い、言ったような 言っていない様な…………。言ったつけ???『言ったもんっ!!』わ、判った判った!!」

「あ、ああ。言った、…………かも」

「なんで、『かも』なんだよっ! あーんな恰好付けて言ってた癖にっ!」

「いや…………、ほら あの時オレも結構テンパってたから…………、正直細かいトコ、覚えてないんだよ…………」

「え? テンパ? そうなの?? 自信満々に堂々としてたって感じたけど。今思い返してみればさ」

西野が言うのも仕方ないかも。だって表情豊かじゃないって言われた事は何度かあるんだよな、オレ。

でも 思いつきり感情を表情に出すのは、…………やっぱり 身近の連中だけだから。

「それに、蓮ってすっごく強いんだね? 相手高校生っぽかったじゃん。ひよつとしたらもつと上だったかもしれないし」

西野にそう言われて、オレは慌てて西野に言い返したよ。

「つ……悪い西野。それ見たの、ここだけの話にしてくれ」

「え？ ……つて、蓮そんなのばっかだね。お姉さんの事もそーだったしさー」

なんだかジト目で見てくる西野。

それも仕方ないかもだけど、これも姉ん時同様、しようがないんだ。これもバレたら結構大変だから。

「いや……、折檻されるかもしれないんだオレ。小さいころから 祖父の道場で合気習ってて……、それ 外で使ったって事がバレたら。(バレる訳ないとは思うけど……)」

「え……？ ええ!! 蓮って武闘家だったんだ!？」

「い、いやいやいや。そんな大それたもんじゃないつて。オレ、職業中学生だつて。これも昔ちよつとあつて、オレの爺ちゃんのトコで色々と教わつてたんだ。……でも、外では使うなつて言われたから」

勿論理由は判るよ。

ほら、プロボクサーとかが一般人を殴つちやいけない、のと同じ事だ。力に酔うような事にならない様に、つて何度か爺ちゃんは言つてた。

「……蓮。後悔してる?」

「え？ 後悔?？」

「うん。……お爺さんから教わったもので、あの男達にひよつとしたら怪我させたかも
しれない事」

「……ぜんっぜん!」

「ふふ。助けられたあたしが言うのも 変だけど。蓮がそう思ってるなら、大丈夫だと思
うよ。蓮のお爺さんも絶対に怒らないって思う。だって あたしを助けてくれたか
らさー!」

「あ、ああ。確かにそうだ。ふふ。仮に折檻されたとしても、オレは堂々としてると思う
よ。……西野の事、助けられたってな」

「つ……／＼／＼ う、うんっ! そーだよっ!! 蓮はどうどうと胸張ってたら良いの!
そして、助けてくれて改めてありがとうとおーっ! だよ!」

西野の良い感じの右ストレートが オレの頬を叩いた。

はは、と笑みを受けつつ オレはウインクを返したよ。

西野も、へへっ と笑う様に 白い歯を見せたよ。

それで終わるかと思っただけど……。

「そーれでー! 蓮はあたしと付き合うの?? ……付き合ってくれるの??!」

なんか、話を戻された……。あの時の事 ほんと頭から抜け落ちちやってるのに。

「え、えつとな…… 西野。あの時は多分、あいつらから西野の事を突き放したくて言ったんだって……。それにさ、西野。そう言うのって好きなヤツに訊くべきじゃないか？ ほら こんな状況で 気持ちが悪かったりして……。 ほら、吊り橋効果とかなんとかってヤツ？ もうちよつと落ち着いて「もうっ 落ち着いてるよ！」 っっ!!?」

……な、なに？ い、いきができない？

なんで?? なんで？ いきができない?? なんで、にしののかが おが こんなにそばに

??

なんで、くちにやわらかいかんしょくが??

「ん……、む……、んん……。ぶはあっ！」

「……………」

すこし、にしののかがおが、はなれた。でも まだにしのと……つながってる。

とうめいな いとがおれと、……。その、にしののくちびるに。

「あたしは、キミのことが……。好き。蓮のことがずつとずつと好きっ！ あたしを 蓮の彼女にしてください！」

それで にしのは あたまをさげた。

それで、ようやく……何が起こったのか オレは理解したよ。

……うん。西野に告白 された。いやそれどころじゃない。

『オレ、西野と……キス、したんだ』

それで 西野は頭を下げてる。オレの返事を待ってる。……凄く震えてるのは、多分怖いからだと思う。オレだって怖い。何倍も時間が長く感じると思う。その待ってる間は ずっと辛いと思う。だから震えてるんだ。

だから、オレは震えを止めてあげたかった。

西野の肩を掴んだ。

「っ……」

西野は 少し体を揺らせた。

それで、西野はゆっくりと顔をあげたよ。それと同時に、オレは行動したよ。

うん。ちゃんと告白の返事を返した。男として当然だ。

「れ……。——んっ」

オレは、告白の返事を返したよ。ちゃんと……、その唇にかえした。

24話

あたしがいるのは 自分の家。

もつと言えば 自分の部屋のベッドの上で寝転がってる。

「……………っ」

やっぱ、駄目だよ。

「~~~~っつっ!!」

ちよつとは落ち着けっ！ って自分に言いたいんだけど、どうしても 身体が動い

ちやうんだ！ 足が勝手にバタバタ動いて、傍にあつた枕をぎゅゅと抱きしめてる

！ 興奮を抑えきれないっつて感じだよ。

「れんっ…………… れんっ……………」

今日、あたしは蓮と……………キ、キスしちゃったんだから！

最初はあたしからで ほんと勢いに任せて、だった。

蓮の事が好き。まだ会ったばかりだつて言つてもおかしくないけど、時間じゃないもん。蓮は落ち着いて考えれば、つて言つてたけど あたしは蓮以外考えられなかったからさ。

それに、蓮も同じ気持ちだったのは ほんと嬉しかった。勢いに任せた一度目ははつきりと覚えてなかつたんだけど、二度目…… 蓮からしてくれた時は なんていうのかな、凄く気持ちよかつた。 あつつ、え えつちな意味じゃないゾ? 何と云うか 多幸感つて言うの?? なんて言えば良いわかんないケドっ ただただ 良かつたんだつて。

……蓮、キスが上手い とかだつたりするのかな?

それは兎も角 勢いに任せたのは良かつたケド…… やつぱり怖かつたりもしたかな。

返事、訊くまで 本当に。フラれちゃつたらとか 悪い風に考えてしまつちやつて。もし、フラれちゃつたら 前以上に蓮と会えなくなるつて判つてるから。本当に楽しかつたあの空間、あの時間が失つてしまうのが怖かつた。一秒が何十分にも感じられちゃう。あんな感覚、初めてで もう無いかもしれないかな。……心臓に悪いから あんなの味わいたく無いケド。

「はあー……。明日 どんな顔して会えば良いのかなあ……。あたし、蓮の顔見たら絶対顔真っ赤になっちゃうよ……。皆にもゼーったいバレちゃいそうだし……。蓮、そう言うの嫌がるかなあ やっぱり」

目立つの嫌！ って身体で表してる感じだし。その辺りは あたしも気を付けないと、だね。だって 蓮の……。か、彼氏の為……。だもんっ！
きゃーきゃー！ か、かれしだっ！ 彼氏、だっ！

「つつ〜〜！」

「ちよつとー つかさちゃん？ 早く寝ないと明日大変よ？」

「つつ!! ぐ、ごめんなさい！ お母さんっ！」

お母さんが 部屋に入ってきた。すごい、びっくりした。

足、バタバタさせてたから……。 伝わっちゃったのかな？ 振動とか。

うう き、気を付けないと。

「お、おやすみー」

「おやすみ」

お母さん ちよつと神妙な顔してるね……。

仕方ないのかなあ……。 漫画とか、映画とかじゃ 娘が彼氏連れて来たら、簡単に

両親って許してくれないのが定番だもんね。でも、そーいうのってお父さんじゃないのかな。一発殴らせろー！ ってヤツとかさ。

それに 蓮の事 更に好きになっちゃったんだ。あの時のお母さんと蓮の話、聞いててさ。

公園から帰る時だった。

凄く、遅くなっちゃったんだ。本当なら6時には帰れる筈だったんだけど あの事件があつて 時間は8時過ぎてた。携帯にも帰る時 かがつてきててね。

『お母さんからだ。ううーん。ちよつと遅くなっちゃったし、絶対怒ってるかなあ……』
あたしは、名残惜しかったけど 蓮とはここで別れようとしたよ。だつて お母さんは遅かったときとか、通りまで出て待つてくれてる事だつてあつたし。今日はお父さんは出張で帰つてこないから尚更心配してるだろうし。

何より、蓮と鉢合わせちゃうと…… さ？ その、まだ 心の準備が出来てないと思

うし。

『送っていくよ。家まで』

『え……う？』

そんなあたしの考えを全部判ってるよ、って言わんばかりに蓮はあたしが言う前に言ってたよ。

『理由はどうであれ、こんな遅くになってしまったのは事実だからな。ならオレにも責任はあるだろ』

『そ、そんな。蓮は全然悪くないじゃん！』

『西野がそう思ってくれてるだけでオレは十分だ。……でも、親はそうはいかないよ。オレ、自分の両親を見てるから尚更判るんだ』

蓮のお姉さんの事、言ってるんだって思う。

心配なのは心配なんだけど やっぱり 娘と息子じゃ ちよつとだけ違うんだって。

『つかさつ?!? こんな遅くまで何処に……』

それで、お母さんと鉢合わせしちゃったんだ。家の外にいたからさ。

家の中だったら 大丈夫だから、って帰って貰おうと思ってただけど、目もあつ

ちやつたし どう説明しようかな、つて悩ませてたら、蓮が前に出た。それで……深く頭を下げたんだ。

『本当に申し訳ありません。大切な娘さんを、こんな夜遅くまで……』

あたしは、突然蓮が謝りだして、びっくりした。お母さんもきつと同じだったんだと思う。えっ？ つて感じで 固まっちゃつてたから。

でもね。あたしは……。今回はあたしのせいだから。あたしのせいで蓮が怒られるのだけはどうしても嫌だった。最初は上手くお母さんを説得と言うか、聞こえは悪いけど言い訳をしよう、つて思つてたんだけど 頭を下げた蓮を見て テンパっちゃつて。

『れ、蓮は悪くないのっ！ お、お母さん。遅くなっちゃつてごめんなさい！ で、でも聞いて、蓮は全然悪くなくて、あたしを助けてくれてっ』

今思い出したら もうちよつと良い言い訳の仕方はなかったのかなあ、つて思うよ。友達と遊んで手遅くなって、門限超えてー つて事はした事あつて怒られちゃつた事もあるんだけど、男のコと一緒に帰つてきたのは初めての事だったから、仕方ないつて思うけどさ。

でも、どうしても言いたかった。『蓮は悪くない』つてお母さんに聞いて貰いたかった。

決してあたしを連れまわしたりして、遅くなつたんじゃない、つて。そんな簡単に信じられないつて思うけど、何度も何度も『助けてくれた』つて言つてた。

お母さんも呆氣に取られてたみたいだけど、多分冷静になれたんだと思う。あたしが思いつきり混乱してるみたいだから、さ。

『……はあ。お説教はまた今度にします。それで貴方は　つかさの友達かしら？』

お母さん。蓮の方をじつと見てたよ。

ここで、なんて返せば良いんだろう？　友達だよ　つて言えば良いのかな？　で、でも……　あたしは今日蓮と結ばれたから　ちゃんと伝えたいつて思つてたのもあつた。

それでもこんな遅くまで　その……彼氏と一緒に言う事を言つちやつたら……、いかがわしいつて思われちゃうかもしれない。健全に！　つて言いたいケド、その……キス、しちやつたし。

そんなあたしの気持ちを、また判つてるつて言つてるみたいなのに、そつと蓮はあたしの頭を撫でてくれた。

『私は神谷蓮と言います。つかささんとは　お付き合いをさせて貰つてます』

……は、はつきり言つちやつたんだ。あたし　凄く顔が赤くなつてるつて。一瞬でM

a xまで行っちゃったって。蓮が初めてあたしの名前を呼んでくれたってのもきつとあつたかもしれない、ね。

その後も続けて色々と言った。こんな形で本当に申し訳ないとかさ。つて蓮さあ……。キミは本当にちゅーがくせー(中学生)なのかつつ!! 留年してるんじゃないのっ!! 2く3コは年上なんじゃないのっ!! つて思いつきりツツコミたいな。今ならだけど。あそこまで丁寧に謝罪の言葉を口にして、お母さんもビックリしてたし。つて言うか思いつきり振り切ってたって感じだし! その辺はあたしも一緒だったからよく判つたんだ。

それで、あたしと言えば もう只管 『蓮は悪くない!』ばっかり言ってたよ。うう……。 もっとしつかりしないと、だよね……。

最終的に、お母さんも許してくれたよ。遅くなっちゃった事も一緒にさ。

それで これからも健全な付き合いをーとか、受験勉強の妨げにならない様にーとか言つて。

まだ、お父さんの事もあるから クリア! つて訳じゃないと思うんだけど……。

「こ、これじゃまるで……りよ、両親に紹介して…… け、けっこ…… くくっ／＼」
やっぱりダメっ！ 考えれば考えるだけ顔が赤くなっちゃう。
ちゅーがくせいっ！ ちゅーがくっ!! ぜったい早過ぎだろっ!? って自分で自分
にツッコミ入れそうだけど……それ以上に嬉しいんだ。
だつて…… もう、今は蓮以上の人なんて考えられないもん。 蓮以外となんて、考
えられないから！

「うう……ダメだつ 今日、寝られそうにない……よ……」

気が付いたら家について、遅くなった事をちゃんと謝って、……それでベッドの上に横たわった。

オレは、色々と知ってるし、何度か見たんだ。

男女関係での失敗談……じゃないけど、姉の住む世界での例を何度か悪い例を、極端なものからちよつとしたものまで。

姉自身から聞かされた事だつてある。『蓮はそんな風になつちやだめだよ!! 私をそんな風にしないでよ!』とか何とか言われた事だつてあつた。……弟に何言つてんだつ

て今でも思うケド。

だからこそ、嫌悪感だってあった。好きになつて 結ばれて……なのに なんてそんな事が出来るのか、つてき。所謂浮気とか、そう言う感じの裏切りだ。男も女もどつちの例もあつたよ。一般的じゃなくてちよつと特殊な世界だし 仕方ないのかな、とも思つた事もあるけど、それでもそんなの嫌だつた。反面教師の様に思つてた。 当分は無いつて思つてたけど、もしも オレに好きな人が出来たら ちゃんとしようつてずつと思つてた。祖母ちゃん 祖父ちゃんにも色々と鍛えられた？ し。

「……それでも、考えてたとしても 実際にするのとはやつぱり訳が違つた、よな……」
まだ、脚が震えてる気がする。

帰る時、西野と別れる時までには何とか我慢できた……気がするケド、見えなくなつた、見えない場所にまで行つた瞬間、どつ！ と押し寄せてきたよ。そこから暫く動けなかつたくらいだし。

「ちゃんと……言えた、よな。ちゃんと、できた……よな？」

誰に確認する訳でもなく自分に言い聞かせる。

本当にちゃんとできたのか、その答えはきつと……、その、本当の意味で西野と結ばれるその時にはつきりするだろうな。何年後になるか判らんけどさ……。

「……オレからは絶対ないかな。別れたいとか、嫌つたり、とかさ。きつとずつと西野

ただだ。ずっと西野だけ……」

うん。そう思う。……西野も同じだったら凄く嬉しい。

「あ…… オレ西野の事 つかさつて呼んだんだったなあ。……明日からは、どうしようか」

そもそも、まともに西野と話出来るのかな、つて心配にもなるな……。顔に出ないつて言われるけど…… 内心オレだって 心臓バクバクなんだ。

「……寝られない、かもな。今日は……」

25話

ほんと、昨日はいろいろとあったんだけど…… これからの学校生活。もう短い学校生活で、もっともつといういろいろ起こりそうな気がして気が重いよ。うん、マジで。

西野のお母さんに謝ってた時は 色々と緊張してて意識レベルまでシャットアウトしかねないレベルだったから まあ 大丈夫？ だったんだけど、流石にこれはなあ……。

『おい 知ってる？ 西野つかさに男ができたってよ』

『マジ!? ウソツ!? 誰だよ！ 相手は!!』

『4組の神谷だつて。……神谷ってそう言うのに全く興味示さねえって思ってたのによお……』

『マジでっつ!? 大草とかならまだしも、あの神谷が西野をおとそうとしたっての？

てか、落した!?』

『何でも、襲われてた西野を助けたー、とか。西野の前で華麗に不良をKOしたー、とか

いろいろと噂が上がっててさあー』

もつとさあ、色々な話題を話せよ。中学生諸君よ。

なんで、その話題一色なんだよ！今は受験シーズンだぞ！もつと勉強の事とか……いや、勉強ばつかで詰まんないんだつたら、ほれ、芸能人とか 話題の新曲とか新作のゲームとかいろいろと欠かせないのがあるだろっつ！? クリスマスシーズンで出た新曲・新作だつてまだまだ断然現役なんだからよ！

「はあ……」

聴こえてくるから ため息が出るよ。滅茶苦茶。もう 廊下に出たくないな。めんどくさい。

「ひえーっ すぎえな……。もう皆して神谷とかの事話してるぜ。情報回るの早いなあー。つてか、何処からどこまでが本当なんだ？」

「うーん。正直眉唾な事が多いけどな。KOしたととか除けて。そんな事しなくても 西野も神谷にはずっと気があつたつぽいし、神谷の方もマンザラじやなさそうだったし。……つてか、オレはどつちかつて言うつと、さつきからずつと勉強しまくりな真中の方も気になつてるんだけど」

好き勝手言つてくれてる小宮山と大草。真中がいないなーと思つたら、今熱心に勉強

してるよ。スゲエ今更な気もするケド、しないよりは全然良い。英3を只管復唱してる。英語が壊滅的に苦手って言うてたから まあ 妥当かな。

「——オレ、アイツの考えてること全然わかんねえな」

「いやいや、結構単純じゃないか？ 真中もそうだけど、東城も結構勉強してるんだぜ？ 元々学力優秀なのに、更にさ。多分、一緒のトコに行きたいんだろうな。何か意気投合してるっぽかったし。付き合ってる感じじゃないけど」

「……ほんと、噂のいちごの美少女が東城だった、って事なんかー。それもわかんねえなあ。あ、ちよつと髪下ろして見てもらいたいな」

「……まー、真中がずつと言ってた、変態単語連発してた頃に比べたら断然マシだろ。こつちの方が健全、って思いたい。年頃だと言っても 大声出すのはダメだつて」

しれーつとオレは2人の会話に入ったよ。

周囲の声を紛らわせようと思つたから。

「んで、神谷。噂の程は何処までが本当なんだ？」

「……いやいやいや、なんでその話にする?? 真中たちの話だったんじゃねえの?！」

「気になるじゃねえかああああ!! オレたちのつかさちやんを搔つ攫いやがったんだからよおおおお!!」

「いきなり大声になんなよ馬鹿!! ってか、暑苦しい! 離れろ!! 抱き着いてくん

！」

さつきまで真中と東城の話にシフトチェンジしてたのに、オレが来た事で直ぐに代わった……。ちつとはオレの中の空気ってヤツをよんでもらいたいわ。

『うー……。西野さん相手じゃかなわないうねえ……。だって、神谷くんでしょ？ 大草くんとはちよつと違った魅力って言うか、落ち着いてて、大人って感じがしててちよーつと注目してたんだけどなあー』

『あ、そう言うコつて結構多いよ？』

教室でも廊下でも……。

ってか、オレって西野が言ってた通り……。人気ってヤツがあつたのか……。？ 気付かないオレが鈍い？ 今までこんな無かつたんだけど……。 気付

「大草。オレを隠す様にしてくれ。これからのボディガード宜しく頼むわ」

「なんでだよ！」

「木を隠すなら森だ。大草だつたら樹海レベルだろ」

「……止めてクレ。神谷テンパリ過ぎ。何かアホに見えるぞ。そんな事言つてたら」

……大草にそう言われたら グサツ！ と見えない槍が突き刺さる感じがするよ。

いや割とマジで。

しかし アホ姉が『蓮は絶対モテそうだから、しっかりと私色に染めとかないと!!』つて 結構言われまくつてて、それで所謂洗脳されたのか、或いはアホ姉の言葉だから、つて有り得ない有り得ないつて考えてた結果なのかなあ? そんなわけねえだろ。つて。

「ううううう…… それに神谷あ…… 朝だつて西野と一緒に登校してたの……
みいーたあーぞおー……」

「だから寄つてくんない! 化けモンがっ!!」

オレは 何かいつもの数倍くらいの大きさの顔面にして襲い掛かってくる小宮山を押し返した。

「それよか、神谷はどの高校目指してんの? 西野と一緒にのトコに行くんだろ?」

「ああ……。まあ、オレは一応ずっと泉坂に照準合わせてたからな。この辺ではあそこが一番だし。難易度的に桜海だけど、あそこは女子高だし。親は 基本的に放任主義なトコだから 何処言つても良いつて言つてるけど…… 近場だつて事もあつてやっぱ泉坂かなあ。西野は『あたしもそこにする!』つて言つてたから……」

「おーおー、お熱い事だねえー。良いねえー両想いつてさあー」

「うおおおおんっつ!! つーかーさーちやーんっつ!!」

「……………」

しまった……、普通に話してしまった……。今朝の事も知られて、色々と西野と話したりしてた事まで……。だって、大草自然に聞いてくるし。こっちも自然に返してしまつたよ。

周囲の目も、何だか痛く感じてきた……。

「はあ…… オレ、図書室行つてくるわ。ここじゃ身が持たん。勉強してた方が 全然有意義」

と言う訳で、ちゃつちやと用意して向かう事にしたよ。廊下じゃ嫌でも周囲の視線が感じるケド、図書室なら大丈夫だ。騒ごうものなら図書委員と顧問の先生から大目玉くらうし。……そもそも んな話するくらいなら 図書室くんな、つて話だし。

「真中に習つて オレも英語の復習でもするかな……」

図書室で教本とノートを広げて準備完了。

「関係代名詞1、2は問題なし。現在完了の継続と経験、完了方面も大体大丈夫だけど、とりあえずえそつちに力入れるか……」

とりあえず開始だ。

今更だけど 西野の事は大切。ちゃんと返事もしたし…… もう、流石に考えたくら

いじや赤くなったりはしないけど、ファーストキスまでした。それもお互いが初めてだった。西野の事を中心に考える事はやぶさかではない、と言うより 実は周囲に十二言われたって全然問題ない。

でも——、そればかり疎かにしてて、受験に身が入らなくなるのはダメだし、西野のお母さんにもしつかりと言われたんだ。学生らしくつつましくつてき。だから 本分の勉強にもしつかり力いれないと、だな。

——でも 登下校くらいは 西野がしたい事を優先させるよ。

《勉強4 西野5 今後の周囲の対応1》 程度の割合で頭の中で考えてた時だ。

「『彼女が夏休みにハワイで買った高級バッグは偽物だった』を英訳しなさい……??
んー、主語はバッグだよな……? バッグ??」

聞き覚えのある声が聞こえてきた。

「……あれ? 真中?」

「うー……英語難し過ぎ……って、神谷じゃん。なんでここにいんの?」

「いや、オレの方が早かったろ。来た時、そこ誰も座ってなかったし」

「あ、ああ。そりやそつか。集中してたから判らんかったよ」

「ほっほー、真中でも集中できるんだな？ 映画関係以外で。なかなか見直した」

「うるせつ！ オレは東城と約束したんだよ！ ぜってー同じ高校に入って映画作る！

って」

「おう。目標がある事は良い事だ。……だから頑張れ。あと、そこは使う文法があるだろ？ その辺も意識して覚えないとミスるぞ」

「へ？ そうだっけ？」

英語苦手な真中に判りやすく教えるのは難しい。でも、判らない相手に教える事が出来たら、その時100%自分も理解できている証明にもなるって、受験講師が言ってた様な気がするな。

「そうだよ。そーいう場合は関係代名詞を使うんでしょ？」

真中と話をしたら、もう1人入ってきた。

東城だったよ。

「こんにちは。2人とも勉強頑張ってるのね」

「ああ。東城も、だろ？ うーん。東城が来たなら オレ場所変えるかな」

「えっ??? なんで???」

「いや…… その辺は空気読めるから」

今の東城と真中の関係が判らんほどオレは鈍感でもない。……西野曰くオレは結構鈍感な面があるらしいけど、これくらいは判る。

「い、いやいやいや。今は勉強だろ?? 泉坂入れなきや意味ないんだし! 1人より2人、2人より3人だ! 誰しも苦手があるだろう?」

「そ、そうよ。無理して出ていくなんて……。わ、わたしが後から来たのに……」

「わ、悪かった。真中は兎も角、東城が悪い気がするなら、ここで勉強するって」

顔を赤くさせてる2人を見るのは 良いんだけど、なんか東城は段々罪悪感が沸いてる様な表情になっていつてるから 直ぐに改めたよ。

ま、ここは図書室。勉強する場所だし。

「映画を作る為にも、オレの目標は泉坂高校合格! あそこじゃねーと映像部ないんだし、勉強をするしかない! あ、そうだ。東城。さっきの話だけど、神谷も誘うか?」

「ん? さっきの話?」

「あ、うん。朝少し早めに学校にきて、朝の勉強会をしようって話! 今西野さんも勉強頑張ってるって聞いたから、皆でしない? 捗ると思うんだ!」

東城が身を乗り出しそうな勢いで薦めてくる。色々嬉しい部分があるんだけど、東城がそんな動きしたら……。

「きゃっ!」

ほら、なんで？　って思うタイミングで椅子から転び落ちたよ。それも顔面着地しける。

「と、東城!？」

「うわわっ！　大丈夫か、東城!?!」

すてーんっ！　と転んだから……、うん。……仕方ないよな？　これは……。女生徒はみんなスカートだし……。捲れちゃって、それを見てしまっても、オレらには罪はない。と言うより無罪だよな？　……っつか、最近こんなのが多い気がする。

うん……。今　東城のスカートが良い角度で捲れてて、中身がはつきりと見えてしまったんだ……。

それは、真中がズーっつと騒いでた柄のモノ。出会って熱くなった？　のを象徴する……　いちご模様の下着。

「だ、大丈夫。あたし、ドジだから……」

「……………」

「……………」

フリーズしかけたって悪くないと思う。

でも、ずっとこけたままなのはアレだから……。

「ほら。大丈夫か？」

反射的に手を差し出したよ。この辺は真中の役割だと思っただけで、オレの方が近かったし。

「あ、ありがとー。……うん、メガネ、割れてないよね？ ほっ…… 良かった」

メガネわれそうな勢いで倒れてたけど、問題ない様子だ。目が悪い人がこの時期に割ってしまうのは、正直最悪だった、って思うから その辺は良かったってオレも思ったよ。

それに、メガネだって馬鹿にならない金額するし。

「勉強中に倒れるくなんて事滅多にないと思うけど…… ま、気を付けろよ……って、いてえつつ!!」

東城を引つ張り起こした後、なんか背中に激痛が走った。

ほんと、いきなり。

「……こんなトコで、とーじょーさんとナニしてるのかなあ……蓮は」

振り返ってみると、笑ってるのか怒ってるのか判らない表情をした西野がいたよ。

忍者だ。全く気配を感じなかったし……。

メチャ痛い。でも、西野のその顔。笑ってるのか、怒ってるのか、やっぱ判らないけど……。

うん。やっぱどんな顔しても可愛いつてコトは判る。

……口に出して言わないけどな。

26話

背中……じやなく、脇腹かな。思いつきり抓られた。非常に痛い。

抓りつて 誰が誰にしたとしても痛い事には変わらないってどつかで聞いた事あるけど、マジで痛い……。西野は笑つてるのか怒つてるのか判らない顔してたけど、今は怒った顔になった。

「……って 早速浮気かつ!? 蓮っ! こんなトコで東城さんと2人つきりで!! ヒドイじゃんっ!」

「い、いやいや。なんで2人きり?? 真中いるだろ?」
「むーっ! ……ん? あれ?」

西野から死角になってたのか、或いは最初っから真中の事が眼中になかったのか、うん。今回のは前者だと思う。オレが言ったら 西野 はっ! としてたから。

「あ、ほんとだ……。 やっ 真中くん。こんにちは。あれから えつちな事、考えたりしてないだろーな?」

「ど、どーも。 って、 図書室で勉強してたんだから! そんな事してないって!」
「そっ、なら良し!」

多分真中がパンツパンツ連呼してた時の事西野は言ってるんだろな。

それにしても、真中の事に気付かなかったのは何でだろ？

今の西野が視野が狭くなってるからか。

そう言えば今思い出したけど、西野って今朝から結構な猪突猛進モードになってるからかな。

「——蓮？ 今変な事考えてない？」

「滅相もあります。……後、離してくれると嬉しんだけど……。メチャ痛い」

「あ、ごめんっ！」

西野は ぱっ と両手上げて放してくれたよ。無罪放免って事だろうな。……無罪は当たり前だ！

「西野さん こんにちは！」

「東城さん！ こんにちはー！ ……ん？ あれ？」

図書室ではもうちよつと静かにしようね？ とやんわり注意しようとしたら、西野なんだか東城をまじまじと見てる？

「え？ どうしたの？ あたしの顔に、何か？」

「やっ そうじゃなくて!! ほら、皆！」

西野が東城の肩をぐいっ と掴んで こちら側に向けたよ。

「ほら、やっぱり 東城さん、前髪下ろしたら凄くかわいくなったよ！ほら、絶対可愛いよね？ 真中くんも蓮も！」

西野が 笑顔でそう言つてた。

見てみると、倒れた時 メガネは割れたりしなかったけど 髪留めが外れたみたいで東城の前髪がおりてたよ。

西野に言われるまで気づかなかつたなーと言うより、倒れた東城をそんなマジマジと見れなかつたから仕方ないか。それに 直ぐに西野に抓られたし。

真中もオレ同様今気づいたみたいで顔を仄かに赤くさせて頷いた。

「……うん。オレも絶対そっちの方が良いと思う」

「ねー？ あたしが言った通りでしょ？ ほーら！ どんなんんだい？ 蓮くん?！」

「なんで西野がドヤ顔するのか、いまいちわからんケド。………んん」

「ん？ なんだよ蓮。不服でもあるの?」

「えふんっ……。いや そんなん無いって。オレもそっちの方が似合うって思うよ」

確かに東城はそっちの方（前髪を下ろした方が）良いって思ったけど、それ以上にドヤ顔西野も十分すぎる程可愛いよ、って思ったから ちよつとタイムラグ起こしたよ。口に出して言わなくて良かった。

言うのはやぶさかでもないんだけど、流石に皆の前で言える程 出来上がってない

し。

咳で誤魔化せたと思う。西野は怪しむ様子ない。良かった……。

「え、えと……。そ、そんな……っ」

東城は何か恥ずかしそうに顔を赤くさせてた。

「あ、そーだっ！ その、西野さんも一緒に勉強するのどう?? ほ、ほら 朝図書館で皆勉強しよーって話、してたんだけど」

「え?」

「3人より4人! みんなで勉強した方が楽しいって思うから!」

あ、東城 今強引に話題を逸らそうとしてるのがよく判る。

でも そうツツコンで 意地悪をするのもちよつとかわいそうかな?

「確か西野は数学苦手って言ってたよな? 皆で復習すれば効率も増すと思うぞ。オレは賛成だ」

「んー…… そうだね! あたしも混ぜて貰っちゃおうかな?」

「よっしゃー! これで数学も英語も怖くないぜー! (つてか、美少女2人と勉強つて、なんかメチャクチャ充実感もあるんだけど……。中3にして初めてだなー……)」

「ん？」

真中が何かすげえ感動してるみたいだ。何か涙まで流してるけど、そこまで好きになつたのか？ 勉強。

「な訳ないか」

「ん？ どうしたの蓮」

「いや、なんでもない。ほら、そろそろ休み時間終わるぞ。……この面子でまた遅れたら、次はもつと長くなりそうだ」

あまり思い出したくないけど、前の昼休み。盛大に授業遅刻して大変だった。勿論説教がな。

「あー、そう言えばそうだったねー」

西野は同調してるけど、オレは覚えてるゾ。忘れてないし。

「お咎めなしだったよなー、1人だけ！」

「えへへ……」

ぽこっ！ と西野の頭を一発ツッコミ入れたよ。

原因の1人って自覚があるのか、舌をべろつと出して笑つてた。

くそう…… やっぱ可愛いな。なんか簡単に色々と許しそうで悔しい。

「ふふ……あははははは」

東城も笑ってるし。

「つてか いつの間にそこまで仲良くなったんだ？ 神谷と西野」

「ええ!! ま、真中くん。2人の事 噂になってるんだよ？ 知らない？」

「へ？ 噂?？」

……アレだけ騒がれてたら当の本人でさえ耳に入るのに。真中は知らないみたい。それだけ勉強に力を入れてたのか。うん。素直にスゲエって思うよ。今だけは良い意味で。

「2人はお付き合い……してるんだよね？」

東城は 凄く恥ずかしそうにそう聞いてた。なんかこつちまで恥ずかしくなるくらいだ。

「あ、あはは……う、うん。そーだよ？」

西野も顔赤くさせつつ、腕を取ったよ。オレの。

……ここが図書室で良かった。それに今オレ達以外誰も利用してなくてほんと良かった。

「だ、だから 東城さん！ 蓮 取っちゃダメだからね！ 私、結構一途で、更に欲張りなんだからね!!」

「そんな事しないよー。ふふふ。おめでとう西野さん。ほんと、良かったね」
「つ……／＼／＼　う、うんっ」

うんうん。仲良さそうで良いな。

更に言えば　話題がオレ達の事じゃなかったら良かったんだけどなあ。今、オレ非常に恥ずかしい。西野、ほんとあれから一直線だから。ストレートに言ってくれるから。嬉しい事は凄く嬉しいんだけど　やっぱり恥ずかし過ぎて顔が熱い。

オレも　はつきりと西野のお母さんに色々言っちゃったから、『そんなのお互い様だもん！』って言われたけど……。うう　これ以上やったら顔から火が出そう……。

「うーむ。成る程。だからあの時、告白するの止めたのか？　神谷。良かった。オレフられると同時に赤っ恥かくところだった」

「……………」

後から聞いたら　真中にその後色々訊かれたりしたらしいけど、オレ全然覚えてなかった。

「へ、へへへ…… 朝、勉強会……。聞いたぞ、聞いたぞおお……。」

「面白そうな事になってるケド、女の子2に男4つてなあー。オレ達余りもんだし。惨めになるだけだと思おうよ？ 小宮山」

「聞いいたあああぞおおおー！！！！」

「ダメだこりや」

27話

今は夕方。

学校も終わって帰宅中だ。

あー、後明日の朝は早めに家を出ないといけないな。東城や真中たちと約束してるし、すっぱかすのは頂けないし。

それにしても朝の勉強会か。なんだか凄く新鮮な気がするよ。普段が普段な連中だから、勉強なんて全然考えてないし、話の話題にもなってなかったから仕方ないかもしれないだろうな。

それに『一緒に勉強しよう！』なんて この学校に来て初めての事だし。

「……ねー 蓮？」

「ん？ どうした？」

後 勿論、オレの隣には西野がいるよ。

『登下校は一緒だからね！ 1人で行っちゃダメだよ』

と言う事で一緒にいる。

勿論 一緒にいたいって思ってるのは西野だけじゃない。オレ自身も同じ気持ちだ。だから喜んで応じた。西野も笑ってくれてほんとに良かった。

そんな西野なんだけど、なんか難しい顔してた。明日の勉強会の事や受験の事でも考えてるのか? と思つて、もうちよつと続く様なら聞こうと思つた。

「あたしさー、とてもとても大変な事思い出したんです」

「……? 大変な事? それになぜ敬語?」

「そつ。大変な事! ねー あたし達付き合つてるんだよね?」

「あ、ああ そうだ。(敬語に関してはスルーね。……ん、でも 改めて聞かれると やっぱ恥ずかしいかも)」

でもそれは西野も同じだろ? と思つて顔見たんだけど、まだ何か考えてる仕草だ。

それで 次にばつ! と擬音を付けたくなる勢いで顔を上げると、指さされた。

「あたし! 蓮のケータイの番号知らないんだよ!!」

「……はい?」

「はい? じゃないよ! どーして 彼氏彼女なのに、お互いの番号知らないのさ!」

「おかしくないっ?」

西野 さつきから 何か難しい事でも考えてるなー、と思つたらそんな事か……。

「もう 蓮! 何だそんな事かー! つて顔してる!! 絶対大事な事じゃん! ……」

れとも蓮は 知らなくても良いの？ あたしの……」

思考を呼んでくれるのは やっぱエスパーだっけ思うな。

でも最後に そんな顔されたら 『別に知らなくて良いよ？』なんて絶対言えないし。てか言うつもりなんて元々ない。

だからさ オレは 言葉で言うよりも先に鞆から出した。もう速攻で携帯取り出したよ。

それにちよつと予想外だったのか、西野は 眼を丸くさせてたよ。ちよつとしてやつたりな気分だ。

「あれれ？ 何だか反応早いね？」

「ちよつとでも遅れたら『蓮なら 別に良いよ？ って言いそうじゃん！』ってさらに追いかち喰らいそうだからな。自己防衛ってヤツだ」

「おおー、よく判ったね？」

あはは、と笑う西野。どうやら読み通り 今までの表情から ちよつと大袈裟な言い方も狙ってたみたいだ。怖い怖いってか？

「これが オレのメアドと……番号」

「んっ ありがとーっ！ はい、これがあたしのだよ」

西野は 笑顔いっぱい。これくらいの事でここまで笑顔になってくれるなら お安い御用ってヤツだ。と言うよりさっさと交換しておけば良かった。うん。家とかで寝る前に電話して……とかさ。彼氏彼女だったら普通だよな？ うんうん西野が言う通りだ。

なんでしなかつたんだ？

………愚かなり神谷蓮。

「あ、蓮。この番号あたしの家族と蓮しか知らないんだからね？ 他の人に教えないでよ？」

でもそれも今日までって事だ。

初めて好きなコが出来て、好きなコと一緒になれた。

また オレの中で新しい扉が開いた気がするよ。

「おう。それオレからも言っとく。家族以外知らないから、オレもそれで頼む」

「あはははっ！ 蓮の番号だったら欲しがりそうな人多いもんね？」

「……その言葉もそっくりそのまま返すぞ。と言う訳で互いに色々と一致してるって訳だから、この約束は鉄壁だ。やぶれないし、やぶらない」

「はいー！ あたしも右に同じー！ ……これからもずっと訳にはいかないと思う

けど 今は蓮だけが良いから」

手をひよい、と上げた後、西野は小指をオレに向けた。

「ほら、指切り。約束だからね」

「——了解。約束だ」

がつちりと約束を交わしたよ。

その後は西野は携帯を鞆にしまって……オレの腕を取ったよ。逃がさないーって言わんばかりに強く。 ……逃げないって。

「んーっ すつきりした所で いこっ！」

「ははは。はいはい」

何だか凄く暖かかった。

寒空に丁度良い。心地良くて暖かい。心から笑顔になれる。

「あ、そうだ！ 先週の笑点みた?? 桂 歌丸最高だったよねー？ 円楽さんとの掛け

合いなんかほんつと絶妙で！」

「あー、そう言えば西野が好き芸能人って桂 歌丸だったって言ってたな。 ……アレはあの2人ならではのやり取りだろうな。座布団1枚じゃ足りないって思った」

「でしょでしょ?? う〜ん 蓮なら判つてくれると思つたよ!」

楽しそうに話すのは笑点の話。

勿論色々と業界の事知つてる。(流石に まだ話したりはしないけど)

それとなく会つた事のある人だつて多いんだけど…… 流石にそつちには姉は呼ばれてないし、付き合いもそこまである訳じゃないから 笑点のメンバーの人とは会つた事は無い。 会つた事は無いけど 西野と同じく母さんが昔から好きで 家では大體TV番組かかつてるから、それなりには判るつもりだ。

でも、初めて西野に聞いた時は『渋いな』、つて思つたのはこつちの話。

笑点の話で良い感じで盛り上がつてた時だ。

「あたしのお母さんもねー笑点が……つて、あつ! そうだ。お母さん、蓮にまた会いたつて言つてたよ?」

「んん?? 何でまた。 オレ……何かミスつたのかな……? 確かにやつぱり緊張してたし……」

「へへー(あれで緊張してたんだね……。絶対ポーカーフェイス過ぎだつて) そんなんじゃないよ。 ちょっと落ち着いてねー? 蓮つて元々有名人だつたけどさ! 更には有

名になっちゃったみたいなんだ」

「……はい？」

何言ってるの？ って素で思った。西野に対しては沢山そう思ってきたけど 過去最大級かも。その後に教えてもらった内容が過去最大級……。

あれはね、蓮の彼女になれた次の日だったよ。

やっぱしちよつと、ぎこちなかった気がするけど、何だか見える景色がすつごくキラキラと輝いてる気がした。恋すると、大好きな人と通じ合えると、ほんとに変わるんだね……。つて言うのがあたしの感想だったよ。とてもくすぐったくて、それでいて心

地いいんだ。

『つかさ。神谷君の話だけど』

そんな浮かれてるあたしの事　しつかりと見抜いてますよ？　　つて言わんばかりにお母さんが蓮の話を始めたんだ。

『え？　……蓮の事？　どうしたの』

あたしはちよつとドキドキしてた。

あの時　お母さんは許してくれたのは間違いないんだけど、やっぱり反対だ！　　つて言いだすのかな、つて。中学生が早過ぎだ、つて。お父さんも許してくれなかったりしたら、更に大変だし。

でも、何言われてもあたしは蓮の事諦めるつもりないから。

そう身構えてたら、お母さん笑ってた。

『今度ゆっくり話したいわ。……ちやんとお礼を言わないといけないコなんだから』

『……へ？　お礼?!』

予想外だったよ。お礼を言うつて。

だって　お母さんには　ずっとずっと謝つてばかりだったからさ。あたしも……それに蓮も。

『ふふ。色々と訊いたのよ♪　なんだか羨ましいわーつかさの事。今時、そんな風に助

けてくれるなんて中々あるもんじゃないわよ?』

『……えっ?』

『蓮はあたしを助けてくれたの』ってほんとそのままの意味だったのね。ふふ。私も神谷くんみたいに助けてくれるかしらね? お父さんは。……それは兎も角』

お母さん あたしの目を真っ直ぐ見たよ。

『つかさはしつかり者だつて事は判つてる。でも、つかさが襲われそうになつたつて話を聞いてさ。……本当に心配したよ。それにそれ以上に神谷君には感謝しかないのよ。大切なつかさを守ってくれてありがとうつて。だから……』

お母さんはニコつと笑つた。

『また、連れてきてね? 未来の私の息子をさ』

『っつ／＼／』

でも 流石に、最後の辺りは ちゃんと聞けなかつたよ……。

西野から色々とは話は聞いた。

「と、言う事があったんだー。どうもね？ コンビニのあのお姉さんって 近所に住んでる沖田さんだったんだねー。蓮の事すっごく印象に残ったって言うか、その……か、格好良かったとか何とかって。沖田さんだけじゃなくて、店長も直ぐ傍に住んでる人で…… それであつという間に広まったんだって」

「……………」

うん。西野のお母さんにそう言ってもらえるのはとても嬉しい。感謝してくれてるって言われて、嬉しいけど やっぱり なんて言われても西野が襲われそうになった原因の1つは自分にあるから 素直に受け入れるのは難しいかもしれない、かな。

でも、それ以上に……。

「……広まった？」

「あー……うん。で、でも 大丈夫だと思うよ?? 蓮の名前は言っただけだから！」

「……………」

「うー…… そ、そうだよね? ……ゴメン。蓮はそう言うの嫌いだったんだよね……」

確かに、西野の言う通りだ。

姉の影響からだって自覚してて、色々と騒がれるのは苦手だ。

でも、苦手であって嫌いだって訳じゃない。

それを言えばもつと嫌な事だつてある。

「大丈夫だ」

「え?」

西野が悲しそうな顔してるのを見るのが嫌だ。それが自分の事であるのなら尚更。

自分の中での色んな順位なんて、あの告白した日から総入れ替えだ。

「何でもない事だつて。西野を助ける事で出来て、一緒になれて。その代償? つてのがそれなんだつたら 軽過ぎ」

「そ、そっか!」

よし、笑顔に戻ったな。

色んな顔、西野はどんな顔してても可愛いってずっと思ってるけど、やっぱり笑ってる顔が一番だ。

「それにしてもなあー 平凡は、いちごと共に、消え去るよ。ってか？」

平凡を目指して頑張った？ けど。あの屋上での出会いから全部ひっくり返ったって事かな。元々 オレの事噂されてたみたいだけど、それもあの出会いがきっかけだっ
て思ったたりしてるよ。

「ふふっ 何詠んでるの？ ……んん？ ちょっとまって。いちごとってどー言う意味??」

「あー いや。何でもないさ。西野との出会いは衝撃だったなーってだけ」
「もーっ！ え、えっちなのはダメだぞ！ ま、まだ早いつてば!!」

過去よりも今を大切にする。

それが今後の抱負ってヤツかな。

28話

と言う訳で 今は翌日の早朝6時。

オレは ここまで早く起きる事はあまり無いし、部活とかも今まで入ってなかったから朝練つて言う習慣もない。

だから、結構家族にぎよつとされた。そんな遅起きじゃない筈なんだけど。

「もー、言つておいてくれたら 蓮の分もちゃんと用意するのに」

「あ、母さんゴメン。大丈夫だつて。何か買つてくから」

「育ち盛りなんだから コンビニとかで済ましちやダメでしょ？ ほら まだ時間ある

？」

「えつと……うん。まだ少しなら」

「はいはい。ちゃんと朝ご飯作つてあげるから。しっかり食べて行きなさい。何かあるのかは聞かないけどね？」

色々と察したのだろうか……？ 母さんはキッチンの方へと行つてくれた。いや、本当に反省だ。昨日言つておいたら良かったのに、完璧に忘れてたから。

うん……。反省するケド…… 何か感じる。さつきから何か感じる。

肌寒い朝なんだけど、太陽はちやんと出てるから、仄かに暖かさだつて感じる良い朝だつて思うのに、何処となく異常な冷気。……いや、妖気？ みたいなのが。

『……………蓮、最近おかしくくない？』

原因は絶対アレ。

全国ツアーとやらの真つ最中の癖に 事ある毎に舞い戻つてきては また戻つてく。メチャ凄まじいバイタリテイの持ち主。そこらへんの芸人さんの体当たり企画とかより数倍は疲れそうな事してんのに、全くおくびに出さず、おまけにこのオーラ？ を出すと言う特技まで発動させてる。おまけにエスパー。

「……………なんか、あつたでしよ？ ……フラグ的なのが」

「かーさん。そろそろ行きたいんだけど、まだ？」

「何言つてんのよ。まだ一分も経つてないじゃない。しつかり食べないと大きくなれないゾ？」

「いやだつて、家の中が異常に寒くて……。まだ外の方が良いかな？ つて。早く出たいてすげー思つて」

「あらあら」

「ここで漸く母さんも気付いたみたいだ。姉の妖オーラ気キに。いや、妖気オーラにと言うか 視覚的に姉を見つけたらしい。」

「愛ちゃんももうご飯食べるでしょ？ 今日はまだ飛行機で戻るって言ってたけど」

「……………」

「おーい、愛ちゃん。お母さんの事無視するの、なんか寂しいし辛いナア」

「……………あ、ごめんごめん。ちよつと考え事してて」

何か姉の様子が変わりだした切っ掛けでどう考えても、オレが…… その、西野と一緒になれたからだって自覚がある。そう言うの読んでくるのがマジでヤバイんだ。

でも流石にオレの事 尾行とかまではしてない。そんな事したら、オレが本気で怒るって判ってるから したくても出来ないって言うのが正しいかもだけど。

でも、なんか今日は更にハイテンションな様子だ。

「今日は蓮と一緒にいるっ!! がっこーについてく!」

怒るの判ってる癖に、何かまた無茶な事言い出したから。

「何馬鹿な事言ってるの愛ちゃん。もう中学は4年前には卒業したでしょ?」

「そう言う問題じゃないって、母さん……」

「行くのっっ!!」

「ダメだろ！　つか、時間的に無理だろつて！　飛行機！　搭乗時間！！　流石のオレもこれ以上困るマネージャーさん見てられんわ！」

ひいひいとさせてる　悲壮な感じなマネージャーさんを度々見る事はある。

因みにマネージャーさんは女性であり、オレにとつても姉にとつてもお姉さんの様な存在。

優しいし綺麗な人で　ほんと弟のオレから見てもスゲエ手のかかる姉を妹の様に面倒を見てくれていて、更には多少な我儘は大目に見てくれる。……というより必死にフオローしてくれてるの方が正しい。

でも流石に今回レベルのはダメだ。

姉もやってるけどそれ以上にオレがTVに映らない様に、というかメディアに露出しないように色々とお力添えをしてくれてるのもマネージャーさんだし。オレも出来る限りはフオローしたいって思ってる。

姉が暴走する原因の大体がオレ関連だから。

「……だって、蓮怪し過ぎるもん」

「なんでオレが怪しいんだよ！」

「それに構ってくれないし……」

「アホな事以外は普通にしてるだろ？」

「抱きしめてくれないもん……」

「それは常にせんわ！ アホ！」

朝から頭が痛くなるような会話をしている内に……気付けば6：25

「ツ!? やばっ」

一応約束では『6時半くらい』にだ。

正確に6時30分って言っていないから、言い訳の余地はあると思うけど……そう言うのはしたくない。

「母さん！ パンだけで良いから!! ゴメン」

「もー しかたないわね……。はい。あまりがつついてのどに詰まらせない様にね?」

「ああっ! 蓮っ!」

「はいはい。愛ちゃんも時間圧してるでしょ? 早くご飯食べちゃって」

「ぶー……」

朝からほんと疲れる。

こんなのが毎朝あるのは正直辛いかもだ。色々考えとかなないと、だな。西野のこととかも勿論……。ちゃんと早めに話した方が良いのかな。

今時の中坊がわざわざ付き合ってる事を親姉弟にカミングアウトとかするか? つ

て思うケド 姉の暴走は正直頂けんし。でも今は早く向かった方が良いって事でオレは更に急いで家を出た。

それで 何とかダツシユして待ち合わせの場所に到着。

待ち合わせ場所、あまり遠くなくて良かった。

「ふああ………つて わっ！ びっくりした!!」

「ふあっつ!」

一息つこうと思つてたら、曲がり角から丁度西野がやってきたんだ。

何と言うベストタイミング! と言わんばかりに。おかげで変な声出たし……。

「おつはよ……… うーん、あたしとしては蓮の事待つつもりだったんだけどなあー

……ん?」

「……はあ、はあ、つて いやいや 時間指定してるのに 相手待たすのは不味くないか

? それ普通に遅刻つて事じゃん」

「ふふ。でも 待つてる時間も楽しいかもだよ? あーでも、頑張つて走ってきてくれ

たみたいだから、それ以上に嬉しいかな?」

上がつてる息や汗を見て、西野はオレが走つてきた事が判つたみたい。

……ここまではあはあ言つてたら判るか。ほんと到着したと同時だったし、息なんか整えられないし。

「ふう……。そりや 男の方が遅刻するなんて アレだろ？ 幾らあいまいな時間指定だったとはいへさ」

「へえー。蓮も恋愛系のドラマとか漫画とか見るのかな？ かな?? ほーら、可愛い彼女が『ごめん、待った?』つてきたら『いや、オレも今来たばかりだから』つて返すシーンを思い描いてたでしょ?」

西野は、オレの胸の部分に 人指し指を当てて笑つてた。

確かに 王道ではあるがそういう類のドラマや漫画は見た事がある。というより、姉が出てくるドラマとかは基本家がかかっているし。

そう言うドラマとか漫画の中じゃ純愛でエンディングを迎えるのが多いけど現実じゃえげつなかつたり、ドロドロしてたり、つて言うのもよーく知ってるから、あまり変な想像とか、理想をもったりはしてない。

だから、これはあくまでオレの意思だ。あまり西野を待たせたくないつて言う、な。

オレは 違う方向で西野にカウンターを入れる事にしたよ。

「……ははは。でも西野。自分で自分の事を可愛いつて言うか？ まあ、オレは全く否定はしないけどな」

そう。その辺だ。可愛い彼女がくっついてシーンを当てはめてるし 遠回しに言うてるって事だと思うのは当たり前だし。

んで、勿論可愛いって部分は否定しない。それを真顔で言えたよ。

なかなかナイスな感じで平常心を保ちつつ返せたから 西野は顔を結構赤くさせてた。

「つ／＼／ も、もうっ！ 言葉の綾だよっ！ ほら、いこっ！ 皆待つてるかもだし！」

「つとと、OKOK」

照れ隠しだらうな。オレの腕を取ってさつきと前を向いて歩きだした西野。……それにしてもやっぱり結構力強いな。いつまでも引き摺って連れて行って貰うのもなんだから さつきと西野に合わせたよ。隣り合った。

……今日もまた、始まるんだらうな。新しい日がって思う。

口にはぜーっつたい出さないけど、そんな感じで割りと思ってるから オレもたまに自分の事変になっちやったか、と思ったりしてるよ。恋して変になった。って所か。

うん。似たような漢字だし。

「……面白くないか」

「うん？ 何か言った？」

「いや。何でも。……ほら、マフラーズレてるぞ？ 首元寒いだろ？」

「わっ！ ……へへっ ありがとう」

マフラーをかけ直してあげて、西野は笑ってて……。うん。メチャクチャバカツプ
だ。オレ達。

「……………」

「い、今更顔赤くしないでよ」

「あ、いや、……うん すまん。がっこーでは自重するから。それでも良いよな？」

「うーん…… ま、しよーがないかな？」

許してくれてよかった。

こんなの、学校でもやってたら それこそ大変だ。小宮山みたいなのが 増えてきそ
うな気がするし。

それで学校には無事に到着。

朝早いからか誰にも会う事なかった。校門をくぐって学校の玄関、下駄箱の前で2人
に会った。

「2人ともおつはよー。みんな早いねえ。あたし達が1番だと思ったんだけどなあ」

「おはよう。西野さん。神谷くんも」

「はよー」

東城と真中の2人。東城は兎も角、真中がここまで早いとは予想してなかったな。

「あつ！ わあー 東城さん！ 今日の前髪おろしてるんだねーっ？」

西野は 東城の髪型を見てにこつと笑って頭撫でてた。オレも結構西野の事撫でたりしてるけど、あれってやる方もなんか気持ちよかつたりするんだよな……。女の子の髪つてすぐくサラサラで気持ちいいし。…………絶対口にださないよ？ この辺も。そんなフエチない。

「あ、あはは…… 恥ずかしいわ。なんかその気になっちゃったみたいで」

「ううん。ゼーったいこつちのが可愛い可愛い！ 自信もつて！」

「ありがとー 西野さん」

「…………なんか絵になるよなあ。学園1の秀才と美少女が並んでると…………」

「変にトリップするなよ、真中。今からベンキョーするんだからな」

「わ、わーつてるって！」

ぼーつと2人を見てる真中をとりあえずオレは起こした。気持ちはわからなくもないけど 折角の早朝勉強会だ。色々と有意義に過ごしたい。ああ、でも真中には確認をしておこうか。

「もう間違いないって判ってきたんじゃないか？ 真中」

「ん？ 何の事だ？」

「東城の事だ。……屋上で出会ったのが東城だつて事」

「つ…… あ、ああ。東城つて 本当はメチャクチャかわいい……よな？」

「本当は、つて 結構失礼な気がするケド……。まあ 今の方が似合つてゐるつてオレも思うよ。あ、あと オレ東城に確認してるから100%間違いないぞ。『あの時落ちたけど脚大丈夫だったかー？』つて」

「つつ！ そ、そーなのか!? なんで早く教えてくれないだよ!!」

「お前なあ…… 変態ワード連呼してて あんま近付きたくなかったからだろうが。オレの気持ちも判れ」

「う……」

真中は自覚あつたみたいで、押し黙つたよ。

「でねでねー？ 東城さんつてすつごく成績良いじゃん？ だから あたしも気合いれよーと思つて予習してきたんだよ？ 勉強見てもらえるのが凄く嬉しくつてさ！」

「や、やだ。そんなこと……。西野さんは 苦手つて意識しちやつてるだけだつて思うから 直ぐに判ると思うわ」

「えへへ。何だか自信がつきそうだなー。東城さんにそう言われたら」

「さて、オレ達も2人を見習つて勉強だ。英文でも読んで問題出してやろうか？」

「ええ！ ちよ、ちよつと待て！ 心の準備がまだだつて！」

「……いやいや、別にいらんだろ。そんなの」

女子同士、男子同士で勉強会が始まる前のちよつとしたやり取りをしつつ、目的である図書室についたんで、扉をがらつと開いてみると……あらビックリ。

「やあやあ!! キミたちも今から勉強かな？ いやあ 実に奇遇だねえ。偶然だねえ」

……何か先客がいた。すげえ見覚えのある2人がいた。

その内の1人は何か押んでたよ。口には出してないけど 多分『わりい……』って
言ってる様に見える。感じる。

朝から学校でもなんかメンドクサイ事になりそうな気がするんだけど……気のせい
じゃないよな、これつて。

29話

いや、確かに面倒くさいって気持ちだが全面に出たのは否定しないよ？

小宮山が以前よりも倍増して絡んでくる所とか もう考えただけでウザいし面倒。

『神谷ああ、神谷ああああ……！』

『つて、勉強はどーしたんだよ!! 妖怪!』

こんな感じで早々に絡んできたんだ。

絡んできたり、顔七変化させるそのエネルギー、ちよつとは べんきよーに向けろや

! つて、出会い頭に言つたよ。

ま、まあ…… 小宮山が殺気を飛ばしてくるのには理由があるんだ。

『ねえ、かーみやくん♪ ほら、ここー! ここ教えてくれないかなあ?』

そう…… 西野のおかげつて訳。おかげ、とは言いたくないか。

オレと真中、西野と東城に分かれて其々の苦手科目と言うか、目的課目を勉強しよう

! つて自然となっていたから そのままで行こうとした筈んだけど……、何か

西野が数学を東城に聞きつつもオレの方にも色々聞いていたよ。東城つて言うメチャ

優秀な先生（横で聞いてるだけでも十分判りやすい）がいるのに、ちよくちよくオレの方に聞いてくる。

勿論、オレだつて応える。

西野はそのまま どんどん顔を近づけてきて、それとなくボディタッチもある。

そりや、小宮山がイラつくのだつて判らなくもないさ。西野の事………だつたし？

それで、真中は真中で

『なんでお前らがこんな朝早くにここにいるんだよおおー!!』

と大草に食つて掛かつてたよ。そりや右に同じな意見だけど 大体判るつもりだ。

小宮山が原因なんだ、つて事。大草がその後思つた通りの答えを返してた。

何か、小宮山は

『西野を振り向かせる最後のチャンス!』

つて息巻いてるみたいだけど……。

『勉・強!』

オレの肘打ちで、その意気込みを早々に沈めた。

西野が…… その、西野から オレに告白してくれたんだし 他にこんな舌の根も乾

かない内に、別の男の方に行くーなんて思つて無いんだだけど…… それでも不快だつ

たんだ。

『へへへへ〜♪』

『ふふふふ……っ』

そんなオレを見たからなのかな。西野、東城と一緒に笑ってた。うん。朝から良い笑顔だ。

と言う訳で 勉強会の続行だ、って所で 大草が手を上げた。

「ああ、西野？ もうオレらは神谷と西野の関係判ってるし、別にいつもの様に呼んだって良いって思うぜ？」

「へ？ いつもって？」

「はあー バレてないって思ってた？ 西野って、神谷の事 名前で呼んでたじゃん『蓮

』って」

「……………」

挙手して言うような事？ って疑問に思ったのは置いてくよ……。だって 大草の指摘は実には的確だから。

気を付けるよ〜 と何度か西野は言ってたのは事実なんだけど…… 時折素の自分

がでて？ か判らないけど ちよくちよく名で呼ぶ事があつたりする。それって、西野と付き合う前の話だし、オレも結構気になってただけど……。

「そ、それもそーかなあー。あつはは……、ごめーんっ 蓮ー」

両手を合わせて合掌！ させる西野。

まあ 今は別にもう良いんだけど。ここの面子なら 多分大丈夫だ。小宮山は兎も角。

「ははっはは。ま、神谷なら嫌がるだろうなあー。よくわかる」
「うっさいな」

「睨むな睨むな。と言う訳で オレの意見は終わり！ さー 勉強しようぜ。オレ 推薦で泉坂受かつてるから勉強する必要ないし。判らんトコとかあつたら遠慮なく聞いてくれ」

そう。大草ってサッカー上手いから、スポーツ推薦でさつさと合格したんだ。

勿論、スポーツだけって訳じゃない。クラスでは成績は上位をキープしているし、実力で泉坂高校に受かるくらい訳ないってオレは思ってる。

「えー！ 推薦で泉坂決まってるの?? すっごいじゃん！ あたしもそこなんだー！」
「いやいや。まあ 大したこと、あるけどね？」

「えー、じゃあ 少しでも教えてもらおっかなあー キミにも！」

思った以上に西野が喰いついてくから、正直なんか複雑だった。

なんか…… 改めて 大草を見てみると……、得体のしれない不安と言うか、圧力と
いうか 色んな感情が渦巻いてきたよ。校内一のイケメンと名高い男だし。（オレの事

は知らん) 西野と並んでも…… 全然おかしくない。自然だ。

「おー、それによく見てみると 大草くんが使ってる文房具、あたしが持つてる文房具とほとんど一緒じゃん!」

「お? そうなんだ……って、マジだな。オレこのシリーズ好きなんだよね。ちよつとサイケなカンジがよくない?」

「そうそう! あたしもそーゆーところが好きで買っちゃうんだくく」

なんか西野と大草の2人、自然と話が盛り上がっていったよ。

うん。……見ると、ナンカヤダ。

ガキか!! って思われるかもしれないが、……イヤダ。

「男子でこの文房具使ってる人、初めてみたなあ……って、蓮? どーしたの??」

「……いや、別に何でもないゾ」

いつの間にか、オレって西野の方をガン見してたらしい。

それに西野が気付いたらしく、首を傾げてた。

「(……って、神谷 ヤキモチか? おおー 珍しい絵が見れて面白いかも!?)」

なんか、大草の顔が嫌な顔に一瞬見えた気がしたよ。

「なあー 西野ってすっげーモてるじゃん? やっぱさあ、告られるのとか待ってるの

?」

「何それ、何言ってるの?」

「ほらほら、例えばさ。今までの関係とか、ゼーくんぶ一度リセットして考えてみてみ? その前提で、西野に好きな男子が出来て、そいつが告白してくるまでずっと待つタイプだろ? 当たり?」

さつきから、大草何言ってるんだ? 小宮山を止める為! とか言ってた癖に……実は西野の事狙ってるのか?

確かに……告白はオレからじゃなかったよ。西野からだった。

だからかな。大草が言ったのを聞いて、西野は本当は相手から……オレから告白をしてほしかったのかな。順番なんてもう、取り返しが効かない事だけ……。何だから西野に申し訳ない、って気持ちが出てきた時だったよ。

「だから、何言ってるのって。あたし、好きな人には、自分からガンガンだよ? 攻めて攻めて! 攻めあるのみ! 攻撃あるのみ!」

きっぱり 否定してそう言ってたんだ。

何だか頭の中に靄が出てただけ……晴れた気分だった。

「……………」

「って言うかさあー。蓮が否定してよねーそこはっ! 蓮は気付いてないの? あたし、結構蓮に会いに行ってたんだよ? あたしからさ!」

「ま、まあ 知ってたと言えれば知ってたヨ?」

「ならなーんで否定しないのさっ!! あー後大草くん? リセットく なんてもう無理だからね? 設定でもムリっ!」

「……っはは。だろうな」

大草、なんか両手上げてたよ軽く。降参って感じか?

「いや、西野が来たら 一番印象にあるのは 《参勤交代現象》だから。そっちに行っちゃうよ。意識」

「も、もくく!! あ、あれは勝手についてくるんだよ! 何度も言ってるだろっ!!」

西野、腕回してオレの首ヘッドロックしてきた。

なーんか柔らかい感触が頬にあるんだけど……。

「ろ、ロープロープ!! く、首締まってる……っ」

こんな皆の目の前でこのままずっといるなんて無理だから そう勝手にタップしたよ。また 小宮山辺りが暴走しそうだ……し?

「あははは! 小宮山くんっておもしろーい!」

「ホント? ホント?? 似てる? これタコの真似。あとゴリラの真似も得意だし——
——っ!」

いつの間にか 西野の方より東城の方に行ってたよ。自分の持ちネタを披露して笑

いを誘ってたみたい。メチャ東城受けてる。

それで、真中は何かぼーっとしてる。落ち込んでるみたい？

皆の視線をあまり感じないのは好都合だけど、このまま遊んでたら勉強会の意味無し。

「に、にしのっ ギブギブっ!」

「むー! 反省したか?」

「したした!」

「よし、なら許すっ!」

漸く解放されたよ。

「ふう……きつかった(色んな意味で……)で、真中は何黄昏てんの?」

「……………」

「もしもし?」

「おっ!? わ、わりいわりい……。別に何でもないって」

「何でもないって顔じゃ無いケド……。まあ良いか。それに 小宮山。遊んでないで勉強しろっての。何処狙ってるのか知らんけど 合格圏内入れてるのか?」

ウホウホ言ってる小宮山。正直今の今までオレや西野も十分うるさかったと思うケド……。まあそれはそれ、これはこれだ。

「う、うっせーっ！ オレはヤル時はヤル男だ！ 勉強くらいお茶の子さいさいだ！」

「問① 次の連立方程式を求めよ。 $x + y \parallel 3$ \vdots ① $2x + 5y \parallel 9$ \vdots

②」

「……………」

ダメだこりゃ。

30話

「蓮って結構スパルタなんだねー？　ちよつとイメージが変わつちやつたかもだよ？」
「ん？　そうか？」

朝の勉強会が終わった。

当然だけど次は学校が始まる。

それで今は保健室からの帰り道で　西野と軽く話してたんだ。……なんで　保健室？　って思うかもしれないが、まあ　色々あったんだよ。主に小宮山が原因だけ。

「えー、だってほら。小宮山君に教える時凄かったじゃん。『そんなんじや　どこにも行けねーぞー！』とか『お前、一体この中学3年間なにやってたんだー！』とか。それでねー、あたし、竹刀みえたよ？　蓮が持つてる様に見えた！」

「あー……　ま、まあ　だって　あの後も小宮山脱線しそうだったし？　あいつら　奇遇とか言つて、勉強やりに来てたはずなのに、身が入ってない感じで……　……それに、西野だつて思わなかったか？　ぶつちやけ。　あの連立方程式の問題とか、基礎中の基

礎だろ？ アレわかないで泉坂狙ってるゝとか……………」

「あ、あー それは数学嫌いな流石のあたしでも ちよつとヤバイって思っちゃったかなあ……………」

西野も引き攣った笑みを浮かべだしたよ。

だつて、シヨウガナイって言えないし。小宮山は元々得意な教科も無いっぽいし。多少は荒つぽくやらないと スイッチ入らないだろーなー、って思ったからだし。

「ほらな。オレ甘やかすのはあまり好きじゃないから」

「ふーん。…………蓮つて 甘やかすの嫌いつていうケド、やつぱ優しいよね」

「ん?? 優しい?」

「だつてさ。例え仲の良い友達だつたとしても、あそこまで真剣になつて教えるのつてなかなかできないつて思うんだー。ちよつとスパルタ気味だつたけど小宮山君、ちゃんとして聞いてたじゃん? それも蓮のこと信頼してるからだと思うよ。なーんにも思わない人からだつたら、訊かないつて。寧ろキツくされたら逃げるよ」

あはは、と笑いながら オレの事を褒めてくれる西野。

…………それにやつぱ顔近いつて。褒められた事も合わせて高威力だから 顔が赤くなりそうだよ。

「ま、まあ…………ここに転校してきて 最初はやつぱ結構壁作つてるつて 自分でも意

識してたんだ……、そんな中であいつらぐらいたったから、かな。結構グイグイ来てた……、その、来てくれた？ のは。おかげで結構クラスに打ち解けるの早くなつたて思つてるし。……あ〜〜」

オレ、何か恥ずかしい事言つたよ。ゼツタイ。

「西野…… 『来てくれた』 ってトコ、忘れてくれ。……あいつらに言わないでくれ」

「へへ〜 やーつば蓮は恥ずかしがり屋さんだね〜。皆の事好きなんだー って言っちゃえば この際ススキリするかもよ？」

「ゼツタイヤダ。……それにだ」

オレは、周囲をちよつと確認したよ。廊下には 殆ど誰もいなかった。それをちゃんと確認したところで、ちよつと西野に踏み込んだ。

「その単語。……使う相手は 今の所オレの横にいる人にしか使いたくないから」
「へ……………？ ……あつ／＼／」

西野、最初は判らないって感じだったけど ちゃんとわかってくれたみたいだ。

「え、えへへ……………／＼／ あたしも……………だよ？ 大好きだからねー」

そつと西野はオレの腕を取つて、肩に頭を乗せた。

仄かに感じる甘い香り。西野の香り。……………うん。健全な中学生にはやっぱり刺激は強いよ。暴走しちゃう！ とまでは言わないけど……………。

だってほら、ここは学校だ。そんな事した日には一体どーなってしまふのか、って思うし。

「んっ よーし！ 蓮分をしつかり堪能したし！ あたし、こっちだから行くねー」

「なんだよ、オレ分って……。 おう。またな」

西野は2組。オレは4組。

今更だけど、同じクラスだったら良かったってやつぱり思うよな。

「……高校では同じクラスになりたいね」

「！……はは。だな」

どうやら西野も同じだったみたいだ。恥ずかしく言えば通じ合ってるみたいで

ちよつとくすぐりつたい。 さっきの腕組、肩寄せでもそうだけど、オレも結構西野分を

貰えた。

西野が2組の方へと向かったのを見送った後。

「さてと。今日も1日頑張りますか」

気合を入れて教室に向かった。

と言う訳で、教室の中。

真中と大草は先についてたみたいだ。

「悪いな2人とも。なんか面倒押し付けたみたいで。……アイツ、大丈夫だったか?」

「いやいや。オレちよつと神谷で遊んじやつたし、良いってそれ位。小宮山だけど、興奮しっぱなしで、全然鼻血止まってなかったよ」

「オレで遊ぶってなんだそれ? ……ま、それは置いといて、小宮山には刺激が強過ぎだんだらうよ。(多分、小宮山に限ってじゃないと思うけど…… あそこまではいかなかな)」

「朝っぱらから奇怪だよなあ、アイツは……」

ちよこつと話すと 小宮山の勉強を東城も見えてくれたんだ。

それで 勉強中にちよつと手が消しゴムに当たって小宮山の方に転がって それを取ろうと近づいた東城と小宮山が当たった。

……うん。口に出しては言わないが、東城つて、その……かなり大きい。アレだけ近づいたら、やつぱ むにゆつ と当たったみたいなんだ小宮山に。

その瞬間、まるでクジラの潮吹きみたいで鼻血だしてぶつ倒れた。

保健室までは一緒だったけど、先に女子の2人を上がらせて、それで大草が気を利用させたみたいで、オレも一緒に西野と帰らせた。それがお礼の部分だ。

あ、その話とは別にちよつと気になるトコが出来た。

「ん？ 真中どうした？ さつきからなんかぼーつとしてないか？」

「……………んあ？ なんだ？」

「いや、オレが聞いたんだけど……。まあ 別に良いけど」

「ここでちゃんと注意してたら良かったかも、って少しばかり後悔したよ。」

「この後の移動教室とかで、真中 ふらふらしてたみたいでさ。色んなトコにぶつかりそうになってんだ。それで とうとうぶつかって倒れたから。」

「東城つてオレのこと好きかな——つて！」

「どわあっ!!」

ぶつかつた相手は復活した小宮山だ。あーでも小宮山雑誌見ながら歩いてたから、どっちが悪いか、つて言えば小宮山の方かも。

「なんだよ、ボーつとして人の前歩いてんじゃねーよ！」

「てめーだつて本読みながら歩いといて何言つてんだ！」

「真中の言い分に賛成、つて言いたいケド、なんか変だぞ真中。ぼーつとしてるのつて朝からずつとじゃないか？」

「やーいやーい！ つまり真中が悪い〜」

「んで、小宮山は調子に乗んな。そんな雑誌見てそつちの勉強する暇あつたら、数学の教本みて勉強しろ。一番数学が悲惨だろ？」

「うるっせー！ つかさちゃんがいる神谷にはわかんねえんだよ！ オレの気持ちがおれは今分析中なんだよ！ 東城がオレのこと、本当は好きなんじゃねえかつてことをよお！」

何か突拍子もないこと言い出した。

これって多分朝の勉強会での出来事のことを言ってるんだと思うけど……んな訳無いだろ。東城はきつと真中に惹かれてるって思うし。

「はあ？　つてか　んだそれ！　『女の口にモテる50のコツ』!?　なんか恥ずかしいぞお前！」

「邪魔くせえな！　なんなら見せてやつから落ち着けよ！　あ、神谷はダメだからな!!　モテ男は禁止だ！　き・ん・し!!」

「あー別に良いよ。寧ろそっちの方がありがたい。今お前らに混ざりたくない……つてのが本音だからなあ。色んな意味で目立ちすぎだろ」

真中が大声で雑誌の身を暴露しなげりや　まだ良かったのに。

「だああああ!!　てめえは良いよなあああ!!　なーーんせ、あのつかs「デカイ顔と声で何度も言うな！」　ぶげっ!!」

また、顔でかく変化させて（妖怪化？）迫ってくる小宮山にカウンターで肘打ちを見舞った。もう周囲にはバレてるの判ってるけど、それでも口に出して言われるのは……、それも大声で言われるのは嫌だ。

「ふんっだ！　もー良ーよ！　ほら　行こうぜー！　なー真中っ!!」

「そのセリフ……　お前が言う　正直メチャ気持ち悪いぞ」

「うっせー!!」

と言う訳で、2人は仲良く？ 一緒に席に戻ってつたよ。

オレは禁止令出されたから、自分の席に戻ったけど。

「どうしたんだ？ あれ」

「ん？ ああ、大草。なんでも小宮山が分析したいんだと。その本だつて」

「分析？ ……つて、ぜーったい女子関係だろ？」

「言うまでもないだろ。んなもん。この大事な時期だつてのに余裕があつて、ほんと凄
いよある意味」

はああ、と深いため息が出た。西野はオレの事優しいつて言ってくれてたけど……、
やっぱあんま小宮山には優しくしたくないつて思う今日この頃だ。つけあがるし。

真剣になれるのが凄い……か。まあ 腐れ縁だからつて事で納得しとこうか。

「んじゃ、行つてみようぜ？ 神谷」

「……は？」

「ほれ、あいつらんとコだよ。そっちのアドバイス、出来るだろ？ 神谷なら」

「いやいや、出来ないつて。んなもん知つてるだろ？ ……ああ、大草関係での断り方な

ら教えられると思うケド」

「確かにそれは得意そうだよな」

「別に得意になりたかつた訳じゃないけどな！」

大草は人間磁石（女性限定）だからな。

「んじや、行つてみようぜ？ 神谷」

「……まーつつたく同じセリフ繰り返す言うなよ。オレ行かねえつて」

「面白そーじゃん！ それにあの手の本にはさ。付き合いだしたころの心得とか載つて
ると思うぜ？ チラ見しというて損はないと思うけどなあ」

「……………」

付き合いだして、か……。正直 オレは得意じゃないから。範疇外の事だったから
……。自信無いのは事実だし……。でも ここで乗つたら大草にまた色々弄られそうだし
し……。どうするのが 一番だ？

「つー訳で 行つてみよう！」

「……………はあ」

言われるがまま 一緒に行ったよ。多分、いや 間違いなく小宮山にはいろいろ言わ
れそうだけど、まあ 別に良いか。大草に無理矢理つて言えば。……揺らいだのは事実
だケド。

それでちよこつと近付いただけで直ぐに何話してるのか判った。

だって2人とも声メチャデカいから。特に小宮山がだけど 真中も何気に負けてな

い。

なんでも『今朝東城が勉強に誘ってくれた』から始まり『わざと消しゴムを落として、わざとオレに胸をすりよせてきた』とか何とか。

前半部分は まあ、判るけど 後半部分は何言ってるの？ って感じだ。東城はその辺はちよつと疎いっぽいし、うっかり者、ドジっ子な所もあるから アレは天然だと思うつてのがオレの意見だな。

「いやいや、別にそれ わざとじゃないんじや……」

「わざとなの!! だからこの本でいくと東城はオレに気がある!! ってワケよ!」

「ええつと、なにになに 『髪の毛をいじると欲求不満』? うさんくさくくつ そんな本、頼りにすんなよなあ。なあ? 神谷」

「オレに振るな。人それぞれだから 本が売られてんだろ」

しれつと後ろから声をかける大草。それとオレ……は声かけてないけど一緒に来たから一緒かも。

「コラアアあ!! 神谷禁止! って言っただろーが! 金払え!!」

「何で金なんだよ。大草に連れられて、だ。それ以外に理由は無い」

……ちよつと興味が出たって言うのは やっぱり秘密だ。あんまり言いたくないし。

「良いじゃん。神谷の意見だつて重要で貴重だつて思うぜ? 何せ学園のアイドルをオ

とした男だからな。大いに利用しちやえって小宮山

「うぐぐぐ……。うぐうう……。」

「へ、へんな風に言うな大草！ それに、呻くな！」

「つー訳でだ。おまえらが誰の事調べてるか、知らねーけど、自分のこと好きかどうかなんてすぐにわかるじゃん」

「「ええ!? それ、一体どーやって!?!」」

「……直ぐ復活したな」

大草の話だから、大分説得力があるらしいよ。呻いてた小宮山は、一瞬の内に起き上がったし。んで、何か知らんケド 大草はオレの肩に腕回してきた。

「な？ 神谷！」

「だから同調させようとするなつての！ オレ達思考回路一緒く ってワケじゃないんだぞ！」

「良いから教えろよー！ 大草！」

「そーだそーだ!!」

お預け喰らった腹空かせた犬みたいになつてるよ2人とも。

「……………大草。さっさと餌ヤレ」

「へーへー。簡単な事だろ？ 相手の目を見て3秒見つめて、赤くなって目を逸らせた

らホレてる」

「そ、そんなのどんな女子だってそうなるだろ!？」

「まあ 確かにオレが見つめたら大抵の女子は赤くなるけどね?」

「あのなあ!! 嫌味か!」

そりや 間違いないな。大草の言う通り。今ちらつと後ろの方とか見たけど、遠巻きに大草の事見てるコ多いし。でも、ちよつとそこには異議ありだ。

「ん……でもさ、西野は違うぞ大草」

「ん? そうなのか?」

「ああ。西野の場合 目見たら見つめ返してきたし」

以前もそんな事あったから。『なになにく?』つて興味津々にさ。

「……………」

「あー、悪かった悪かった。だから無言の殺気止めろ」

小宮山は恨めしそうに見てきたから、これ以上言わない事にするよ。

「ま、西野は他の女子とはちよくつと違うトコがあるつておもうし、参考にするのにはなあ……? でも一度は試す価値はあるつて思うぜ? ほれ、神谷の場合でも見つめ合
う事が出来てるんだし。それで 真中は 東城の気持ちを知りたいんだろ? 善は
急げだ」

「っ……」

「なにいつ!？」

真中と東城だったらもう確認するまでもない、つてオレは勝手に思ってるんだけどな。

なんか、小宮山がうるさくなつたけど。

「んじゃ、頑張れよー。オレは席に戻るからな」

「そろそろ時間か。オレも戻るわ」

「こ、こらあ！ お前らー！ 小宮山止めてくれよ！」

「何で真中なんだよおおおお!!」 つ、つかさちゃんに続いて東城までええええ!!」

こんな感じだから。全部真中に任せてオレは振り返らずに戻った。

と、言う訳でもうあつという間に下校時刻。

西野と一緒に帰るトコ。

「あははは〜！ それでなんか騒がしかったんだねー、4組の方」

「まあな。ほんつと騒がしいなんてもんじゃないな。同じ組にいたらさ」

「楽しそうじゃん？ それで 東城さんと真中くんはどうだったの？」

「ああ。つまり……。お互い顔逸らせた」

「あははははっ！ 初心ってヤツだね〜？」

西野はほんと面白そうに笑ってるよ。オレらも偉そうに言える程実績と言うか時間を掛けた訳じゃないんだけどな……。

「ほら西野。電柱に当たってるって」

「あははは おーつとつとー。ありがと。蓮っ あ、そうだ！ ねえ これからヒマかな？」

「ん？ ヒマー かな。帰ったら受験勉強するくらいか。……ああ 後は姉の世話？」

いや 今日はいいから大丈夫か」

「おおっ 丁度良かった！ 受験勉強だよ。よかったら今日あたしん家で一緒にやろうよ。ねっ ねっ!!」

「……え？」

「明日学校休みでしょ？ ひとりで勉強してもすぐにサボっちゃうんだよね、あたし。……それにさ。蓮をちゃんと家に招待したかったんだ。前回はその……アレだったし。ダメ、かな？」

両手をもじもじさせながら言ってる。それも上目遣い。

「ははは……。断らないって。大丈夫だ」

「えへへへ。そうと決まったらさ！ 家に電話して！ 夕飯も用意するから食べてっ

てねー」

前回は確かに西野の言う通り…… あまり良い訪問だった、とは言えないって思う。それに、西野のお母さんもまた オレと話をしたい、つて言ってくれてるらしいし……。ちよつと緊張するケド、アレだけはつきり『お付き合いさせてもらってます』つて言つたんだし。

それ位しつかり覚悟決めとかないとだな。

ああ—— この時は思つてもいなかつたんだよ。

色んな意味で大変な事になる何てことは……。

31話

「……初めてじゃないけど やっぱ緊張するな」

「へ？ 今 蓮 緊張してたの？ というかそんなのするの？ だって前とか、テンパっちゃってるのあたしだけだったじゃん」

「いやいやいや、オレだって緊張くらいするわ。女の子の家に1人だけで来るのって考えてみれば西野が初めてだし。……ん 前の時、上手くオレ謝罪とかできてたのかなあ……？」

「あははっ！ そーんなに気を張り詰める必要なんかないよっ！ だって、蓮とあたしの仲じゃん？ あたしの……彼氏、でしょ？ だから 軽くいこうっ！ 寛いでいってよー（と言うより 上手く出来過ぎて……じゃなく完璧過ぎて逆にお母さんちよつと引いてたよーな気がするけどな……）」

という訳で今西野の家の前に丁度ついた所だ。

以前は 帰るのが遅くなってしまった事や西野自身が危ない目に遭っていた事とか

が重なって、本当に申し訳ない気持ちになって、西野のお母さんに謝った。あの場は許してくれた……と思うんだけど、オレとしては やっぱり不安は残る。

でも、話を聞けば オレが西野の事を助ける場面を見ていた人（コンビニの店員さん）から話が伝わったらしく…… 好印象抜群！ と西野がドヤ顔で笑っていたから 少しでも安堵出来たんだけど、やっぱり難しいかな？ 平常心。

「（でも、どきどきしてくれるのは 嬉しいかも？ 蓮つてとつてもクールだし） はい、どーぞー！」

「ん……。お邪魔します」

がらつと扉を開けて入った先には誰もいなかった。別に出迎えてくれるとかは 考えてないけど、ちよつと出鼻くじかれた気分だ。

「ほら、いいからいいから。止まらないであがつて！ あ、スリッパ適当に使って良いからさー！ あたしの部屋いいこつ！」

「……にしのの部屋？」

「そつ」

そりや 西野の家に来たんだから お呼ばれしたんだから 全然可能性無いってわけじゃないけど、やっぱりドキドキするな。

「あ、なーに蓮？ あたしの部屋が汚さそうだー！ とか想像してる??」

「……いや、なんでそうなる？」

「だーって蓮、難しそうな顔してるんだもん！ 考え込む時そーいう顔してるし！ 誤解しないでよね！ あたし 部屋いつもきれいに片付けてるもんっ！」

「……大丈夫大丈夫。西野の事ならしつかり見てるし、部屋汚いとかギャップあり過ぎ。そんな事考えてないって。……まあ 世の中にはそう言う外見と真逆な感じな人は多数いるけど」

誰とは言わない。……そうだ。誰とはぜーっつたい言わない。外面パーフェクト。100点中120点だつて上げれそうな感じなのに 家に帰ったら まあ 大変。な人物の事なんて。

「へへっ ならよーし！ じゃ、いこつ こつちこつち」

「ん。お邪魔させてもらうよ」

階段を上がつて部屋を何部屋か横切つて到着したのが西野の部屋。

女の子の部屋つてこういう感じなのかな？ つて年頃の男子中学生ならだれでも想像するって思うけど、その印象にピタリだったよ。可愛いしい装飾。それに人形やちよつとした置物だつて可愛らしき抜群だ。

とある人物に連れられて（勿論、用事があつただけ）入った部屋もこういう感じだったし。

「じゃ、とりあえずベッドに座つて。あたし準備するからさ！」

「(ベッドに座つてと)と準備するからさ、つてなんかそれこそ誤解を生みそうな発言だと思ふんだけど)……ん。ああ、机出すの手伝うよ？」

「いーからいーから。蓮はあたしの家庭教師さんだしねー！ 寛いでてよ」

「うん？ オレが家庭教師？」

「あつはは！ 良いじゃん。蓮の方が成績良いんだし、教えるのだって上手じゃん」

小宮山を教える時は スパルタだ、と言われているし、オレが教えるの上手い、つて思つた事は無いんだけど…… 西野の言う事信じてみようか。

「よし。ならばシビシ行るか。……手加減はしないぞ？」

「えへへ。望む所！ 頑張るね！」

につ とお互いにウインクした。それはそれでなんか恥ずかしかったからちよつと顔が赤くなつたと思ふけど、直ぐに西野が取り掛かったから 見られずに済んで良かったよ。

その後 西野は部屋の隅に立てかけて仕舞われてたお洒落な丸机を引っ張り出した。そんな西野の後ろ姿を見ながらオレは訊いたよ。

「そう言えば 凄く家が静かだったけど、西野のお母さん、家の人はいないのか——？」

また 話をしてみたい と言つてくれてたみたいだからさ。オレもちゃんと挨拶し

たいてって思ってる。あの時は 冗談抜きで本当にテンパってたから……あまり覚えてないトコとかあるんだ。

それで西野の返答待ってて 帰ってきた答えがちよつと予想外だったんだ。

「ん？ 明日まであたし以外誰もいないんだー。お母さんは話したいくつて言ってたケド 次回に持ち越しだねー」

西野と西野の家で2人きり。今晩は（宿泊するつもりは無いけど）。

やっぱりドキツとしてしまったけど 西野と2人きり、と言う場面は多いから大丈夫だったよ。

「仕事か？」

「うん。お母さんもお父さんも出張だつてさ。残念だよねー？」

「オレは色んな意味で複雑かもな」

「ん?? あ、蓮もまたお母さんと話してみたかった？」

「あー それもあるけど……、ほら 緊張してただけど 気が抜けたつて事もあるし。でも西野とその……家で2人きり、つて言うのもあるから やっぱり色々思うトコあるくつて言うかやっぱり緊張はするし。つまり同時に色々あつて。気は抜けたケド やっぱり なかなかなあー」

嘘偽りない心情つてヤツだよ。彼氏彼女の間柄になつても やっぱり2人きりだつ

たらドキドキするし。西野はやっぱ可愛いからさ……想像以上の高威力なんだ。色んな仕草が。

「……蓮って、ほんつとポーカーフェイスだね」

西野は少し黙ってたかと思えば、用意できた後オレの方に来て そのやわらかな両手でオレの頬を むにゅつって挟み込んだよ。

「あたしさ、すつごくドキドキしてるんだよ？ 蓮をちゃんと家に招待できて、その……あたしの部屋に連れてきて、ふたりつきりで……つて、蓮が言うように色々同時にあつてさ！ ……ほんとに蓮もドキドキしてくれてるの？」

「………」

口でそう言っても信じられないよー！ つて言われてる気がしたよ。だからさ……、ちよつと強引かもだけど、オレは西野の手をもって オレの胸辺りに当てた。

「あつ………」

「……わかつてくれたか？」

心臓の鼓動を伝えた。

今まで ずっと凄い勢いで鳴ってたから 服の上でも簡単に伝える事は出来るし。

西野がオレに触れてくれた瞬間から更に際立ったからさ。

「……………えへへ。すつごくドキドキしてくれてるね?」

「そーいうこと。……………これ以上ないだろ?」

ふいつ と顔を逸らせたよ。やっぱ 照れるし。

顔逸らせたのがちよつと間違いだったかも。

「れーんっ!」

「おわっつ!!」

西野が背中に抱き着いた……………と言うより飛びついてきたから。

「あたしの事も感じてくれる? ……すつごくドキドキしてるのがさー!」

そう聞かれるけど、正直自分自身のと西野のがごっちゃ混ぜになつてて判らん。つて言うのが正直な感想。

「こらー! な、なんかいつてよー! あ、あたしだつて恥ずかしいんだからね!」

「あーあー! すげー感じる! メチャメチャ感じる!! 西野もドキドキしてくれてるつてさ!!」

「ほんと?」

「ほんとほんと!! だ、だから ちよつとタイムだ!」

理性がヤバイから！ 西野は凄く柔らかくて、心地いいケド、何度でも言うオレだつて男だ。健全な男!!

でも…… やつぱり 約束だつてしてるから。——健全なお付き合いを、つて。

でもさ。健全な男な部分は なかなか西野は離れてくれないから、約束の『や』の字がうすくく消していく様な気がした時だったよ。

ピーンポーンッ！ つて聞こえたのは。

「……………むー。誰か来たみたい？」

西野の身体がオレの背から離れた。ほつとしたのと、名残惜しいのと、……………また色々こつちやになりそうだな。

「こんな時間なのに、誰だよー」

「……………それは確認しないとわからんのじゃないか？ 居留守するのは、アレだろ？」

「判つてるよー。(うー……………邪魔された気分だよ) しょーがないから ちよつと行つてくるね」

「おう」

速足で西野は部屋を出ていった。

これで良かった——と思ったケド 帰ってきた時がまたどうなるのかが判らない。「大丈夫……かな。たまたま来訪者が来たから 中断しただけだし。まだ……長いんだし。不思議だ。楽しい事、西野と一緒にいる時間は いつも凄く早いのに。何か今の永久くらいに感じられた気もする……」

オレは暫く悶々としてたけど、気を紛らわせる為に持ってきた教科書、数学の教科書を広げて準備した。

あたしは、ずっとドキドキしてる。

蓮と会う時、蓮と話す時。蓮の事なら何でも。

家に連れてきた時なんかほんっと最高潮だったんだ。お母さんやお父さんがいな

い時って ちよつぴり狙っちゃった。2人にはちよつと悪いって思ってるけどね。

忘れられない思い出を、沢山作りたかったんだ。

——初めての夜、蓮と一緒に。って。

い、イヤラシイ事考えてなんか……って言えば嘘になるかも……。だって 蓮に触れるのも、触れられるのも本当に心地良いんだから。考えるだけで凄くドキドキなんだから。

ちよつと 死んじゃうんじゃないっ？ って思っちゃうくらい心臓が暴れてたんだ。

なのに——蓮はいつも通りの表情だった。

口では『緊張』って言葉使ってたけど…… なーんか信じにくいんだよねえ。

あの男たちをやっつけてくれた時とか、お母さんと会った時とか。ゼーんぶそつなく

熟しちやつてるもん。あたしはこんなになのに！

だからちよつとムキになつて 蓮の頬をむぎゆつ っつて挟んだ。でまかせじやないのかーほんとなのかー！ っつて。

それで蓮は論より証拠くつて言わんばかりにさ。あたしの手をとつて自分の胸に押し当てたんだ。……それでさ凄つごく早かつた。蓮の気持ち伝わつてきた。

あたしで蓮がドキドキしてくれてるのがとても嬉しくて、プイツと顔を背ける蓮が可愛くも見えて…… あたしは思わず抱き着いちやつたんだ。

そのまま勉強の事忘れて この温もりを…… っつて思つてたら まさかのタイミングでチャイムが鳴つた。ちよつと 怒つても良いつて思うんだー。 まあ 勿論 そんな事しないけどね。

「こおんばんはあく 隣の篠原ですう〜」

出てみたらお隣のオバサンだったし。

「聞いたわよお。つかさちやん 今晚ひとりでお留守番なんですつてね？ お母さまから様子見てやつてつて頼まれたものだから。……どーお？ 何か困つたことなあい？」

「いえ…… ひ、ひとりでも やれてますから」

流石に、蓮と一緒に言うのは 口に出せなかつた。はしたない〜つて思われるかもだし。そんなの嫌だし。

「そーお？　そうよねえ。もう中学3年生ですもんねえー。うつつつふ〜」
何だか、オバサンの笑みが変わった気がした。

「つかさちゃんには　王子様がいるんでしょ〜？　あ〜　危なくなったら　私より　王子様を呼ぶかしらあ？」

「……ほえ？」

あまりに突然の事だったから、あたし　自分でも変な声が出たって自覚出来たよ……。

「うふふ。私も聞いているのよお。つかさちゃんに見合う殿方だーって。暴漢から身を挺して守ってくれる殿方なんて、今時ないわよお？　今度、私にも紹介してもらいたいわ〜」

「あ、あー　いやー　はい」

……生返事しちゃった。

蓮のこと……　近所に伝わってる〜って話はお母さんから聞いたけど。実際に聞いたらほんと実感するよ。

その後は暫く　蓮の話とか　最近この辺りには下着ドロボーが出る〜とか聞かされた。話が長く感じたのは言うまでもないよね……。心配してくれてるみたいだし、注意

するように言ってくれてるから邪見には出来ないケドさ。

「う〜…… やっぱなんか疲れんのよねえ、あのオバサンって……」

喋り方とか何処のママム？ って感じだしさ。蓮の事色々と言われても恥ずかしくなったり、照れたりしなかつたのは それ以上に話すのが疲れるから、だよな？ うん。間違いなく。

なーんだか 色々と挫かれちやつた上に戻つてみたら蓮は勉強の準備進めてくれて……。

仕方ない……よね。でも……。

「(まつ……。夜はまだまだ長いもんね♪)」

「ん？ 何かわからないトコでもあったか？」

「やつ。まだ大丈夫だよ。ここ終わったらご飯にするから！ ラストスパート、頑張るねー」

32話

「さつ　蓮は座つててー。勉強みてくれたお礼につて事で　ごはん作つてあげるからさつ」

「ん。ありがとな、西野」

「お礼はあたしの方だよー。だつてすつごい充実した勉強時間だったよ？　あたし一人じゃこんなに集中できないつて判りきつてるしさ」

とりあえず、2人の勉強会は終わった。

その後は、それなりに時間も遅かつたから　最初の約束通り西野が夕食を振る舞つてくれるとの事だ。後ろから見ても凄く良く似合う西野のエプロン姿。それだけでただかお腹いっぱい！　つて感じるのは、きつと今が凄く幸せだからだつて思う。

好きになつた人が振る舞つてくれる手料理。その気持ちだけでも嬉しいし、何より凄く美味しいつて思うから。

——つて、オレは思ってたんだ。本当の本当に。西野の料理の内容を訊くまでは……な。

「ところで何を作ってくれる？ 出来た時のお楽しみ……てヤツかな？」

「ん？ あー それも良いかもだけど、それは次回、そうしてみようかな？ 今作ってるのは イタリアアントマトとチキンの地中海風リゾット仕立てのオムレットデミグラソースがけつてどこかな？」

「……………うん？」

料理に関して。他人と比べたりするのは正直嫌いだけど 食べてきた種類に関して 是他の家の人より断然上だと思ふ。姉貴が何処ぞの国の料理ととか振る舞ってくれたりしたし、母さんも珍しくて高級な素材を頂いて、つて事で腕を振るつて色んな料理を作ってくれたから。舌が肥えてる、グルメだ。……とまではいかないけど、それなりに判るつもりだった。

でも、西野のメニューを訊いて、何度も頭の中でリピートして…… 浮かび上がったのは『結局何？』つて事だったよ。

直接訊こう、と思つたんだけど 西野は下拵えに入つたみたいだから止めた。包丁つかつてるし 止めるのも危ない気がするから。

「えーと、玉ねぎはみじん切りで……だね」

まだまだだごちちなさがよく判るリズムの刻み方だったケド、一生懸命してる　って言うのは凄く伝わった。

うん。凄く伝わったんだけど…… 次の言葉は訊きたくなかったかな。

「で、スープの隠し味に—— チョコレートとマヨネーズとお酢を少々」

一体何を作ろうとしているのだろうか。

お菓子作り？ いやいや　マヨネーズと酢の組み合わせが来てるし、それに夕食作りって言うってたんだし……。

「んー　もつともつとパンチが欲しいから、味醂とお酒、あつ　あとはバニラかな？　甘酸っぱさが仄かに残って味が素敵になりそう！　後はワサビもイけるかな？」

……うん。続けざまに連続攻撃が頭の中に叩きこまれた。

そのおかげで想像の範疇を超えちゃったよ。

その味を想像出来た西野はきつと一周まわって　ある意味　有能なんだって　なん

でか思った。

何でオレ、止めなかったんだらうね……。多分 途中から考えに考えすぎてたんだらうなあ。

「えへへ。下拵え完成つと。どうかな？ 味見してみる?」

おたまを持つて にこつ と笑つて『先に飲んでみて♪』 凄く笑顔が眩しいつて思つたよ。

純粹にオレに御馳走してあげたいつて気持ちは痛いくらい伝わってくるよ。うんその綺麗な笑顔見てたらさ。

でもな。確かに未知数な味。未確認生物……。じゃなく、未確認料理なんだよ。

いや待てよ……。? ここは冒険してみるのも面白いかもなあ……。つて、な訳あるか!

「あ、あー 西野? 一緒に味見してみない? ほ、ほら オレもスプーン借りて……」

あーんっ」

「ふえっ!?!」

なんか西野は自分に来るとは思ってたみたいで、ちよつと驚いていたみたいだけど……でも 最後はいつもの笑顔が待ってた。

「わ、それも良いかもねー! じゃ、一緒にやろっ! あーん……」

「あ、あーん……」

「あむっ!! ……」

『ザ・ワー〇ド! 時よ 〇まれえええい!』

と、頭の中で声がした気がする。

「んっ、んっっ!! んーんーんーんーっっっ!!」

最初に動く事が出来たのは西野の方だったよ。

スプーンじゃなく、おたまを放り投げる勢いで離して 両手をバタバタさせてた。

「み、みずっっ! みずううう!!」

「……………」

オレは無言で西野にコップ一杯の水を渡した。

思い切りそれをぐいっ! と飲み干した西野は、…………うん。一杯の水じゃ足りないみ

たいだ。水いっぱい! 欲しい、と言う感じ? 蛇口を思いっきり捻って ダイレクト

で口の中に入れてた。いやあ 豪快な飲みっぷりですなあ、はい。

「け、けほっ けほっ…………。な、なんで!? そ、そーぞーしてたのと全然ちがうっ! パ

ンチが効く所じゃないっ も、悶絶だよお…………れ、れんく…………って あ、ご、ごめ

んっ! ま、まさかこんな味になるなんて………… って、蓮っ!」

「ん……………? どーした……………」

「そ、それはあたしのセリフっ！ あたしの方が沢山入れてたし、まさかアレ、全部飲んだのっ!? だ、大丈夫? 顔がなんか真つ青と言うか、真つ白? と言うか 凄い事になつてるよおお!!」

「そーか……? オレはべつに……、なあ……?」

「別に、じゃないよー!! ほ、ほら! お水飲んでっ!!」

頭の中では 冷静に西野の様子が見れてたオレだけ…… 身体は悲鳴を上げてたみたいだね?

今更ながら気付けたオレは とりあえず西野からお水を御馳走になった。いやあ五臓六腑に染みわたる見事なお水だったよ。……ただの水道水とは到底思えないね。今日は。

「れ、蓮…… 大丈夫……?」

「あ、あー 大丈夫だ。ほらほら! ゲンキゲンキ! ばつちりぐーだ」

「……なんだかいつものテンションじゃない気がするケド…… ごめんね? あんなの飲ませるなんて……」

西野、メチャクチャ沈んだ。

調味料とか選んでる時 無自覚だったみたいだ。今更ながらよく判ったよ。で、ここ
で言うべき言葉はオレの中では決まっていた。……あ、後テンションがおかしいのも認め
る。ちよつと舌とか、胃袋とかが 色々とハイになつちやつてるから それを誤魔化そ
うとしてるよ、今のオレ。

そんな強烈で忘れられそうにない料理だった。……い**う**べき事は最初から決まつて
る。

「いやだつてなあ。西野が初めて振る舞つてくれたスープ、料理だし。そんな謝らなく
て良いよ。色々とありがとう。オレの方が沢山貰つてるよ」

「れ、れんく……」

スリスリく と頭をオレの胸元に押し付けすり寄ってくる西野は 何だか小動物み
たいでほんと愛らしいいつて思うよ。幸せつてきつと今を言うんだろうなあく とか恥
ずかしい事考えちやつてた時だったな。あの料理の攻撃力を思い出してしまったのは
さ。

「……ああ、でも これは初回限定生産にして欲しい……かな？」

「も、勿論だよつ!! つてか あんなの沢山生産してたらお母さんにも怒られるつて!
(……料理はちよつと自信があつただけど、やつぱり1人するのは初めてだったか

ら、かなあ……)」

うん。自分の……彼女が頑張って作ってくれたんだ。ま、まあ 得手不得手つてものだってあるし、西野は頑張り屋だから きつと進化するさ！……でも、あの味はマジで初回のみにしてほしいって切に思っちゃったのも事実だったよ。

「あ、後……今は互いの心配をした方が良くも……」

「うー……。え？」

オレも今更なんだって思うんだけど、まあ 言わないとだ。

西野もオレも思いつきり濡れてるんだよね。水を飲む時にさ。西野のくれた水があまりにもおいしかったのか、オレも西野に倣って直飲みしたんだよ。水量もそれなりに有ったつぼくて、結構周りに飛び散ったみたいだ。よく見てみると床とかも結構濡れてるし。

「あ……あはははは。いい歳して水遊びした後みたいな恰好……だね？」

「判る気はするが、でも 時期が時期だから……。風邪でも引いたら大変……つと、そうだ。体操服があつたんだつた」

オレは鞆から体操服。つまりジャージの上下を引つ張り出した。

「体育があつたんだけど、先生が今日休みだったから自習になったんだ。運が良いのか

悪いのか判らんけど、とりあえず着替えはあつて良かった。

「西野。トイレ借りて良いか？ ちよつと着替えてくるよ。その間に西野も着替えた方が良い。風邪引いたらシヤレにならないだろ？ 最近のつて結構長引くらしいし」

「うん。あつ、これだけ濡れてたら脱いで洗濯しちやつた方が早いからさ、後で蓮の服貸してね？ 一緒に洗つちやうから。そしたら明日のお昼には乾くと思うし、ちゃんと着て帰れるよね？」

「ああ、それくらい時間があつたら余裕で………ん？」

普通に会話してただけど……、なんだろ。なーんか大変な事を訊いた気がするんだが。

「どーしたの？ 蓮」

「い、いや…… 『アシタのヒルにカワク』 っていう意味かなあ、つて」

「はい？ そのまんまの意味じゃん。今夜中に乾く訳ないでしょ？ 流石に。家に乾燥機なんて無いし」

「……………」

気のせい……じゃなかった。

いつの間にか一泊する話になってたんだ。

「え、えつと……？ つまりその……西野の家に泊まる、つて事？」

幾らオレでも流石に早速彼女のお家にお泊りく　なんて考えても無かったから、平常心でいられるはずも無かった。今　ゼツタイ顔に出てるって思う。

等の西野はと言うと、手に持ったタオルで顔とか髪とか拭いてて　こつち見てなかったから判らないかもだけど。

「……………うん。そーだね。今日は　徹夜で蓮と……………べんきよー会！　しよつかなあ　つて　さ！！」

……………うん。声裏返ってる。西野もきつと同じ様な気持ちなんだな、つて思った。いや　西野は勇気を出して誘ってくれてるんだって事も、よく判った。

据え膳食わぬは男の恥！

と言えるかもしれないけど、オレ達中学3年生だからな……………？

「……………じゃ、ビシバシ行こうかな？　その、……………夜の部もさ」

「お、おうっ！　望むところだーっ！」

西野はくるつ　と振り返って握り拳を作ってた。顔がやつぱり赤い。……………うん。オレと一緒にさ。

「と、その前にだ。着替えてくる。西野も着替えた方が良さ。風邪引くと大変だ」

「そうだね。うん。このままお風呂に入っちゃうよ。……………え、えーと　蓮、れん、れん

……………も……………えっと、いっしょよn「ちよつとストップ」むぎゅっ」

さ、流石にやりすぎだ。

「……西野。オレはさ 何処にも行かないから。そーんな急ぎ足にならんでもさ」

「う、ううん…… あ、あたしとしては頑張ってるんだ。だって、蓮ともつともつと仲良
く……。うー 蓮はなんでそんななんだー！ もーつと若者らしくエネルギーになれないのかー！」

「ぶっ！」

どんっ！ と両手で顔面に突つ張りされた。西野つてほんと突つ走るよ。一直線に。

「うー…… あたしは、とつても欲張りなんだ。蓮の事、もつともつと……その……」

もじもじしてる 西野を見て オレが取つた行動はーつだ。

自分の方に抱き寄せたよ。自分の胸に抱き寄せた。

「……判る、だろ？ オレだつていっぱいいっぱいだ。でも、西野のお母さんと約束もした。西野の事が大切だから……さ？」

結構強く抱き寄せた。苦しくないかな？ とか思う間もなかったよ。

でも、その甲斐もあつて多分さつきよりもずっと伝わったんだつて思った。

「ほんと？ ほんとにあたしだけでいてくれる……？ 蓮、すつごくモテるから あたしはずつと心配なんだよ」

「……だから それを言つちやあ西野だつて同じだつて。あのモテ方は異常だし……」

大草でもあそこまではならんし。オレの方が心配だ」

「こ、答えになつてな——い！ いよし！ なら あたしは ずくくつと蓮だけ！
ここに宣誓するもん！」

抱いた腕の力を弱めると、ピシッ！ と西野は手を上げたよ。眼もぎゅつ と瞑つて
る。

だからさ、オレはもう一度更に踏み込んだ。きつと不意打ち……になるかもだな。

「んっ」

「！」

そつと、西野の唇に……不意打ち。

軽めのヤツを。

「——誓います……つてな？」

「………つっ／＼／＼ ずるいゾ！ 不意打ちなんてっ!! んっつ!!」

オレは 軽いヤツで済ませただけ…… 西野はそーはいかなかつたみたいだ。

だって
勢いが強過ぎてさ。

お互いの歯がぶつかって結構痛かったから……。

33話

「ふああ……………。んん。やっぱ 朝は眠い…………」

休みも終わって今日から月曜日、つまり一週間の始まりだ。

日曜日のサザ○さんを見出した辺りから、段々億劫になつたりするのが今までだったんだが………… やっぱ今は違うかな。今、学校は楽しい。面倒つて思う事はあつたりするが、それ以上に気の合つてゐる奴らもいるし、何よりやっぱり西野かな。

「…………（日曜、結構長く感じたな）」

土曜がやっぱりアツと言うまだつたからそう思つてしまふんだろうな。

そう、土曜日の夜だった。

最初は冗談の類だつて思つてたんだけど…………本当に西野の家に泊まつた。

流石に同じ部屋つて言うのは やっぱまだ早いって思つてさ、リビングのソファアームも借りて寝ようとしたんだけど、結構強引に西野の部屋に連れてかれたよ。オレって考
えが古いのか？ つて思い始めた矢先に西野から。

『一緒に寝よーよっ！』

との一言だ。凄く誤解を招きそうな一言を頂いた。

うん。何度だつていつてやる。もーいい加減飽きたわ！つて言われたつてそれでもだ。オレだつて男だつて事。健全な男子中学生だつて事。だからさ、ほんとマジで刺激が強い。冗談だつたとしても西野に言われたら強力な会心の一撃だ。

それと西野ほど可愛かったら、やっぱり理性との戦いがメチャクチャ大変だ。最初は西野に健全なくとか、親に悪いとか言つて、まだガキの癖に 精一杯大人ぶつて、格好つけか！ つて 自分で自分をツッコミそうになつたし。いい加減ヘタレつてガチで思つたし。この辺もアホな姉を見てきたからなのかなあ、と何処かで姉のせいにしてたりもしてたよ。

そんなオレを見て、笑つてた西野は今度はまじめな顔してた。

『……大丈夫だよ。やっぱりさ私だつて、同じ部屋だけじゃなくつて、同じベッドでさ、蓮にずーっと引つ付けて寝たいんだケド……。うん、蓮が言う通りまだ中学生だもんね。……まだ、子供だもんね。ん?? 子供同士だつたら別に問題なかつたりする??』

『異性の身体。特別授業とか保健体育の授業受けてる時点でマズイと思いますか』

『もつ、もー！ 変に真面目に返さないでよっ！』

なんか男として情けないと言うか、ヘタレと言うか、色々と誰かに言われそうな状況だと思つたよ。

西野はベッドに腰掛けて、オレに言ったんだ。

『で、でもさっ！ 約束しよつ？ 頑張つて頑張つて、あたしにはまだまだ難しいかもだけど泉坂高校に受かったら……、そ、その……。ま、まだ蓮は早いって言うかもだけど、私は 確かなモノが欲しいんだ。蓮と結ばれたって言う確かな……も、ものが……。蓮からのご褒美で……。』

西野は凄く顔が赤い。やばいくらいに。

でも当然だつて思うさ。そもそも女の子の方から言わせちゃうつてのもどうかと思う。オレだつて西野の事は好きだ。抱きしめて、その先…… 初めては西野が良いって思つてるから。

オレはもう一度西野を抱きしめたよ。多分、結構強めに抱きしめた。西野の身体は暖かくて、柔らかくて、それでとても細い。折れてしまいそうだつて心配になる程に。でも、オレはぎゅつと抱きしめた。

西野も抱きしめ返してくれて……。それで、その やっぱ西野が相手だからさ、コレは仕様がないうつて思うんだ。

『あつ……。 う……。／／／れ、れん……。 そ、その当たつて……。』

『あ、う……。オレだつて男だから、その、勘弁してくれッ。今日は……。準備だつてしてないから……。ッ』

『ッ……!?!』

『西野が頑張つて高校に受かったら、って話しただろ。……約束するから。オレだつて、今かなりやばい。ほんと理性が飛びそうになる。西野の事……襲つてしまいそうになる。でも、それ以上に西野の事が大切だから。だから今日はここまでで……』

『うん……』

その後は、西野は布団を敷いてくれた。

何故だか、ベッドがあるのに西野は2人分の布団を敷いてくれて、隣り合わせ。

横になって向かい合つて 最後は手を繋ぎ合つた。『眠るまで離さないでね?』と言つて西野は笑つてたよ。きつと、オレは今日の日の事一生忘れない。

『おやすみ』

眠りに落ちる直前に交わした何気ない挨拶も、西野と沢山触れ合つた事も。約束をした事も。それに勿論、強烈なモノを御馳走してくれた事も。

ありふれたモノなのかもしれないけど、ひとつひとつが色んな意味で大変だった。そんな一日だったから。

んでも、実の所帰つてからがもつと大変だったりする……。

朝帰りしたオレに質問攻め、と言うより尋問をしてくるアホ姉の相手をするのが何よりも。ちゃんと友達の中で勉強会するって親には言ってるから、『ナニしにいったのっ！』って大声で訊かんでも判る筈だろうに。『べんきよー』って答えたけど、結構しつこかったよ。

……まあ うん。嘘は言っていないし。

はあ…… やっぱあたし一人じゃ身の入った勉強できないみたいなんだよね。我ながら情けないケド。

朝早く蓮が帰った日曜日。

あの後なーんにも出来なかったもん。ちよつと抜け殻になつちやつたつて言うのが正しいかも。勉強しようとはしてたんだけど……気付いたらやつぱり蓮の事考えててさ。入れても入れても頭から抜けちやつてるよ、絶対。

「ふああ……。蓮分が切れちやつたからかなあ……。日曜日ちつとも勉強捗らなかつたし。んー」

とりあえず、欠伸をひとつ。

うん、今日もすつごく冷える朝だ。いつもなら寒いのですごく憂鬱になるんだけど……あの日の温もりがまだまだ残ってるみたいなんだ。だって、すつごく温かかったから。

「蓮にばったり会つたりしないかなあ……。なーんてねつ。そんな上手く行く訳ないかな「ふあああ」って、……。へ？ あつ！」

一瞬誰だか判んなかったよ。でも、直ぐに判つた。だって見間違える筈ないもん。大好きな彼氏だもん。

「おっはよーっ！ れーんっ！」

「どわあっ!!」

思いつきり抱きついたよ！ でも、蓮……どわっ！ って何だかなあー。

「もー、彼女に対する朝のご挨拶が『どわっ!』って どーかと思うよ！」

「無茶言うなって……。オレ今目つむってたんどうぞ？ 眠たくて……」

「それでも、なの！ でも、目を瞑っても、眠たくてもちやーんとあたしの事受け止めてくれたのはGOODだよ！ 倒れちやっても良いって思ったのにさ！」

「流石に加減してくれて……。ま、それは兎も角」

蓮は軽く目を拭った後、あたしの頭に手を置いた。ぼんっ と一叩きして……。つてまた??!

「おはよ」

「えへへ……うんっ おはよっ」

子供扱い〜！ つて一瞬だけ思ったけど、何だか気持ちいいんだ。蓮に撫でてもらうのさ。それに今回は不意打ちアタックをしたし、文句言うの無しにしてあげたよ。

「さっ、早く行こっ！ 皆待ってるかもだし！」

「だな。真中は兎も角、東城は真面目だし。ん？ そう言えば宿題はやったか？」

「え？ 宿題？ 4組のと同じのってあったっけ？」

「違う違う。ほら 一昨日出したろ？ 教えてもらった成果だからって 気合入れてたと思うが」

「……………あ」

かんっせんに忘れてた……。そう言えばそうだったよ。勉強ばかりじゃなかったからって、ある程度までいったら宿題って事にして蓮と沢山話したり、失敗したけど料理とか時間に当てはめたかったから……。そ、それに 日曜日はほんつと抜け殻みたいだったし。

「……ら」

「あうっ」

「今日はその辺も力入れるからな？ 証明問題は 配点的にはそこまで無いが、西野の実力だったら覚えておいて損はないって思うし」

「うー、ゴメンね？ 蓮せんせー。今日は頑張るから！」

「ん。……まあ オレも昨日は なんか一日ぼーつとしてた気もするし。気持ちは判るよ」

蓮、そっぽ向いちやったよ。

きつとあたしと同じなんだ……って思ったら何だか嬉しくってき。そつと後ろから腕を取って組んだよ。

「えへへ。温かい？ 良いでしょ？ 今の時間帯なら、他の生徒殆どいないからさ……」

「ははは……。オレは湯たんぼ扱いか？」

「そつ！ あたし専用ですつ！ 貸出レンタル不可！」

ほんつとに楽しい。朝早くて眠たい筈なのに、一気に飛んじやった。

あつと言う間に学校。図書室についたよ。あたし達が一番乗りで次に大草君が来た。小宮山君はいなかったよ。初日は一緒に着たし、大草君と一緒にゝって思ってたんだけど、今日は別々なのかな？ って思ってたなら、蓮がため息吐いてた。

「これで来なかったら 三日坊主…… と言うか一日しか続いてないし。どうせ寝坊だろ？」

「アツタリ。流石だなー神谷。オレが迎えに行った時、小宮山まだ寝てたよ」

「はああく、これで泉坂狙うってんだから、ほんつと良い度胸と言うか図太いと言うか……。つと、後は真中か。アイツもちゃんと来るのか？」

「真中は大丈夫だろ。……何せ、東城がいるんだし」

「それもそつか」

男同士の会話ってヤツだ。通じ合ってるんだねー。うん。これが女の子との会話だったら肘打ちのひとつでもしてやろーって思うケド、大丈夫だったよ。

「それにさー。聞いてくれよ。この土日で泉坂のサッカー部の顧問と話をしたんだけど、いきなり新人メニニュー無しのハードトレやれってさあ」

「そんだけ期待されてるんだろ？そこは喜ぶトコじゃないのか」

「いやいやいや、オレまだ中坊だぞ？そこそこ練習はしてるとは言ってもいきなり高校生たちのあの地獄のメニニューやらされるって結構ヤバめなんだが!」

「おお、つまりは2〜3年の刺激にもなつて一石二鳥だ。ま、頑張れ」
「当て馬かよ!」

うーん……。確かにさー。まだ東城さんも真中くんも来てないとはいえー。まだ始まつてないとはいえさー。

「蓮っ！ べんきょーするんだろっ！ 重点的にするんだろ？ それに大草くんもー」
「うおっ つとービックリした」

「ははは……（西野の方も独占欲が強いみたいだな。……ちよつと悔しいけど、ほんとお似合いカップルだ）」

目の前に教科書出して、視界遮つちやつたよ。つい……。なーんか、大草君には意味深に笑われちゃうし。あそこまであからさま過ぎちやつたらさ。うう なんか恥ずかしいなあ。

「判つてる判つてる。もうそろそろ後の2人も来ると思うし……。つと、噂をすれば何と

やらだ」

がらつ、と扉が開く音がしたと思つたら、真中くと東城さんが来たみたいだった。うん。これで揃つたね。話題逸らしじや無いケド、2人に意識を向けよう！

「おつそーいよ！ 先に勉強始めるトコだよー」

「おはよ。一緒に登校とは、羨ましい関係になつたもんだなー」

「大草がそれ言うと、上から目線と言うか、嫌味と言うか……」

「ははは。純粹に真中の事おーえんしてるだけだつて。小宮山には悪いけど」

「いや、3人が早過ぎなだけな気が……」

「皆おはよう」

「東条さーん！ いきなりで悪いケドさ！ この証明問題なんだけど、あたしの解き方、合つてるかな？」

「（んん??）なんだ。もう解いてたのか……）んじや、最初は西野は東城に教わるか。……つてな訳で、オレと大草で」

話題逸らしは完璧OK！ あ、蓮が何か悪い事考えてる顔になつた。

「真中を集中的に、だな」

「スパルタは勘弁してくれー！ あんなのは、小宮山だけで良いだろー！ オレメンタル弱いんだからー！」

「ビシバシ行こうぜ、神谷！ 小宮山もそうだが、真中も泉坂レベルには程遠いし」
「大草うつせー！」

楽しい楽しい勉強会がスタートしたんだ。

真中君は変な汗漉く出てたけど、あたしから見ても上達していつてるのがよく判る！
うーん、えらそーには言えないけどさ。やっぱり蓮って教えるのが上手だからって思っ
ちやつた。東城さんも凄く上手だっと思うけど、蓮も……ね？

それで、もう学校の時間が始まるからお開きになって、あたしは1つに決意を蓮に伝
える事にしたよ。ちよつと……あたしにとつては悔しかった事の1つだしさ。

「ね、蓮。またあたしん家に遊びに来てね？ そしたらさ、次は蓮が唸る料理、作って見
せるからさー！」

「……うん。十分唸ったと思うんだが。あれって、初回限定じゃ……？」

「コラっ!! 初回限定版のじゃないよ！ 次の蓮の胃袋がっちりつかんで満足させ
るって事だよっ！」

「成る程。胃袋を……。んー、でもある意味、掴まれた……。驚掴みにされた気分だった
んだが……」

「こらああっ！ 蓮っ！ 今ぜーったい楽しんでるだろー！」

「あー、今のはオレの目から見ても西野と同じ意見だ」

「アレは判る種類のだよな。今の神谷の表情って……」

「あ、あははは……（羨ましくらい……楽しそうだよな。私も……真中くんともつと……）」

何だかもつと悔しい気持ちになった！　ゼーったいグウの音も出ない唸る料理作ってみせる！　って改めて思ったよ。

打倒！　蓮の胃袋っ　だよ!!

「(打倒?)　何か物騒な感じがしたんだけど……。気のせいだよな?」

「ふふんっ！　今に見てろよ、って事！　蓮の表情変えてやるんだから」

「ははは……」

34話

とりあえず、勉強会も佳境を迎えてる。

もうあまり時間無いし、それも当然なんだと思うさ。世の受験生であれば誰もが通る道だ！ 最後まで頑張って頑張り抜いた者がきつと最後に笑える、と臭いセリフを考えてみてた。勿論口には出さないけど。

兎も角、まだ頑張らないといけないのは紛れもなく事実だ。

事実……、なんだけどなあ……。

「いや、ほんと。やる気あるのか？ 小宮山。珍しく朝来てると思っただら……」

大丈夫かコイツ、って思ってしまったても良いと思う。

一応、先生ポジションで大草と一緒に真中や小宮山に教えたりしてる。教えるのつて、自分が理解してないと出来ないから、これ結構自分の為になったりもするんだよ。……まあ、基礎中の基礎部分は流石にアレだけ。

「顔近いわ！ それに、行きたいならそれに見合った努力しろっての！ それに、そんなに芸磨きたいんなら、佶元養成所でも目指せ！」

なんだかんだで最終的には、オレが説教するハメになるんだよなあ。何故か。

「あははは。やつぱ蓮って面倒見良いよねー。将来は先生、つてのも良いかも？」

「あ、それオレも思った。アイツ教えるの上手いし」

「オレもオレも。くうく 漸く数学が得意になってきた所だ！」

何か好き勝手言ってくれてる3人。

「勘弁してくれ……。身が持たん。それに 少々聞き捨てならんかな？ 真中数学得意になつたって？ んじゃ、コレ」

「……うげつ。か、確率の問題はトクイじゃないんだよなあ……」

「あほ。確率も数学じゃ。ここも重要だつての」

そんな感じで朝の勉強会は終了した。

有意義だったかどうかは各々方に任せるよ。

その日も学校が始まり、一日はあつという間に終わる。

西野との関係も——うん。良好のままだ。ちよつとスキんシップの勢いが強く感じるけど、あの料理の威力に比べたら断然小さいもんだから大丈夫、つて考えてたら、なんか心読まれたのか、ボディに良い感じでパンチ貰ったよ。

そんな感じの毎日だ。基本的に受験勉強優先で合間を西野に当ててる。西野も高校に入れたら……つて オレが横にいるのに あの日的事言ってくれるもんだから、寒い筈なのに、色々と熱かったよ。

そんなこんなで、もう私立高校の入試日前日になったよ。高校は集英高校だ。すべり止めの高校だが、油断せずに万全をきそう、と西野としつかり約束した。

あ、後 もう一つ 厄介な問題を抱えてしまったりもしてるんだ。

それは真中と東城の件。勿論 真中から。

相談があるから……つて言われて訊いてみたら、それだった。入試日前日だつて言うのに。

「うー、どーやって気持ち、伝えたもんか……。なあ、どう思う？」

「なぜオレに訊く？ それに勉強の話かと思つてみれば、そつちかよ……。随分と余裕

があるな。明日だぞ?」

「うっ…… かー! 良いじゃん良いじゃん! 神谷はどっちも余裕だから判んないんだよー、オレの気持ちっ!! それに集英なんてよゆうだ!! ぜってー受かってやる!!」

「わーったわーった。声のポリウム落とせつて。……まあ、集英高校に関してはオレも同意見だけど」

何か真中にオレの今までの苦労を一言二言で済まされたのが少々納得いかないが……。うん。勉強の部分は真面目にしていただけだから 何とも思わない。西野の方は、西野と付き合える様になったのは……、正直運が良かった、つて解釈してるんだよ。オレ。西野にはオレがモテるつて言われてたし、なんか変な声も聴いた気がするけど……。やっぱ自分の事を客観的に見れないんだよなあ。あんま認めたくないとも言いかも。つて言うか、『オレ、モテるんです』つて自覚するのもどうかと思うし。

そー言うので、調子に乗つて破滅と言うか、悲惨な事になったイケメン君つてヤツ、姉経由だが結構知ってるし。あまり自覚しない方が良いつて無意識で思ってるのかもしれないかな。

兎も角、今は真中だ。

「ほれ、小説の話とかで盛り上がってるんだろ? 楽しそうじゃん」

「あ、ああ。それはそうなんだけど……、やっぱ西野と神谷の姿見ると……その……」

「(……あ、東城もこんな感じでオレの事見てた気がする) はあ、似た者同士と言うか何と言うか……。まあ 兎も角だ。東城が好意的なのって、オレから見てもそう思うし、大草だつて言つてただろ? その辺は自信もつて良いんじゃないか? あんまし無責任な事は言えないけど」

「そっか、そっかな……? 自分から告つたりしないのってプライドが高いから、とかあるのかなあ——」

「は? 何? 真中つてプライド高いのか? それで?」

何か変な事言い出した。プライド高い感じは全くしないし。そっち方面のプライドが高かったら、喜々とあの恋愛参考書みたいなの、小宮山と読んだりしないだろうに。「ち、違う違う!! もし、東城がそうオレに対して思っちゃったら どうしようかなあーって」

「……だから、東城の方が告りに来てくれって、思ってるのか? うーん……(あ、いや、俺の時は西野からだつたし……)」

「いやいや、やっぱり、ここは男らしく、告白は男からだろ!? 映画とかでもそう言う場面多かつたし!」

「……………うぐッ」

「ん？ どうした？」

「や、なんでもない」

あまり男らしくないかもしれない。何せ、最初 自分で 西野に絡んでたあの連中を前にして、西野と付き合ってるって言っておいて、覚えてないし。その上『落ち着いて考えて直してみろ』的な事言っただけ……。西野が勇気ふり絞ってくれたのに。

その後…… そ、そのキス……して返事した気になっただけ……。やっぱちゃんと言わなきゃダメかな。

それで 真中とのやり取りは終わって気付いたら放課後。

西野と一緒に下校だ。いつも通り。その間もなんかやっぱり考え込んでたよ。

「やー、とうとう明日だね。蓮、大丈夫？ 油断してない？」

「……………」

「ん？ おーい、れん？」

「……………」

しっかりと、返事はしたつもりだ。成り行きかもしれないが、西野のお母さんにも伝えられたし、西野も喜んでくれたし……。でも、はつきりと西野本人に言えたわけじゃないからなあ。

つてずつと考えてたら、両頬を西野に捕まれた。これは メチャびつくりするよ、マジで。

「あらー」

「うわっ!?」

「うわっ、じゃないよ！ もう、なにポーつとしてんの？ いくら蓮が優秀だったとしても、変な凡ミスしてたり、繰り返したりしたら、判んないんだからね!! もつとしっかりしてよー。蓮！」

「あ、ああ。悪い……。ちよつと別の事を考えてて……」

「そんなの後後っ！ 今は受験に集中、入試に集中！ ほーら、口を大きく開けてー、『頑張るぞ!!』 つて言つて、ほらっ！」

ぐに、ぐにつ、とオレの頬を引っ張る様にして開ける西野。

うん……。確かに圧倒的に西野が正しいよ。真中にああ言つといて、オレがこんなじゃ世話ない。

でも、何を思ったのか——口に出てしまったんだ。

「——先に言わせてごめん。……オレ神谷 蓮は、西野の事が好きです。……大好きです。オレと付き合ってください」

「……………へ？」

なんでだろ。今言うタイミングだった？ って自分で思う。でも……言っちゃったものは仕方ないから、西野の返事、待ったよ。

「な、ななな、へ?? 入試の話なのに、何言ってるの!? とゆーより、わ、わたしたち付き合ってるよね? つき、あつてなかったの?? え……えええ!？」

思った以上に西野混乱してた。

まあ、間違いなくオレのせいだから、西野の手にそつと自分の手を当てて言ったよ。

「ははは……。いきなりでゴメンな。その、ちよつとこういう系のを相談されてさ、……告白は男からって話も聞いて……。オレ、ちゃんと覚えてなかった気がして……」

「……………え、えつと」

混乱はなかなか治らない様子だ。入試日前日の会話じゃないし、仕方ない。オレが悪い。つて思ってたなら、西野の顔が赤くなってるのに気づいたよ。それで笑顔になつて言ってくれた。

「ふ、ふふ。ふふふ。うん。こちらこそ喜んで！ 私も蓮の事が大好きです」

「つ……。あ、ありがと、な」

もう付き合ってる。お互いが好きだと言っていて、……。キス、までしてるんだけど、それでもヤツパリくすぐったかったし、嬉しかったよ。

「いえいえ。でも なんだか意外だったかなー。蓮ってそう言うの気にしたりするんだ？」

「あー、うん。……。オレも戸惑ったりしてるよ、正直。……。（絶対 真中のせいだ）」

「ふふつ。そんな感じだよね？ 違う蓮の一面が見れてあたしは満足だよっ！ うーん、明日の入試もこれでチャージ100%！ 合格率も100%だよー」

油断しないようにー、なんて野暮な事は言わなかったよ。オレからこの流れにしたんだし。西野は2，3歩前に出てくるりとこっちの方を見た。

「それに あたしはねー、蓮に告白できて、想いが通じて、それで……。き、キスまで出来たんだよ？ それも大好きな人とつ。あれ以上の幸せなんて他にはない、かな？ 振り回される蓮も良いかもだけど、あたしは幸せだからね？ 結果オーライだから良いじゃ

ん」

「……っ。そう、か。そうかな。うん。オレも嬉しかった。はははは。何かゴメンな？
ちよつと振り回して」

「いーえ、こういうのは大歓迎っ！ あたしもすっごく嬉しい。ま、まあ ちよつと恥ずかしいけど……」

今更だけど、キョロキョロと周囲を見渡してたよ。

オレもつられて見た。誰もいなくて良かった。

そして、翌日。オレ達全員、すべり止めの高校を難なく合格。

昨日の事もあって、色々感慨深まったからかな、皆いるのに、そつと西野に……抱き着いたり流石にしなかったけど、そつと手を取った。西野も同じ気持ちだったみたいだ。

最高に綺麗な笑顔を向けてくれたから。

35話

「ふーん。……オレさ、小宮山程は言っていないけど、今日ほど真中の事バカだと思った事は無い。……でもまあ、最初の頃から薄々感じていた事は間違っていないな。……うんうん」

「ぶえーくつしよんつ!! しみじみ言うなっ! 妙な感情も込めるな!! そんな演技でみんななら、ゼーったい俺の作る映画の配役にするからな!」

「なんでそーなるんだ。……そもそも、なんでオレにそっち方面を要求すんの? (歌がどーのこーのって言ってた癖に)」

集英高校への受験も終わって安心感に包まれてた。

難易度的には肩慣らし程度だったんだけど、まあ所謂一山超えた、って気分だったんだろう。

そんな時に聞いたんだ。真中のアホが2階の窓からダイブしたって。その先が校長の池。そこに向かって2階からダイブしたんだって。

あまりに無茶苦茶な話だったから思わず2回訊いたよ。

なんでも、昼休みの時間に東城が書いてくれた小説読んで、またまた心を射貫かれた！らしくてさ。その想いを言葉に変えて情熱をこめてぶつけようとした（大草談）らしい。

丁度 東城は、西野と勉強の事話してたらしく、そこに真中が抑えきれない欲望？を持って状況もちやんと把握せずに窓からダイブ。それも2階の窓からだ。……まあ怪我しなくて良かったとだけは思うよ。馬鹿は風引かないよ。って聞いた事あるけど、怪我はするだろうし。

兎も角、西野と東城に引つ張られながらそのまま保健室に直行。

でも幾ら私立の試験が終わったと言っても本命は泉坂だって事忘れてんじやないか？ コイツって。って素で思ったよ。割と真面目に。

「本当にびつくりしたんだよ？ だって 突然 真中君が上から降ってきたから……」
「はは、まあそりやそうさ。でもアレだな。今度は真中がさ。だ。上から降ってくる、なんて状況になるなんて滅多にない事だろうし」

「あ、あうう…… わ、忘れてくれると嬉しいなあ……神谷君」

ふと思いつ出したのは、東城と初めて出会った屋上での事だ。上手く助けられた、と思つたのに、東城は落下してしまい、真中がそれを目撃した。……東城の見なくても良い所も見たいが、それはそれだ。オレは見えないし。

「とりあえず、だ。もう本命高校の受験日近いんだから。今はそつちに集中しろつて」
オレは真中の机に、どんつ、と『わかりやすい高校入試対策』つて言う参考書を置いた。

今更 勉強したつて、と思いがちだが、ボーダーラインも妖しい真中や小宮山は最後の最後まで無理にでも詰め込んだ方がまだ良い。身の丈に合つてないつて先生たちにも言われるほどの難易度の高校選んだんだし、ちよつとでも足掻け、と思う。

「うげえ……」

「うげえ、じゃねーつて。東城は真中の事宜しく。ああ、後ついでに大草は小宮山係で」
オレは東城にバトンタッチ。笑顔で領いてくれた。

「オレはついでかよ」

「つっーか、俺係つてナンだ!!」

大草と小宮山辺りが煩い。主に小宮山だけだけど、オレはそのまんまの意味 つて一言答えた後教室を出た。

実はついさつき携帯が鳴ったんだ。それで見てみたら西野からのメールだった。呼び出しを受けた場所は屋上だから、直ぐに屋上へ。

教室とかは 元々待ち合わせ場所として除外してる。西野がいたら男子が沸くからだ。……あんまり認めたくないけど、オレがいたら女子がちよこちよこ来るみたいだった。

何でも本当に西野と付き合ってるのかどうか自分の目で見て確認する、って事らしい。

間違えてないんだけど、人前で堂々と色々する程 オレは目立ちたがり屋じゃないし、西野もあまり人前では好ましく無いらしい。以前までは 普通だったんだけど、何だか最近は、だって。何か心境の変化でもあったのかな？ と思ったりもしてる。

「んー……、西野が来たら、それ訊いてみるのも良いかもな」

オレとしてはありがたい事だが、ちよつと気になったりする。男女問わずのクラスの人気者なのが西野。人目を避けるくなんて正直似合わないから。

と、色々考えながら 屋上の扉をガチャッと開いたら。

「やつほー！ れーんっ！」

ほんとナイスタイミングで西野が笑顔で迎えてくれた。

計ったのでは？ って思える程見事なタイミングで笑顔で迎えてくれると言う粋な計らい。ダメージがある意味溜まつてるオレの心を癒してくれそうだ。（主に、お気楽組の勉強を教えてて負ったダメージだろう）

「おつす、西野」

「おつすっ！ 蓮っ」

手を上げて応え、西野は笑顔で敬礼。うん ……やつぱりかわいい。

「それでどうしたんだ？ 突然屋上につて。昼休みでもないのに」

「えー、今日は 朝の勉強会で以外 蓮に会えてなかったもん。ちよつとの休み時間でも、会いたいくつて思うの普通じゃないのー？」

「あー……うん。同感。普通だなそう言われてみれば」

「えへへ」

人前、いやいや いつものメンバー真中達の前でもあまりやらない受け答えだつて自分も判るな。でも 自然で言えるようになったのはやつぱりうれしいかもだ。自然に言いたいって思うくらい西野の事が好きだから。

「と言う訳で……、今から、蓮分を補充するのだー！」

「っ！ っ！ っ！ っ！ っ！ っ！」

がぼつ、つと両手を広げて飛び込んでくる西野。これは予想してなかったので不意打ち気味だった。でも よそ見してた訳ではないから難無く受け止めた。

「明日、泉坂だよな？ 大本命の」

「ああ、そうだな」

「蓮分。蓮のエネルギーを、私の中に！ これで敵無しだねー。頑張れるー！」

「お役に立てて何より。西野サマの仰せのままに〜」

「ふっふっふっ 苦しゅうない苦しゅうない。えへへ」

ぐりぐり〜 と二度三度と頭を摺り寄せて、満足したように西野が身体から離れた。

「うんっ、よしっ。堪能したした！ それで、蓮。私に聞いてみたい事がある、とか言ってた気がするけど、なに？」

「ん？ あー、ほら 以前は普通に教室入ってきたり 呼んだりしてたけど、無くなったなく っと思っただけだよ」

「あー、それ。……だつてさ、沢山来るでしょ？ 色んな人が。蓮分は私だけのものだから」

べっ と舌を出している西野の頬は仄かに赤く染まっていた。独占欲がある〜 っ て西野は言ってたけど、それはオレだつて否定しない。

他の女子達に悪いケド やっぱり西野が一番可愛い。学校一の美少女と言う肩書は伊達じゃないって事だ。確かに東城も凄く綺麗だったがオレは西野だ。

「な、なーに？ あたしの顔ジューと見て。何か変……だった？」

「いやいや。嬉しいなー、って思っただけだよ。ほれ、オレって引つ込み思案、だろ？」

「え？ あはははー。大草君や真中君、小宮山君たちと一緒にいるトコ見たら、全然なんだけどね？ 普段はそんな感じかなつ、確かに」

「……あれはあいつらに良い意味で毒されてるからじゃないか？ まーそれは兎も角」

オレは西野に向かって笑いかけたよ。

「オレは西野分を補充、って事で」

「わっ」

きゅつ と西野の頭を自分の胸に抱き込んだ。結構大胆な行動取ったな！ って我ながら自分を褒めてあげたいよ。……屋上で2人きりだからこそ出来た。うん絶対そうだ。

「え、えへへく あたしも更に補充くだね？ ん！ よーし、学校帰りにちよつとデート

しない?? いいでしょ?」

「うん？ まあ用がある訳じゃない、が……、明日だぞ？ 大丈夫か？」

「此処まで来たら勉強したって今更だよ。今は英気を養って蓮分を更に補給して、心と

身体をリフレッシュさせる方が良いじゃん」

「まあ…… 否定はしない。西野も十分ボーダーライン突破してるし、オレもそうだが、ケアレスマミスが最大の敵っぽい。……そもそも今慌てるって 確かにもう遅いし。うん。良いよ」

「ほんとは？ やった。んじゃ ぜーったいカラオケも行くからね！」

「おおせのままに。姫様」

と言う訳で放課後デート。

試験日前だけど、まあ 良いリフレッシュになると思うな。真中とか小宮山にはああ言つていてなんだけど、嫌味っぽいが ちよつとレベルが違う。

……それで何処からともなく、小宮山辺りが嗅ぎつけてきたけど、一蹴したよ。帰つて最後まで勉強しろ、って。

場所はカラオケ sea。

前にも一緒に行つた場所で店員さんも顔を覚えてくれたみたいで微笑ましそうに笑つてたのが印象的だった。行きも帰りも笑顔。『お楽しみでしたね?』とか言つてきた時は流石に ぶっ！ って拭きそうになつたが 西野はただただ笑つてるだけだつ

たよ。

オレは何だか恥ずかしかったから、さつきとエレベーターに乗ったケド。

「あははは 結構たくさん歌ったね——。やーっぱり、蓮つて歌上手！ 途中で何度うつとりしたか。余は満足じゃぞ！」

「いえいえ、西野サンも素敵でしたよ、ハイ。ありがたき幸せ〜つてな感じ」

まだ熱が冷めない、と言わんばかりに西野はハイテンション。当のオレも同じくだった。歌をうたうのが純粹に楽しかった、というのもあるけれど、やっぱり 西野と一緒が一番か。勿論、西野も上手かった。これはお世辞じゃない。

「ん〜、喉はだいじょ〜ぶみたいだね。沢山うたったんだけど、まだまだいけるかな？」

「それはまた今度だな。……やっぱりさ、あまり心配をかけたくない」

「あつ……。えへへ。そーだね。ありがと」

西野は、にっ と笑つてウインクした。

勿論、心配かけたくない相手は、西野のご両親だ。娘を心配するのは当然だと思ふ。一人娘であれば尚更だし、心配してて外にまで来てたから。今回はしつかりと事前に連絡を入れて、帰る時間も伝えてるし、部屋を出る時に西野はメールも送つてた。

名残惜しい気持ちはよく分かるけど、今日の所は終わりだ。明日入試だし。

「今度はちゃんとお母さんに紹介したいなー。あの時はちよつと私情けなかったし……」

「ん。ならオレも……、あ。うううん……」

「あはは。蓮の事が大好きなお姉さんの事？」

「う………。全部 否定したい所だけど、……一部は出来ん」

前半部分は赤くなる、後半部分は痛くなる。

でも、以前はちゃんとした挨拶出来てないって思ってるから いつかはちゃんとしたいよ。

「あははは！ お姉さん蓮の事が大好きだもんねー。私とも気が合いそうだと思うんだー！ ちよつと怒られちやいそうかもだけど。……あ、そーだ。受験で受かったら——
——ツツ！」

いきなりだった。いきなり、ガクツ！ と大きくエレベーターが揺れた。

「え……、何？ 今の揺れ」

「……故障か？ ボタンの照明が全部消えた……」

「ええい！ ほ、ほんとだ。た、確か 今2階くらいじゃなかったっけ？」

「ああ。カラオケが5階。はつきりと覚えてる訳じゃないが、表示灯の3が光ってるの
は見たと思う」

「うえ〜。じゃあ閉じ込められちゃったって事？ わー、私のせーかも！」
「?? なんで西野の？」

故障したのは吃驚した。エレベーターに閉じ込められるなんて経験は流石にないからな。でも、吃驚するよりも、西野に対する疑問の方があつという間に上回つたよ。

「だって、蓮ともつともつと一緒にいたいなー！ つてすぐ考えてたら、ほんとになつちやつたんだもん……」

「……………」

「つて、黙らないでなんか言つてよ！ 恥ずかしいじゃん！ せ、折角和ませようと思つたのに」

「あ、ああ。成る程……」

和ませようとしたらしい。

こういう事態つてパニックになる事が一番危険だつて聞いた事ある。だから、オレは軽く深呼吸吸して、西野の頭をそつと撫でた。

「ありがとな」

「もー、遅いよつ」

「ははは。それは兎も角、早く店員呼ぼうか。非常電話」

オレはエレベーターに常備されてる緊急用の非常電話を手を取つた。

ボタンを押すタイプじゃなくて受話器を取ったら自動的に繋がるみたいで、ものの数秒で繋がった。

「もしもし? はい。ビル内のエレベーターが突然止まってしまいました、ええ。多分2〜3F辺りで停止したみたいです。はい。人数は私ともう1人の2人です。……はい。宜しくお願いします」

初めてかけてみたけど、存外囁む事なく言えたのは良かったな。横に西野がいるし、囁んじやったら格好悪いし。

「どーだった?」

「ああ、『直ぐに調べるから待っててください』だった」

「りょーかい。んじや、座って待ってよう」

「だな。結構立ちっぱなしだったし」

動いてないエレベーター内って駆動音とか全く無くて凄く静かだ。

それがきつと、不安感を煽るんだろう。閉所恐怖症だったりするとそれだけで大パニックになりそうだ。

暫く色々話してて、西野もやっぱり不安になったんだろう。会話が途切れた後の間が凄く静かだったから、意識しただしたのかもしれない。

「——止まったエレベーターの中にこんだけ長くいるのって初めてだけど、ほんと静

かだね。本当に直るのかなあ……?」

「大丈夫だ。……安心しろ。傍にいるから」

「……………あ」

西野は、マフラーに半分顔を埋めて不安そうな顔をしていた。

そんな西野をそつと抱き寄せたよ。やっぱり安心してもらう事。落ち着く事が何より一番大事だ。

「へへ。安心できた」

「ん。良かったよ。後ろ向きより前向きだ。きつと大丈夫。それに——笑う門には福来る、だろ?」

「うんっ」

オレのエゴかもしれない。でも少しでも沈んだ西野を見るのは、嫌だった。

だからかな。西野が笑ってくれて本当に嬉しかったよ。

「ふ——っ」

「ん? どうしたの蓮」

「いや、結構タイムリーに、『人を笑わせること、これはいつちばん難しい』って訊いたからさ。西野が笑ってくれてよかったなあ、と思って」

「あっ!! それって桂歌丸!」

「——流石」

「もちつろんっ！ 私ファンだもん」

程よく笑いあつた後だった。

止まった時の様な振動があつた後に、ウィーンって駆動音が聞こえてきた。

「ほっ。流石蓮だねー。早速福来る！ だよ」

「んんー、これはオレもビックリだ」

笑つてた時に動き出した。福か？ と言われればちよつと違う気もするが 兎も角

安堵したよ。

……でも、その安堵感もすつ飛ばす出来事がこの後あつた。

ぼーんっ、と音が鳴って、扉が開いたかと思つたら。

「れんっつっ！」

なんか、妙に聞き覚えのある声がエレベーター内に響いてきたんだ。

——
妙に、じゃない。すげえ聞き覚えのある声だった。

36話 ブラコン+……

「……………」

3人とも、時間が止まったみたいに固まってる。

いや、寧ろ状況的に考えたら故障したエレベーターの様に止まったって表現した方が正しい……。

ザ・オールドもそんなに長く止め続ける事は出来ないからな。

取り合えず、止めてられる限界まで来たせいかな、いつの間にやら3人はエレベーター内から脱出して外を歩いていった。

いつの間にも外に出たのか……、本当に思い出せないから不思議だ。

身体は動いているけど、……沈黙が続く。

西野、オレ、姉の順で並んで歩いて……。

「蓮。その子の事なんだけど」
「うん」

先に口火を切ったのは姉だった。

ついに来た………って思ったのは言うまでもない。

何せ姉は超がつく程の過干渉だ。最近はより過激になってきているから過激派だつて言っている。

そんな荒ぶる姉から、西野の事を守れるのは一体誰なのか？

そんなのは決まっている。オレしかないんだ。

「あつ………う………」

それに、あの西野も流石に今回は緊張している様に見える。

突然会った事もそうだけど、何より姉の正体を知って驚いているんだと思う。

自分の姉である《愛》は有名な芸能人。その容姿は身内びいきが入っているかもしれないが、かなりのもの。完璧で究極で無敵だつて思ったつて良い。そこまで言えば自分も姉の様にシスコンか？　と思われるかもしれないので実際に口にはしないが、本心で

はそう思ってる。

普段が普段だけにギャップが激しい。

今の本気モードな姉は纏うオーラが凄まじく、あの元気いっぱい西野でも、やつぱり萎縮してしまうらしい。

「オレの大切な人だよ。……オレの好きな人。彼女。西野って言うんだ。西野——
つかさ」

「れ、れん……」

真面目な話であれば、基本的に姉は正しい事ばかりなので否定する事は少ない。従う事が多い。

でも、今回のこればかりは姉には従えない。ずっと世話になってるのは解ってる。姉のおかげで頑張ってるだけあって自覚だっている。

でも自分が好きなのは……、大好きなのは他の誰でもない。隣にいる西野つかさなんだから。

「そっか。……そうだよね」

姉は何処か遠い眼をしている様に見える。

ひよつとしたら……まさか、もしかしたら……西野にナニカするかもしれない。宣戦布告のような事をして、色々仕掛けてくるかもしれない。

そう思った。

そして、もしも……しないと思うし思いたいが、万が一にも西野を傷つけるような事をするなら。例えば家族であっても、例えば姉であっても容赦する気はない。絶縁だつてする。……相当へこむだろうし、今後どうなるか解らなくも思える。

でも、それ以上に西野が悲しむ姿なんて見たくないから。

「あ、あのー！」

西野が声を上げた。

上ずった声、高い声が周囲に響いてくる。

「わ、私は神谷蓮君とお付き合ひさせてもらってる西野つかさと言いますっ！ え、えと

紹介は、蓮君からして貰ってましたよね!? ごめんなさいつつ! そ、それと蓮君には
凄くお世話になって、いつも迷惑ばかりかけちゃって……、で、でも私はとても好き
で、大好きで、えと、えと——」

顔を真っ赤にさせながらテンパってる西野を見ると、本当にいとおしく思う。

自分の顔もきつと赤くなっている事だろう。周囲が暗くなつて、夕焼けになっている
から多少誤魔化せてるかもしれないが、絶対に赤くなっている。

心臓の音が大きく、速く脈打っているのが手に取る様に解るから。

そんなとき、だ。

姉が何やら手を広げた。

もしや、西野を叩いたりするのではないか!? と一瞬硬直し、直ぐに守ろうと行動に
移そうとしたけど……何やら雲行きが……。

広げたのは両手。

もしも、叩いたりするのなら利き腕である右だけで良いだろう。

でも、姉は両手を広げている。

何をしてるの? と疑問に思う間もなく。

「かっつっつわいい〜〜〜♡♡」
「わぶっつっ!?」

西野に向かって盛大に、大胆にハグした。

姉の抜群なプロポーションと言うかスタイルと言うか……、兎に角同年代、日本人の平均よりも遥かに豊かな、豊満な身体で西野の顔をうずめた。

「わーわーわー！ エレベーターの中で見た時からピピっ！ ってきてた！ 実は我慢してた!! いきなりだとアレだし、ただの友達とかじゃ、アレだし！ ほんつとすっごいカワイイ！ こんなカワイイこ、芸能界こっでも私が知る限りいないよお!! わーわーわーわー！ だって、こんなカワイイ子が私の妹になるんだよねっ!! 蓮言つたよね!! わーわー最高だっつ!!」

「え、えええ……??」

「私が、今日からお姉ちゃん……、えっと、つかさちちゃんのお姉ちゃんだからねっ！ よ

ろしくねー！！」

想像だにしなかった。

姉は、超が付く程のブラコン過激派な姉は……、まさかのシスコンでもあった様だ……。多分、誰でも良いとは言わないが、西野がカワイイのは自分も知っているから、あの意味お眼鏡に叶った、と言うのかもしれないが……。

「いや、ほんとゴメン、西野……」

「もう、良いって。確かに窒息しそうではあったけど、何とか生きてるし？」

「あまりにも予想外な行動だったから、とめれんかった……。と言うか、姉と対決する気概でもあったからさ……」

その後、いつまでも離さない姉に四苦八苦。大好きホールドゥー！とかなんとか言いまくってた姉だが、ある程度は満足したのか、西野を放してくれた。……西野は無事

だったんだけど、何やら姉の胸を凝視して、見比べていた様な気がするが、その辺りは気づかなかったフリをしている。

「でも、まさかアイドルの愛ちゃんが蓮のお姉さんだったなんてねえ。すっごい驚いた！ 実力派アイドルだった筈だし、蓮の歌が上手なのも納得だなー」

「……………はははは」

「んー」

西野は何やら考え事を少しだけして、少し駆け足でオレの前に歩いて、振り返った。

「ひよつとして、だけど。蓮が他人に歌披露するのに抵抗もっちゃったのって、お姉さんが関係してる？ ほら、やっぱアイドルやつてるお姉さんだからさ？ 負けちゃったり〜とかで」

「っ……………」

まさか……………そこを突かれるとは思わなかった。この流れで言われるとは思わなかった。

だから、少しだけ固まってしまった。言葉が出てこなかった。そんな姿を……西野は視たからだろう。慌てて手を振った。

「あ、いや。無理に言わなくて良いよ!? ごめんごめん。ちよつと私も興奮しちゃって……デリカシーない事聞いたって今思った。ごめん! 今のなしなし! 忘れて! ゴメン蓮っ」

ぶんぶん、と西野は手を振って謝った。

うん、ほんと今更だから別に良いよ。……いや、西野だから良い。それに今後ひよつとしたら真中の映画製作? とかで色々ときゃスティングされるかもしれないし……、何より、西野が好きだって言ってくれてるし。

もう、過去の事は良いだろう。

「いいや。大丈夫。そうだよ。そうだったんだ……。だって、オレは歌えてるんだ」
「え……?」

以前までの自分だったら……、きつとどんな状況だったとしても、他人の前で歌を披

露したりしないだろう。

仮に聞かれたとしても……次はもっと注意したり、聞かれたくないとは拒絶していた筈だった。

でも、相手が西野だから……、西野だから出来るんだって改めて実感した。

歌は、楽しいもの。聞いてもらえる事が、褒めてくれる事が楽しくて嬉しいものなんだ、って……思い出す事が出来たんだ。

こんなに簡単な事なのに、ずっとずっと忘れていたんだ。

西野と出会うまでずっと……。

「西野が傍にいてくれるから、オレはなんだって乗り越えれそうだ。だから、大丈夫だ」

「ッ……」

笑顔。

西野の前ではなるべく笑顔でありたい。

西野の笑顔を崩さず、そして自分も笑顔でありたいんだ。

「ちよつと情けない話、なんだけどきさ？ 姉が芸能界に入つて活躍してて、自慢の姉だつた。だから、オレも一緒に頑張ろうつて、追いかけてようつて、それがオレの道だつて思つてた時期があつたんだ。歌は昔からずつと一緒に歌つてて大人にも褒めて貰つて自信はあつたから。……でもやつぱり、ああいう世界つて兎に角倍率が高いからさ。生き残りかけた真剣勝負な世界で、……愚直で真つすぐなだけ通じないじゃない。楽しく歌つてるだけじゃ無理なんだつて思い知つたんだ。……あまり綺麗な世界とも言えないからさ」

姉の影響は凄かつた。

いつも一緒にいる所を見られているから、親類である、姉弟である事はもう周知の事実だつたから……誤魔化しがきかなかつたんだと思う。

どうせあの愛の弟だから。愛の身内、弟だから選ばれるんだろ。

そんなのずるい。……全然大した歌じゃないのに……ずるい。生まれで決まるなんて。

ウチの昌ちゃんの方がずっと上手いのに、結局コネがモノを言うって事なのね。どう足掻いたって無駄だって言うの？　すごく頑張ってきたのに。

これまで頑張ってきたのに、そんなので決まるなんて納得できないよ。

——うあああんつつつ!!!

ノイズが、不協和音が……沢山聞こえてきた。耳に入ってきた。気付いたら、歌をうたう事がもう楽しくなくなっていた。……人前で歌う事が、嫌になってきた。もう……嫌になった。

でも、歌そのものは嫌いになれなかった。

だから、1人で……1人きりでずっと、ずっと口遊んでいたんだ。

「今思えば、あの辺りから姉が異常にオレに執着する様になったのかもしれないな。……ひよっとしたら、弟が自分の事を嫌いになるのでは？　とても思われちゃった……」

のかもね」

「……そんな事、ある訳ないのにね」

「え？」

西野が割って入る。

「だって、蓮は誰よりも優しいから。……大切な人を、大切な家族を嫌いになるなんて、絶対じゃない。そうでしょ？」

心を見据えてくる。

そんな目をしている。

導くであろう答えを最初から西野は解っていた。西野だから……解ってくれているんだ。

「……まあ、うん。本人の前じゃ言えないけどね」

「ふふっ」

西野はぴよんつ、と前に出た。

「今日は本当にいろんな事が起きて大変だったね。ずっと一緒にいたいくっつて願ったからエレベーターに閉じ込められちゃって、突然アイドルの愛ちゃん……愛さんが開いた先から出てきて、実は蓮のお姉さんだって。……ほんつと、短い間にこれだけの事があつて……、改めて実感したよ」

更に一步前に出て……西野はそつと蓮に口づけをした。

「私、蓮のことが好きだって。大好きなんだ、つて」